前田遺跡

長野県牟礼村緊急発掘調査報告書

1981

牟礼村教育委員会

序

牟礼村教育委員会
教育長　米沢竹志

前田遺跡は、北の台、殿屋敷に隣接する遺跡で牟礼村の略中央に位し、西に霊峰飯綱山を、南に三登山、東に髻山を望んでいる。戦国の頃甲越の戦がこの地で盛んに行われたことが伝言されているが、世の変遷と共に住居地も色々と変ったことと思われる。

村内には縄文、弥生、古墳、平安時代と思われる43ケ所の遺跡があり、数多くの包蔵物が確認されている。前田遺跡もその中の一つであり、文亀永正の頃に島津權六郎が居住していたとも伝えられていることから島津某氏の旧地であったことと推察される。南北に空濠があり、矢筒山をとりまく附近一帯には大町、中町、舞台、市之口、家老地、矢倉地等往古を偲ぶ地名が群在している。

昭和55年度実施の県営圃場整備のためこの地が破壊されることとなり、54年秋に試掘がなされ包蔵物が確認され発掘調査を行うことになった。

この調査は7月17日より8月7日に至る20余日にわたり、延360人が発掘に参加された。主任として島田恵子氏が当られ、佐藤、綿田、近藤、横山、篠塚、甘利の諸氏と共に終始努力を傾注され、関係者へ発掘情報を知らせる等適切なご指導により和気藹々の中に作業が進められた。当初より地元の皆さんの深いご理解と文化財を究明しようとする熱意をもたれ総代、分館長さんをはじめとして、団長青山紫朗先生の下に炎暑にもめげずご尽力下され予期以上の成果をあげ得た。連日のご苦労に心よりお礼を申し上げる。

過ぎし日に調査された丸山、茶臼山、明専寺遺跡をはじめ今回の調査によると、土民は飯綱山麓に居住し文化の移りとともに高嶺地より逐次平坦地に移住したものと思われ、昔を知ることの出来る貴重な資料を得たことは今後の教育上深い喜びとするところである。

昭和54年以来県文化課関孝一、郷道哲章、臼田武正、三指導主事がご多忙中にもかかわらず、現地を訪れ直接指導を賜り全般にわたり順調に調査が進められ得たことと村内外関係各位の暖かいご援助をいただいたことも感銘深く厚く御礼を申し上げ筆をおく。

55. 12. 22

序

牟礼村文化財調査委員
団　長　　青山　紫朗

丸山遺跡、明専寺・茶臼山遺跡に引続き、今回発掘調査された本村北の台地籍の前田遺跡は黒川（現在の東・西黒川）のほぼ中央にあり、古くから古語に語り伝えられた。「黒川恐し七沢八谷」とよばれ、その言葉の通り幾谷川の水が悉く八蛇川に集まってくる。この八蛇川は出雲伝説の八蛇伝説に合致し、水による農耕を意味し、帷度前田遺跡は七沢八谷にかこまれた中央台地にあり、地味は肥沃で豊恵の土地である。

また、西北に飯綱・黒姫・妙高山がそびえ、東に斑尾山、菅平高原を望み、近くに八筒山（八筒城跡）があり、往時の住居は絶景の地として居を構えたであろうと推察される。

昭和55年度県営圃場整備が実施されるに当り、54年10月31日、県教委文化課関孝一指導主事の指導のもとに、遺跡範囲の確認調査が行なわれ、本年６月に入って地元西黒川の正副総代、西黒川分館長以下、それぞれの立場からの役員による協力体制を整え、７月15日より発掘のためのグリット設定がなされ、17日の神事ならび結団式に引続き、地元作業協力者の協力によって８月７日まで発掘調査の目的を無事達し得たことは、ご同慶にたえません。

またこの間、牟礼東・西小学校５・６年生並びにクラブ活動の児童の皆様には、見学のかたわらお手伝いの協力を得、なお発掘のため協力くださった関係機関の方々、村内関係各位に対し、厚く御礼申しあげると共に、直接この調査研究に報告書作成まで昼夜をわかたず努力いただいた調査団の方々に衷心より感謝申しあげます。

丸山遺跡を始めとしそれぞれ時代の異った遺跡が発掘され、その歴史が解明されたことは喜ばしいことであり、先人の生きざまの深さをつくづくと感じられるのであります。

「どんなに明確になったと思われる歴史も、発掘なかばの古墳と同じである。奥の奥に何がひそんでいるか。どんなに解釈しても解釈しきれない人間のいのちのふしぎが、あるいはその音声が、古墳の深い地下に埋もれている。」　（亀井勝一郎）

55. 11. 20

例　　言

1．本書は、昭和55年7月15日～8月7日までにわたって発掘調査された、長野県上水内郡牟礼村大字黒川字北の台1759番地に所在する、前田遺跡の調査報告書である。

2．本調査は、北信土地改良事務所の委託を受けた牟礼村教育委員会が実施した。

3．本調査は、森　尚登を発掘担当者とし、長野県考古学会員有志を調査員とし、地元西黒川地区の方々の協力を得て実施した。

4．本書に挿入した遺構、遺物の実測図作成及びトレス、掲載した写真は、島田恵子、綿田弘実、近藤尚義が担当、撮影したものを使用した。

5．本書の執筆は、発掘および整理担当者が行ない、文末にそれぞれ文責を記した。

6．本書の編集は、島田恵子が担当した。

7．本遺跡の資料は、牟礼村教育委員会の責任下に保管されている。

なお、本遺跡調査に関して、県教育委員会、関孝一、郷道哲章、臼田武正の各指導主事には、適切な御指導をいただいた。また、県考古学会員武藤雄六、宮下健司氏からは、報告書作成に関し種々の御助言をいただき、更に地元西黒川の方々からは、総代さんをはじめとした地区ぐるみで、物心両面にわたる御援助を賜わりここに厚く御礼申し上げたい。また、西、東小学校の職員、児童の方々の御協力に対して感謝申し上げます。

凡　　例

1．各遺構の略号は次の通りである。

住居址――H　　土坑――D　　ピット群――P　　溝――M

2．住居址実測図の縮尺は$\frac{1}{60}$、土坑$\frac{1}{40}$、カマド実測図の縮尺は$\frac{1}{20}$である。

3．土器、石器実測図、土器拓影の縮尺は$\frac{1}{3}$である。ただし大甕類の縮尺は$\frac{1}{4}$とした。

4．遺構平面図中に使用したスクリーントーンは焼土を表わす。また、土器実測図の右半分における点は、内面黒色土師器を示す。

5．断面図及びエレベーション図の平面レベルは、あ～か列までの標高は536.90m に統一し、さ～ち列の標高はそれより 150 cm低くなっていて、535.40m に統一してある。

6．図版中遺物の縮尺は、土器、石器等約$\frac{1}{4}$である。

7．図版中の土器、石器番号を簡略した。例えば第10図１は10－１と表わす。

8．各遺構出土土器一覧表の法量は、上段口径、中段器高、下段底径の順である。(　)内の数値は推測値、一線は不明、計測値はcmを表示する。

本　文　目　次

題　　字　　牟礼村西黒川　高橋　孝美

序

序

例　　言

凡　　例

本文目次

付表目次

挿図目次

図版目次

第１章　発掘調査の経緯　1

第１節　調査に至る動機　1

第２節　発掘調査の概要　1

第３節　発掘調査日誌　5

第２章　遺跡の環境　9

第１節　地理的環境　9

第２節　考古学的環境　9

第３節　歴史的環境　14

第３章　層　　序　19

第４章　遺構と遺物　21

1　住居址　21

1）Ｈ１号住居址　21

2）Ｈ２号住居址　24

3）Ｈ３号住居址　27

4）Ｈ４号住居址　31

2　土　坑　36

1）Ｄ１号土坑　36

2）Ｄ２号土坑　36

3）Ｄ３号土坑　37

4）D４号土坑　37
5）D５号土坑　39
6）D６号土坑　39
7）D７号土坑　40
8）D８号土坑　40
9）D９号土坑　41
10）D10号土坑　42
11）D11号土坑　42
3　溝　址　44
4　ピット　46
1）ピット群　46
2）配列ピット　49
5　ロームマウンドおよび風倒木　49
第５章　包含層出土遺物　52
1　縄文時代の遺物　52
2　平安時代の遺物　52
3　石　器　55
第６章　ま　と　め　57
付第７章　黒川の年中行事と食用植物　64
1）年中行事　64
2）食用植物　66
付第８章　古代人と対話して　71

付　表　目　次

第１表　周辺遺跡一覧表　13
第２表　Ｈ１号住居址出土土器一覧表　23
第３表　Ｈ２号住居址出土土器一覧表　27
第４表　Ｈ３号住居址出土土器一覧表　31
第５表　Ｈ４号住居址出土土器一覧表　35
第６表　D11号土坑出土土器一覧表　44
第７表　前田遺跡検出遺構一覧表　58
第８表　前田遺跡検出土坑一覧表　59

挿　図　目　次

第１図　前田遺跡周辺の地形と発掘区設定図　4
第２図　周辺遺跡分布図　11
第３図　前田遺跡層序模式図　19
第４図　前田遺跡遺構全体図　20
第５図　Ｈ１号住居址実測図　21
第６図　Ｈ１号住居址カマド実測図　22
第７図　Ｈ１号住居址出土遺物実測図　23
第８図　Ｈ２号住居址実測図　24
第９図　Ｈ２号住居址カマド実測図　25
第10図　Ｈ２号住居址出土遺物実測図　26
第11図　Ｈ３号住居址実測図　28
第12図　Ｈ３号住居址カマド実測図　29
第13図　Ｈ３号住居址出土遺物実測図　30
第14図　Ｈ４号住居址実測図　32
第15図　Ｈ４号住居址出土遺物実測図１　33
第16図　Ｈ４号住居址出土遺物実測図２　34
第17図　Ｄ１号土坑実測図　36
第18図　Ｄ２号土坑実測図　37
第19図　Ｄ３号土坑実測図　37
第20図　Ｄ３号土坑出土遺物実測図　37
第21図　Ｄ４号土坑実測図　38
第22図　Ｄ４号土坑出土遺物実測図　38
第23図　Ｄ５号土坑実測図　39
第24図　Ｄ６号土坑実測図　39
第25図　Ｄ７号土坑実測図　40
第26図　Ｄ８号土坑実測図　41
第27図　Ｄ９号土坑実測図　42
第28図　Ｄ10号土坑実測図　42
第29図　Ｄ11号土坑実測図　43
第30図　Ｄ11号土坑出土遺物実測図　43

第31図　溝址実測図　45
第32図　溝址出土遺物実測図　46
第33図　ピット群実測図　47
第34図　配列ピット出土遺物実測図　49
第35図　配列ピット実測図　50
第36図　ロームマウンド実測図　51
第37図　風倒木実測図　51
第38図　包含層出土縄文式土器拓影　52
第39図　包含層出土土器実測図 1　53
第40図　包含層出土土器実測図 2　54
第41図　包含層出土須恵器底部拓影　54
第42図　包含層出土石器実測図　55

図　版　目　次

図版一　1　前田遺跡近景　2　前田遺跡近景　3　前田遺跡北西区遺構全景
図版二　1　Ｈ１号住居址　2　Ｈ１号住居址カマド
図版三　1　Ｈ１号住居址の出土遺物　2　Ｈ２号住居址　3　Ｈ２号住居址カマド
図版四　1　Ｈ２号住居址の出土遺物　2　Ｈ３号住居址
図版五　1　Ｈ３号住居址カマド　2　Ｈ３号住居址の出土遺物
図版六　1　Ｈ３号住居址の出土遺物　2　Ｈ４号住居址
図版七　1　Ｈ４号住居址の出土遺物
図版八　1　Ｄ１号土坑　2　Ｄ２号土坑　3　Ｄ３号土坑
図版九　1　Ｄ４号土坑　2　Ｄ５号土坑　3　Ｄ６号土坑
図版十　1　Ｄ７号土坑　2　Ｄ８号土坑　3　Ｄ９号土坑
図版十一　1　Ｄ10号土坑　2　Ｄ11号土坑　3　土坑出土遺物
図版十二　1　溝址　2　配列ピット
図版十三　1　ピット群　2　溝址の出土遺物　3　配列ピットの出土遺物
図版十四　1　風倒木　2　ロームマウンド
図版十五　1　包含層出土遺物
図版十六　1　包含層出土の縄文土器　2　牟礼村上村出土の先土器時代遺物
図版十七　1　遺物の出土状態
図版十八　1　土器底部製作技法
図版十九　1　発掘調査スナップ
図版二十　1　発掘調査スナップ

第1章　発掘調査の経緯

第1節　調査に至る動機

本調査の契機は、昭和55年度県営圃場整備の実施に伴い、その中に前田遺跡が県の指定地として指示されていた。

前田遺跡は、牟礼村のほぼ中央北の台地籍に位置し、北西に飯綱、黒姫、妙高山を望み、附近には矢筒城跡が存在し、数多くの由緒ある地名が散在する。このため村としても優慮される遺跡であり、県教育委員会の関孝一指導主事の指導により、54年10月31日範囲確認のための試掘調査が行なわれた。

その結果、調査対象地が2地点にしぼられ、昭和55年7月15日～8月7日までの日程で調査を行ない、記録保存する運びとなった。

第2節　調査の概要

●遺　跡　名　前田遺跡

●所　在　地　長野県上水内郡牟礼村大字黒川字北の台1759

●発 掘 期 間　昭和55年7月15日～8月7日

●調査委託者　北信土地改良事務所信濃支所　　所長　池田　隆二

●調査受託者　牟礼村教育委員会

●調査会・調査団の構成は下記の通りである。

調査会

顧　問	金井　義男	牟礼村長
〃	原田　幸衛	議会議長
相談役	岡田　一雄	改良区理事長
〃	高野　俊雄	議会文社委員長
会　長	小林　幹雄	文化財調査委員長
副会長	井沢　静	教育委員長
〃	白鳥　耀	文化財調査副委員長
理　事	上野　涼	文化財調査委員

理　事	滝沢　清水	文化財調査委員
〃	武居　襄	〃
〃	田中　益男	〃
〃	矢野　恒雄	〃
〃	米沢　稔秋	〃
〃	井沢　信雄	〃
〃	丸山　良雄	教育委員
〃	小川専之助	〃
〃	白石　俊雄	〃
〃	深瀬　幸子	議会文社委員
〃	梨本　忠一	〃
〃	矢野　広義	〃
〃	丸山　久	公民館長
監　事	金井　庄五	収入役
〃	町田　清司	総務課長

調査団

団　長	青山　紫朗	牟礼村文化財調査委員	
担当者	森　尚登	千葉市真砂中学校教諭	
主　任	島田　惠子	長野県考古学会員	
調査員	佐藤　敏	〃	
補助調査員	横山かよ子	〃	
〃	甘利とみ子		
〃	綿田　弘実	長野県考古学会員	（立正大生）
〃	近藤　尚義	〃	（　〃　）
〃	篠塚ひろ子		（　〃　）

調査協力者

北信土地改良事務所

池田　隆二	北信土地改良事務所信濃支所長
北沢　勝	北信土地改良事務所信濃支所
松田　謙吾	牟礼土地改良区事務局長
金井　元司	牟礼土地改良区会計主任

本山　秀　　牟礼土地改良区工事主任

寺島　新一　　〃　事務局員

片山　哲夫　　〃　　〃

北沢　京子　　〃　　〃

牟礼村土地改良区役職員

北野建設ＫＫ

田村　金蔵　　北野建設現場監督

作業協力地元役員

仲俣　俊夫　　西黒川総代

森　　孝雄　　西黒川副総代

寺島　栄宏　　西黒川分館長

帯刀　一正　　〃　副分館長

石川　雄二　　〃　分館主事

高橋　孝美　　作業協力現場責任者

石川　久衛　　〃

横山　善介　　〃

作業協力者　　飯島　一男　池田　もとめ　井沢　きみ江　石川　鈴子

伊藤　春野　御沢　休蔵　加藤　しげ子　加藤　さち子

木村　要助　近藤　和子　近藤　咲子　近藤　豊意

近藤　ひさ子　近藤　博美　近藤　まさを　近藤　祐

近藤　和加江　高橋　はなゐ　寺島　義子　仲俣　と志

仲俣　鮮治　梨本　きみよ　梨本　サダ子　花岡　たけ

森　　敏子　横山　貞子　渡辺　今朝雄　帯刀　睦子

●調査に関する事務局の構成組織は下記の通りである。

米沢　竹志　　牟礼村教育委員会教育長

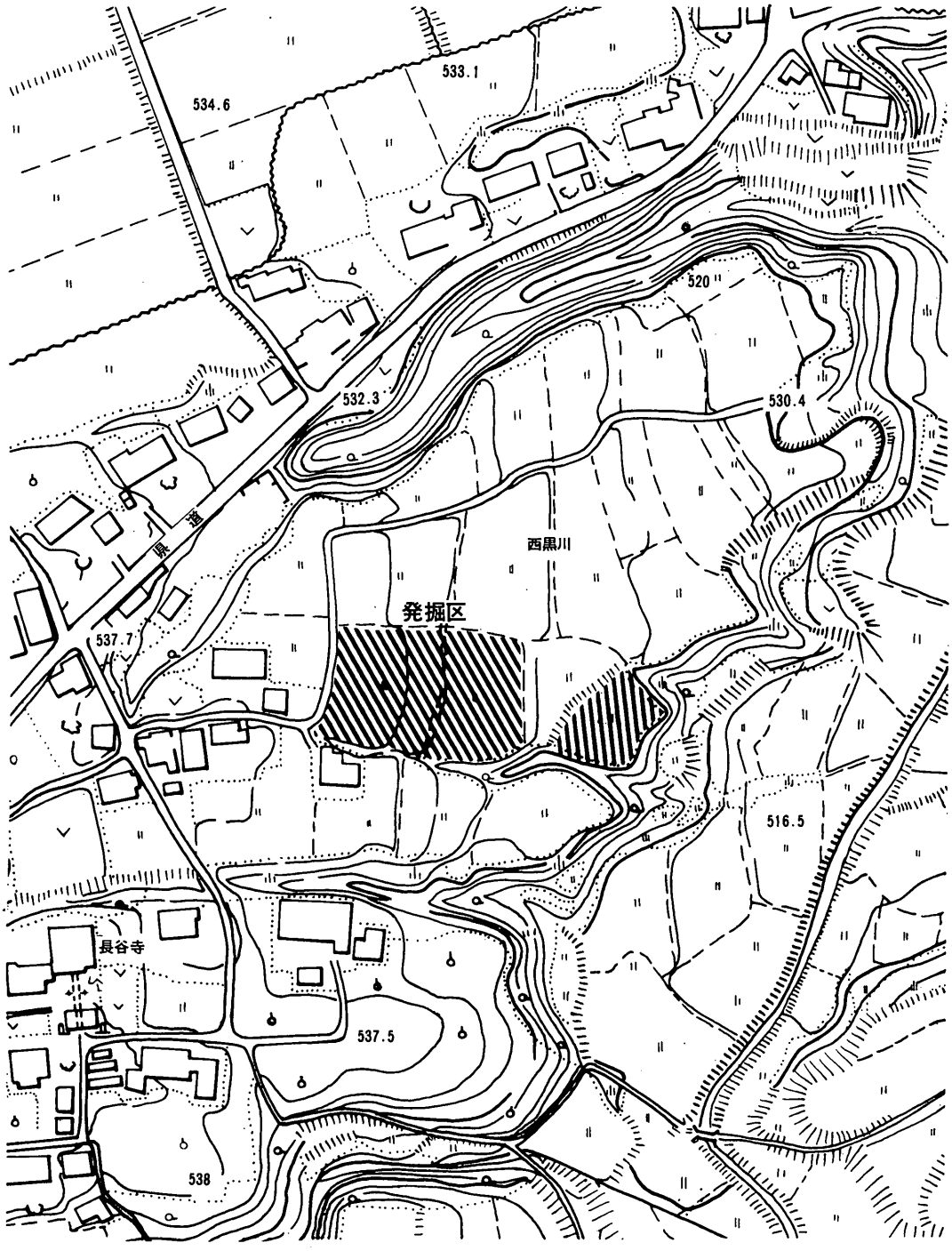
澁沢　実夫　　〃　　〃　教育次長

仲俣　弥一　　〃　社会教育係長

近藤　克彦　　〃　公民館主事

加藤　みどり　　〃　教育委員会事務局職員

（事務局）



第１図　前田遺跡周辺の地形と発掘区設定図（１：2,500）

第3節　発掘調査日誌

○7月15日（火）　くもり

グリッド設定に先立ち、ほ場整備事業請負業者北野建設のご協力により、土堤の切りくずしおよび耕作土の削平を重機を入れて行なう。

○7月16日（水）　くもり

グリッド設定を行なう。トランシフトを用いて基準杭を真北に設定し、東西にあ～て、南北に1～16、（地形により一部分グリッドNo.が切れる）の計248グリッド（3×3m）を設定する。

か～さ－1～12グリッドにかけての土層はか列の土堤から傾斜していることも原因してか、包含層が部分的に残るのみで粘土層が露出しており調査不可能である。

尚調査区が若干離れている南地点は、東西にA～H、南北に1～6までの計48グリッドを設定する。テント設置、機材運搬終了。

○7月17日（木）　くもり

本日より調査開始。村長、議長、教育長及び調査会の方々、地元黒川地区の総代、館長さんをはじめ地元協力者の出席をもって結団式及び神事を行なう。

終了後、い・う－1・2、え－1・3・4お－3、い－7・8グリッドの掘り下げ作業を開始する。その結果、柱穴状の落込みが数多く検出される。また、い－7・8グリッドより住居址の約半分が確認される。

○7月18日（金）　くもり後雨

昨日に引続き遺構検出作業。い－3・9、う－3・7、え－2グリッドの掘り下げを行なう。午後になり雨になる。2時で屋外作業を中止。3時より昨日までに出土した土器洗いを行なう。

○7月19日（土）　雨のち晴

昨夜の大雨が朝まで降りつゞいていたため作業中止。

○7月20日（日）　くもり

本日より補助調査員2名参加。い－4～6、う－4・8・9、お－1・2、か－2・3グリッドの掘り下げを行なう。住居址の全貌検出される。相変らずピット群が検出される。また、お－2グリッドより須恵器片底部に木の葉の圧痕が施されたものが出土する。

○7月21日（月）　はれ

梅雨あけが宣言され暑さに向うため、いよいよ野外作業も厳しくなりそうである。あ－11、い－10～13、う－5・6、え－5・6、お－4・6の掘り下げを行なう。

え－11グリッドより土坑とピットを確認する。また、え－5・6グリッドにかけて住居址を確認、カマドがほぼ北に位置しており、石組、焼土が露出している。全貌は明朝になる見込みである。さらに、い－11～12、あ－11グリッドより検出された遺構は、当初住居址の重複かと思っていたが、溝のようになりつつある。明日もう少し拡張しなければ性格が判明できない。

17日にえ－3グリッド内より検出され、性格の明らかでなかった、粘土でややマウンド状の遺構の精査及び掘り下げを行なう。特殊

遺構と命名する。う－４の精査で土坑を確認

○７月22日（火）　はれ

昨日に引続いて遺構検出作業。昨日の続きであった住居址の全貌が出る。小型の住居址である。Ｈ１号と命名。20日にい・う列より検出された住居址はＨ２号と命名する。

え・お－６・７・８グリッドより配列のピット群が検出されはじめる。その内のえ－８グリッドより灯明皿が出土。また、お－５グリッドより諸磯Ｂの土器一片出土する。

ここ数日晴天が続いたため地割れがひどくグリッド掘り下げ及びプラン確認に困難をきたす。特殊遺構の実測に入る。

○７月23日（水）　はれ

配列ピット群の全容が検出される。掘立柱建物址であろうと思われる。う－11・12グリッドより土坑２基確認する。０－７～10グリッドの拡張掘り下げを行ない、溝状のプラン確認を終了する。本日で上段の遺構検出作業は終了する。検出された４基の土坑をそれぞれＤ１号～４号までと命名する。

○７月24日（木）　はれ

本日より２班に別れて作業を行なう。上段は検出された遺構の掘り下げとして先ずピット群・Ｄ１号の掘り下げ及び断面図の実測を行なう。

下段はせ～ち列の遺構検出作業に入る。地表面が固くて地割れがひどく作業はきつい。水をまきながら作業を行なう。

せ－13グリッドよりかなり大きい規模の土坑が検出される。

夜、昨日までの作業の進行状況および地元協力者の発掘に参加した感想文をおりこんだ新聞を作成する。

○７月25日（金）　はれ

ピット群の掘り下げ続行および掘り上ったあ～お－１～５グリッド内のピット群実測、写真撮影を行なう。

Ｄ１号の掘り下げ終了。写真撮影。

下段は、た・ち・つ列の遺構検出作業を続行する。

「まえだ遺跡通信第１号」が印刷されたので西黒川全戸に作業協力者の方々が帰宅途中配布して下さる。

○７月26日（土）　はれ後雨

昨日に引続いてピット群の実測および掘り下げを行なう。また、配列ピット群の掘り下げおよび断面図の実測を行なう。さらに溝状遺構の掘り下げ、断面図の実測を行なう。結果、溝状遺構は川であったことが判明する。

本日より新しい南地区のＣ－２グリッドの掘り下げを開始する。一部分粘土層が露出している地点があるにもかかわらず、このグリッドは黒色土が厚く粘土層まで１ｍもあり、途中小石が混入していて掘り下げが困難であった。遺物の出土も少量であって遺構の望みはなさそうである。

尚、Ｈ１号住居址のカマド左脇から、う－

3・4グリッドにのびていた細長い落込みを掘り下げたところ、炭化材が多量にあり分析の結果、くるみの木であることが判明する。枝とおもわれる部分があることから倒れた木が焼けた跡であるとおもわれる。

○7月27日（日）　くもり

昨夜から朝方まで雨が降っていたため現場は水びたしとなり、地元協力者の方々は休日とする。6人でピットに入った水をかい出す。午後よりD1号のレベリング、特殊遺構の切開を行なう。その結果、性格が明らかでなかった特殊遺構の存在が断面図等によって風倒木の穴であることが判明する。北東にかけて複雑な形でつき出したピット状の穴や、D1号土坑と命名した遺構内の炭化材の多量な出土及び様相、さらに6m以上もある倒れた木の痕跡等から、D1号は大木の根の部分が焼けたために自然に落ち込んだものと思われる。

○7月28日（月）　はれ後雨

ピット群の残り実測。溝の掘り下げを続行する。さらに風倒木の跡を実測。D4号の掘り下げ、実測を行なう。また、下段のせ・そ・つ列のグリッド掘り下げを続行。ち－2グリッドの焼土内より露出している土器の清掃を行なう。雨のため4時で作業を中止する。

小学生見学に見える。

○7月29日（火）　くもり後はれ

昨夜まで降りつづいた雨のため、遺構内は水びたしとなる。全員でピット、溝の水をかい出す。急ピッチで溝の掘り下げ、D2号、配列ピット群の掘り下げを終了させ、明日の天候が心配であったため調査団は休憩をなくして、暗くなるまでにようやくすべての実測・写真撮影を終了する。

西小学校2クラス見学に見える。また、昨日見学にみえた小学5年生が約束しておいた廃土内の土器表採をしてくれる。

○7月30日（水）　くもり

H1号、2号住居址の掘り下げに入る。覆土非常に浅い。覆土断面図実測。

南区のグリッド掘り下げを本格的に開始。

○7月31日（木）　雨のちくもり

昨夜からの雨のためH1号、2号住居址内下段のた・ち・つ列内は水びたしとなる。そのため全員で水のかい出しを行なう。

午後よりH1号住居址の掘り下げ、カマドの断面図、切開を行ない掘り下げを終了する。

また、南区のF－3グリッドの掘り下げを行なう。遺物出土ほとんどなく、遺構の検出不可能であると判断し、この地点での調査を打ち切ることにする。

○8月1日（金）　雨後くもり

天候が心配であったため、註記作業を行なう。

○8月2日（土）　くもり後はれ

H1号住居址の実測を行ない全て終了。またH2号住居址の掘り下げを続行、終了後写真撮影実測を行なう。

D3号土坑の掘り下げを行ない、実測、写真撮影も済ませる。

下段のグリッド掘り下げは、先月末まで晴天が一週間程続いたため地割れがひどく固くてスコップが通らない部分があり困難をきたしていたが、ここ数日の雨続きでスコップが通るようになったので、固かった部分を新たに拡張する。「まえだ遺跡通信第2号」発行。

8月3日（日）　くもり

本日は村民見学会の日として前日より有線放送で連絡される。黒川地区を中心に30名程の見学者がみえる。

上段はH 2号住居址のカマド実測と全体図実測を残すのみで、全て終了となり、本日より下の段に総力をそそぐことにする。

下段の今までグリッド掘り下げを行なった部分を精査しプランを明確にする。せ—13・14グリッドから規模の大きい土坑1基が検出されていたが、精査により、そ—11、そ・た—12・13・14グリッドから計4基の土坑が確認される。また、た・ち—2・3・5グリッドより3基の土坑が確認され、合計8基となり、それぞれD 4号～D 11号と命名する。上段の土坑を1号～4号まで命名してあったが1基が風倒木に関係することから、本日より1号～3号までと命名を変更する。新しく命名されたD 4号の掘り下げに入る。

さらに、10月に範囲確認調査を行なった際随行した調査会の井沢信雄氏が、甕が顔を出していたという部分を記憶しており、す—15グリッドを掘り下げたところ住居址が一軒確認され、更にその周辺の土堤により傾斜になっている部分4グリッドを拡張すると住居址がさらにもう1軒検出される。

○8月4日（月）　はれ

昨日確認された、D 5号～D 8号およびH 3号址の掘り下げに入る。引続きH 4号址のプラン確認を行なう。土堤際であるためか一部分粘土層（床面）が露出している。

○8月5日（火）　はれ

H 3号址掘り下げ終了後実測に入る。さらにH 4号址の掘り下げを行なう。

D 9号の掘り下げ及びD 4～D 8号の実測写真撮影を行なう。3名は土器洗いを開始。

○8月6日（水）　はれ

D 10号・11号の掘り下げ及び実測を行なう昨日掘り上げたH 4号住居址及びH 3号住居址のカマド実測を行ない、住居址、土坑群は全て完了する。また午後より全体測量に入る。

昨日に引続き3名は土器洗いを続行。ほぼ洗い上る。また、抗ぬき、テントの取りはずし、器材の撤去を行なう。

○8月7日（木）　はれ

註記作業、遺物の整理を終了し、本日で現場作業を完了とする。

○8月25日～9月1日	遺物接合、復原作業。
○9月10日～9月30日	遺物復原、実測。
○10月1日～10月10日	遺構実測図整理及びトレス。
○11月1日～11月10日	遺物実測及びトレス。
○12月10日～12月25日	原稿執筆。
○1月2日～2月10日	原稿清書、図版作成総編集。

（島田　恵子）

第２章　遺跡の環境

第１節　地理的環境

牟礼村は、1955年に、高岡村と中郷村の合併によって出来た村であり、長野市の中心から三登山を隔て北へ10km、野尻湖の南約８kmの地である。周囲を五岳として著名な、戸隠山、飯綱山、黒姫山、妙高山、斑尾山がそびえる。

これら多くの山々が属する上水内郡の地質は、第三紀層であり、その層を墳き破って火山を造ったといわれ、その火山灰泥は、第三紀層を覆蓋したといわれる。村全体の景観は、西側を飯綱山（1017m）に、南側を三登山（923m）、髻山（744m）に、そして東側を北西から南東へ鳥居川が流れ、村境を山地と丘陵に囲まれた盆地となっている。

前田遺跡は、東側をその源流を飯綱山にもつ八蛇川沿いに立地しており、同方向に村の中心に位置する矢筒山（570m）を望む。そして西側に飯綱山（1917m）を望む位置に所在する。

本遺跡は、合併前の中郷村に属し、その高低は不同であり、最も高い地は平出部落で海抜 595 m、最も低い地は豊野日影で海抜 477 m 、前田遺跡は海抜 530 m 前後に位置する。

この中郷の地も、斑尾山、黒姫山、飯綱山の活動の影響をうけたが、最も激しく影響されたのは、茶臼火山脈の活動であったといわれる。

土性は、水成層、火山質の二種類より構成されている。水成層は、鳥居川、滝沢川の沿岸に発達し、田地を形成し、火山質土壌は、飯綱、髻諸火山の余波をうけ出来た土壌であり、黒腐植壌土、赤腐植質廬土壌土、赤粘土、白粘土の五種類が基本土壌だといわれている。前田遺跡の土壌は白粘土に覆われていた。

尚、遺跡周辺は、起伏に富んでいるためにその利用は湿田、果樹園と多方面にわたる。

本遺跡は、湿田であった。

（近藤　尚義）

第２節　考古学的環境

前田遺跡と其の周辺は、飯綱火山の砂礫岩上に淡水性堆積した地層がさらに二次作用（沖積）を受けた、よく粘土化した黄白又は黄褐色の層厚30m に及ぶ地帯で其の後鳥居川とその支流により侵蝕され、かなり平坦面を残す台状地である。

これまで、この地方の遺跡説明には緊急分布調査の報告書が引用されて来たが、其の後数回の発掘調査及び周辺調査、其の他の情報、筆者の踏査等により、未確認、未指定の遺跡が倍増しているのでこれ等も大きく考慮しなくてはならない。今後、総合分布調査で確認することが基本条件となるであろう。第２図の遺跡分布図には、これ等の新発見遺跡も図示した。

先土器時代の遺跡はこれまで中高山遺跡の一ケ所であったが、今回の発掘調査中に行なった周辺遺跡調査の際、西方の飯綱山麓の上村（だづま原）で、宮本悦雄氏の畑から出土した遺物の中に、 図版16図に示したように、槍先形尖頭器、ナイフ形石器等が認められた。だづま原は標高800～900mの飯綱の山麓高原で沼地も多く、八蛇川の源流ともなっている。南佐久郡野辺山の先土器時代矢出川遺跡群の地形、地質、環境等に類似点が多い。また、先土器時代から縄文、古墳歴史時代と連続した資料も出土しており大遺跡となろう。今後に於て注目される新発見遺跡である。

縄文時代の遺跡は、この方面の山間地から八蛇川とその支流添いに多く、滝沢川、鳥居川の流路付近まで下降している。牟礼村の弥生の遺跡は、発掘調査例はなく採集された遺物により８遺跡を数える。

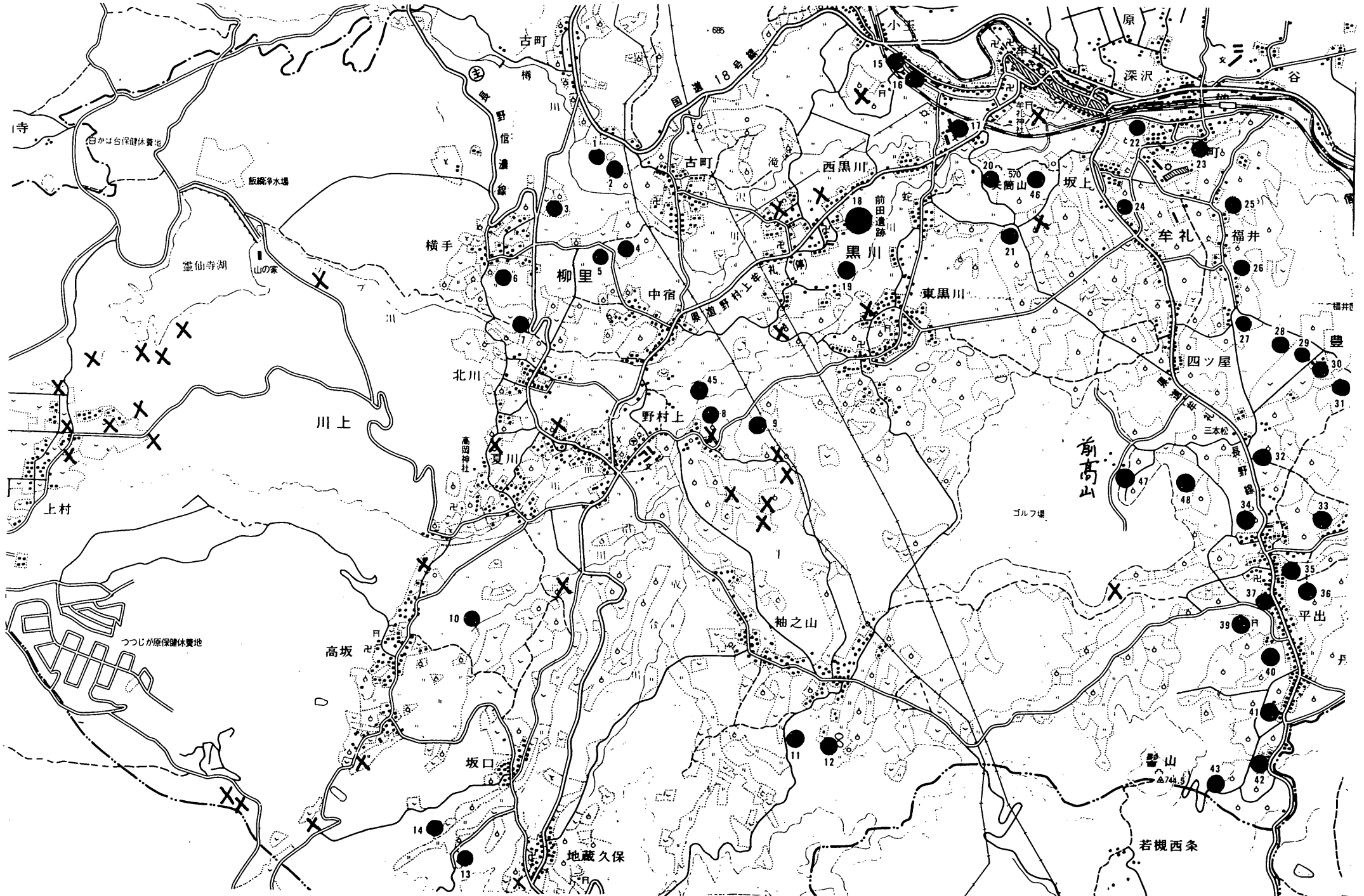
古墳は平出のもとどり地区に２基確認されていたが、庚申塚の前方後円墳は、「吉」「もとどり」古墳群の最北端と言われ、ますます北に発見され、未だ其の全容は明らかにされてはいないが、支群的な様相をも見られる。また、当遺跡付近の台状地に三基程あったとも伝えられている。

牟礼村の中心地から南にかけて、平出、福井、東黒川、袖之山、茶臼山地区では限られた広大な徴高地がある。淡水性の堆積層で河川が故死していることから侵蝕は余り進んでいないが、湧水地点が多くあり、山地と畑が主で表層の保存が良い地帯であり、中高山の先土器、前高山の古窯址などが所在し、縄文時代から歴史時代までの遺物が採集され報告されている。この地帯も三登山を含めて、地形、特に流水の変移等からも究明できれば、今後重要な遺跡地帯となろう。

館址と推定されるものは、小玉に矢筒、黒川殿屋敷、茶臼山築地屋敷、小丸山等であるが、先年の矢筒発掘調査により館址と確認された外は、推定の域を出ず、小丸は補場整備工事のため壊滅した。

以上のように多方面に多くの遺跡が分布しているにもかかわらず、総合的な調査がなされていない為、新発見遺跡も含めて、種々の開発に伴なう遺跡の破壊、保護保存等に検討を加えなければならない現状である。

（牟礼村文化財調査委員　井沢　信雄）



第２図　周辺遺跡分布図（１：25,000）　　×印は表採、遺物出土により遺跡であることが確実な地点

第1表　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所地地	縄文	弥生	古墳	歴史	備考
1	石原	牟礼村大字古町石原	○				
2	上ノ山	大字古町上ノ山	○				
3	蟹原	大字柳里蟹原	○				
4	下向山	大字古町字下向山	○	○			
5	大岩	大字柳里字大岩	○				
6	南	大字柳里字南	○				
7	横道	大字柳里字横道	○				
8	茶臼山	大字川上字茶臼山	○		○	○	一部発掘調査後かい滅
9	強清水	大字黒川字強清水			○	○	
10	丸山	大字高坂字丸山	○		○		発掘調査後かい滅
11	かつも原	大字袖之山字かつも原			○	○	
12	東久保	大字袖之山字東久保	○				
13	甘池	大字坂口字甘池	○	○	○	○	開発により、かい滅の恐れあり
14	上向	大字坂口上向			○	○	
15	西屋敷	大字小玉	○		○		
16	小玉	大字小玉	○		○		
17	庚申塔	大字黒川字庚申塔		○	○	○	
⑱	**前田**	大字黒川字前田			○	○	**発掘調査本報告**
19	殿屋敷	大字黒川			○		
20	裏町	大字牟礼				○	
21	七割	大字牟礼			○	○	
22	栄町	大字牟礼字橋詰	○	○	○		宅地化により損かいされつつ有り
23	橋詰	大字牟礼字橋詰		○			
24	東前坂	大字牟礼字橋詰	○				
25	宮の下	大字豊野字宮の下	○	○			大きな遺跡群であるが道路計画宅地化によりかい滅の恐れあり
26	大久保	大字豊野字大久保	○	○			
27	山道平	大字平出字山道			○		
28	椛樺	大字平出椛樺		○	○		
29	山道	大字平出字山道				○	
30	北の原	大字豊野北の原		○			
31	谷	大字豊野字谷			○		
32	家岸	大字平出字屋岸			○		
33	番匠窯址	大字豊野字番匠			○		
34	室飯道	大字平出字室飯道			○		
35	東浦A	大字平出字東浦	○	○	○	○	
36	東浦B	大字平出字東浦		○	○	○	
37	平出北	大字平出字東浦			○		

36	坂　　浦	大字野野字番匠			○	○	
39	小丸山古墳	大定平出西浦			○		
40	平　出　南	大字平出字長山	○		○		
41	名弥不明	大字平出			○	○	
42	庚　申　塚	大字平出字西浦			○		前方後円墳
43	鍛治久保古墳	大字平出字鍛治久保			○	○	
45	明　専　寺	大字柳里字明専寺	○				発掘調査後かい滅
46	矢筒館址	大字牟礼表町				○	発掘調査後かい滅
47	前高山窯址	ゴルフ場内					発掘調査後一部保存
48	中　高　山	大字平出中高山			○		先土器遺跡

第3節　歴史的環境

1　黒川の郷

前田遺跡は牟礼盆地の地理的な中心地大字黒川字殿屋敷の北側の臨接地にある。黒川の地名の歴史的な初見は嘉暦四年（1329）の諏訪上社五月会御射山頭役結番帳で、鎌倉幕府から上社造営の課役を割り当てられている。この中で現牟礼村では他に登場する村は小玉だけである。寛永六年（1629）の「水内郡平出願生寺住持永尊所持、親鸞聖人縁起裏書」には、「信州水内郡太田庄黒川郷平出願生寺」とある（平出願生寺は磯部六ケ寺の一寺で応仁二年（1468）髻山の麓に移って来たと言われる寺で、今も上平出に寺屋敷跡としてその名残りを留めている。「太田庄黒川郷平出」の文言から平出も黒川の郷中である。一方天明二年（1782）牟礼徳満寺所蔵蓮如絵像裏書に「信州水内郡柳原庄黒川郷牟礼宿徳満寺地中正安寺常什物)」とあり、牟礼も黒川郷中であったのである。また小玉は前記嘉暦四年の段階で既に小玉郷として登場するが、「以前は黒川の大宮神社前に住んでいたが、大宮神社を黒川にくれて現在地に移って来た。」との伝承がある。この中には非常に重要な歴史的な意味が含まれている。その一つとして小玉は黒川から分村独立したものであると言うことである。以上からして源初の黒川郷は南は平出、北は小玉に至り牟礼をも包含した広い範囲であったと言うことで、その政治的中心が殿屋敷であったと推考するものである。

2　殿屋敷と島津氏

字殿屋敷地内の殿屋敷跡は約一ヘクタール程の規模で現在微地形的に認められるだけで、石垣も何も残っていない。しかしこの周辺には館跡に関連した中世的な地名が残っている。町田（領主のいた周囲の田）辺町（そりまち）（曲線の堰道・町はずれ）市ノ口（市場の立った所）市楽（市に関係があるか。）櫓（やぐら）・家老地等である。その他小館跡や中世的な地割（明治二十二年の切図）は当時の面影を推考することができる。

殿屋敷の領主は矢筒城主（大字牟礼）の島津権六郎であるとされているが、権六郎なる人物は文献には皆目見出できない。しかし島津領であったことは間違いない。昨年の昭和54年９月矢筒城趾の麓に居館跡が発掘された。従来矢筒城の館は黒川の殿屋敷とされていたが、矢筒の発掘により島津氏の館が二か所存在することになった。筆者はおそらく殿屋敷の館はその初期のものであろうと推考するものである。

殿屋敷に隣接する前田地籍には大永五年（1522）矢筒城主島津権六郎が伯母の菩提のために建てたと言われる浄土宗の玉林山観音院長谷寺がある。そして境内の墓地には「大永二年朔日妙相院宝誉玉林禅尼」と刻された五輪の開山塔がある。この寺の前身は中郷村史には 「天徳中真宗高野山の僧某、本国善光寺如来へ参詣の際本村に草庵を結び、天徳三年寺堂を建立し玉林山観音寺と号す。」と書かれている。今も大字黒川字玉林地籍の山中南斜面に、その寺跡を確認することとができる。現在長谷寺には天徳の年号がかすかに読める石碑が保管されている。

三水村倉井の与四郎屋敷は「里俗伝に往古牟礼村矢筒城主島津氏の一族島津与四郎定国大永年間故ありて此の地に移す。」とあり、また同村普光寺の性空山普光寺には「永正年間本郡室飯（牟礼）城主島津某氏大いに修理を加う……弘治・永禄年間武田氏矢筒の城を襲う。某氏縁を以て該寺に逃る。甲兵来りてこれを焼く…」とある。一方黒川の大宮神社については「里俗伝に永正中矢筒城主島津権六郎尊敬し、除地高十貫文を寄進す。」とある。矢筒城の島津氏は黒川は勿論のこと普光寺・倉井までその支配下のようである。以上はみな里俗伝によるものであるが文献史料によると次のようである。天正十年（1582）七月十三日に上杉景勝が島津淡路（忠直）守に与えた地行方之覚（信濃史料補遺巻上）には

百貫文　平出　　千貫文　黒川郷　　五百貫文　牟礼　　三百貫文　小玉　　七百貫文　福王子（普光寺）　三百貫文　倉井

とある。同じくこの時夏川（牟礼村）は島津常陸介（忠泰）の本領として九拾八貫文が景勝から安堵されている。これより先に夏川は永禄十一年（1568）十月二日島津孫五郎の本領として武田信玄に安堵されている。以上でもわかるように黒川・牟礼・普光寺・小玉・倉井・平出は同じ領主であるが、夏川の場合は同族の島津氏でも人物が違う。ここに登場する夏川の島津氏の館跡は野村上の築地屋敷（杉山頼衛氏所有の畑）であろう。

天正十年三月五日上杉景勝が武田勝頼の請によって、松本房繁等を長沼に出陣させた。途中松本左馬助房繁等は牟礼に到着して次のような書簡を直江兼続に提出している。（信濃史料第十五巻）

御書謹みて拝見なし奉り、御掟に任せ、今日牟礼の地まで罷り付き、斎藤・千坂相待ち、御差図次第如在存すまじく候。この旨宜しく御披露仰ぐところに候。恐々謹言。

牟礼の地まで罷り付きとあるから、この頃既に交通の要衝になっていたことがわかる。ここで言う牟礼とは矢筒城下の表町・裏町であるが、現在の牟礼の町の鳥居川のほとりであるかは不明で

ある。しかし矢筒城を中心として四方に通ずる古道を今なお確認することができる。何れにしてもこの時点においては黒川の殿屋敷は、交通の中心からはずれてしまっていると言わざるを得ない。かくて慶長三年（1598）上杉氏の会津移封にともない矢筒城も廃城となり、表町・裏町などの城下町もすっかりさびれ、遂次水便の良い鳥居川べりの牟礼の証念寺・徳満寺の辺が政治の中心となり、江戸時代を迎えるようになったと推考するものである。

3　黒川の開発

上杉・武田の戦乱で矢筒城も攻略されすっかり荒廃した当地方は、天正十年（1582）三月武田氏の滅亡とともに織田信長の治下になったが、信長の急死により上杉氏の治下となり、この頃から平和がよみがえった。慶長三年（1598）上杉氏会津移封後、慶長十一年（1606）明専寺門徒が中宿村に移り（明専寺遺跡）、同十八年には普光寺村（現三水村）に移った。そして寛永八年（1631）に柏原東浦（信濃町）に移っている。現在近藤祐氏（西黒川）にはこの時の明専寺門徒五十人の氏名を記した古文書が所蔵されている。その中で現存する檀徒は鈴木・寺島・近藤・中根・原田・黒柳・清水・松木・山下・高橋などである。また近藤祐氏の祖先代々記録には、「天正之頃明専寺ト共に本国（三河）ヲ脱シ当国ニ着所々ニ移リ、終ニ水内郡黒川村ニ住ス……」とある。現在同家は字殿屋敷の一角にあり、屋敷のまわりに水路をめぐらし立地条件の良い場所である。西円寺（西黒川の字市楽）文書には「天正元年、三河国矢萩御坊御引地、信州水内郡黒川、矢萩山西円寺」とあり、中郷村史には「西円寺は真宗西本願寺末で、住古戸隠山天台宗行勝院末にて、元亀天正の頃無住となり、天正の末三河の国岡崎故あって該寺を再建し、西円寺と号した」とある。西円寺の西隣に天正の初期に定住したと伝えられる開拓地主近藤昇氏家がある。同家の仏壇には第十三代良如上人（西本願寺）裏書の本尊掛軸がある。同じ十三代ではあるが、梨本富士雄氏の仏壇には「方便法身尊形本願寺釈宣如　花押　願生寺門徒」と書かれた東本願寺宣如上人の御裏書の本尊掛軸がある。願生寺は磯部六か寺の一つで上平出から越後の新井に寛永中移転しているが、その頃梨本家はその門徒であったのである。同家は最初殿屋敷と長谷寺の間に屋敷があり、全く中心的な場所であった。また東黒川市ノ口の開拓地主神谷雅人氏家にも願生寺門徒の本尊掛軸があった。とに角これらの有力な門徒によって黒川の大地が一段と開発されたことは間違いない。

慶長七年（1602）の信州川中島四郡の森検地によると、今の牟礼村の中でも黒川の石高は随一の石高を有している。

一、八百三拾九石四升	黒川村	一、五百八拾九石三斗五合	室飯村（牟礼）
一、三百拾四石一斗九升八合	小玉村	一、百四拾三石五斗七升七合	新井村
一、弐百石九斗一升七合	野村上村	一、六拾八石弐斗八升	高坂村
一、百四拾三石三斗	平出村		

東ノ腰（西黒川）仲俣雪江氏家は川中島の戦い後当地に移住し、山田堰（水源は滝沢川）を開削して水田開発をしたと伝えられている。山田とは出身地における名字であり、仲俣姓は出身地の仲俣（長野市柳原）によってつけたものであるとのこと。黒川はもともと飯綱山麓から流出する八蛇川・樽川・滝沢川の小河川を水源とし、用水開削には比較的たやすく水田開発の適地であったのである。

寛文九年（1669）西条村・上駒沢村・下駒沢村など駒沢川水系（長野市）の名主から黒川村・野村上村・荒井村・室飯村・中宿村・高坂村にあてて「取替申手形の事」の水論文書（東黒川区有）が出された。これは飯綱山の滝之沢の水を西条村・駒沢村の里方の人たちが、こっそり分水嶺を越えて引水して駒沢川に流入させようと、堰筋を掘ったと言う事件である。結局は山方の黒川村等の勝訴となったものである。これらの文書からしても寛文の頃には前記のように飯綱山を水源に持つ八蛇川等の水利権は牟礼盆地側にあり、黒川等の水田開発は一応この頃出来上がっていたとみてよかろう。

4　延喜の官道と黒川

東山道と北陸道とを結ぶ支路としての延喜の官道が、東山道の錦織駅家（にしごりのうまや）（東筑摩郡四賀村）で分岐し、麻績駅家（東筑摩郡麻績村）を経て善光寺平に下り亘理（わたり）駅家（長野市安茂里附近）から多古（たこ）駅家（長野市三才駅附近）そして信越国境にある野尻湖附近の沼辺（ぬのへ）駅家を過ぎて越後の国府に達していたとされていることは周知のことであるが、筆者はこの延喜の官道が平出から黒川を通り小玉に通じていたと推考するものである。

まず小玉山の北方、信濃町との境に「見坂平」の耕地（水田）がある。宝暦三年（1753）の小玉村新田検地帳には、見坂・見坂平・見坂堰上などの耕地名が記載されている。現在は見坂平の耕地名しか残っていないが、この地は明らかに見坂の地で小玉の人は「まわりが良く見える坂」などと言っているが、筆者は古代交通の「みさか（神坂）」であると推考するものである。地形的には北国街道の小玉坂を上り赤坂で東方に分岐して北国街道より低い地帯を北進し、戸草に抜ける戸草道の頂上にある。見坂平は小玉坂のような斜面でなく峠の頂上で、即ちこの見坂は峠の頂上をさす古語である。つまり見坂の峠なのである。この見坂の峠越えが北国街道以前の延喜の官道筋であると言わざるを得ないのである。

この見坂の峠の坂本の村が小玉なのである。ところがその小玉が前記のように「黒川の大宮神社前から移って来た」との伝承がある。したがって初期の坂本の地は大宮神社前の辺であり大宮神社は坂本神社と言うことになる。嘉暦四年（1329）諏訪上社五月会御射山頭役の結番帳には、「小玉郷地頭」の文言が見え地頭が存在した。これは交通上重要な坂本の村であるがために置かれたものであろう。明治八年の大宮神社由緒調書には「慶長年間森右近入封ノ際、従前神領ヲ被止猶亦後大久保石見守巡回ノ節内記糺ノ上更ニ神領十石ヲ被寄候。右十石之内黒川村五石、牟礼

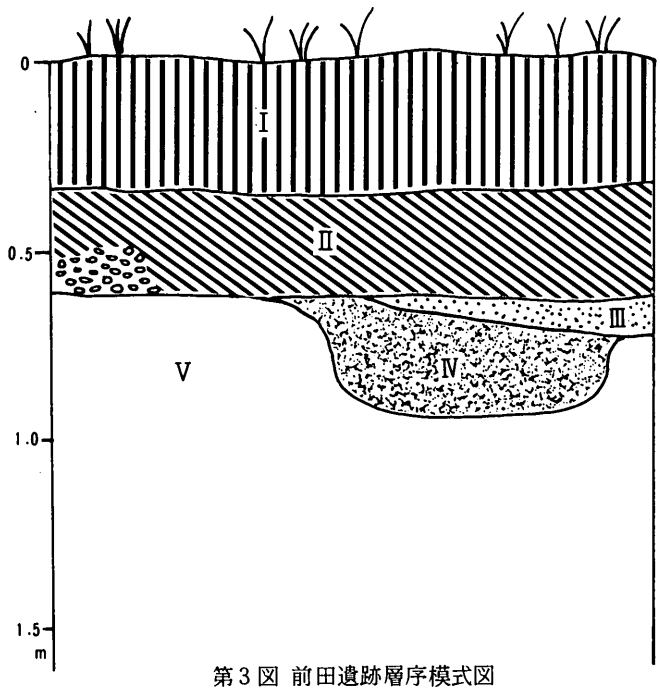
村三石、小玉村一石、野村上村一石神封之候而既ニ先般地券上帳ニモ現然ニ御座候而土地開創由縁ノ神社ニ御座候。」とあり全く坂本の神社にふさわしく牟礼盆地の総社である。ところが後世見坂の峠への道が東方の牟礼から通じるようになったので、小玉村も自動的に現在地に移転したと解すべきである。このことを語る文書として文化二年（1805）黒川村牟礼宿出作百姓惣代善左衛門と名主藤作が、中之条代官に提出した伝馬論争文書がある。その一節に「平出村より当村江掛り小玉村に引通し当時往来仕候古往還在之、当往還と違山坂無之平地続順路宜敷牟礼宿相廻り候より毛、道法茂余程近ク且御入用橋川筋右道筋ニ而ハ小川弐筋ハネ橋茂軽候故、前々より自普請ニ仕立来リ出水之患無御座、然時者橋普請御入用茂相掛不申、乍恐夫丈御益筋ニ茂相成并道筋行程相詰り候段、乍いささか茂御通行之御方様人馬賃銭茂相減シ御為ニ茂相成候儀と奉存……」とある。つまり「牟礼宿をまわるより平出から直に黒川を通り小玉に抜けた方が近く楽で、古往還があった。」と言うのである。このルートは平出より今のゴルフ場を横断（ゴルフ場造成で古道は消滅）し東黒川の袖・日向・天神山・町田・殿屋敷・市楽・桜林・小玉坂から見坂の峠に達するものである。ゴルフ場内には古道の遺物として唯一つ自然石の方向板の如きものが残されている延喜の官道の方向を示すが如く丁度北方の黒姫山の方向に向けて建てられた大石がある。おそらく古代人によって築造されたものであろう。またこのルートにあたる袖の庚申山がある。延享元年（1744）の古文書（近藤祐氏所蔵）によると「庚申山は東西黒川の共有のものであったが、個人に払下げられ、両組で建立された庚申塔の下だけ除外した。」とある。今も立派な庚申塔が二基（高さ約一メートル半）あり、両組で各一基建てたことは解説できるが年代は不明である。ここで重要なのはこの庚申塔は東西黒川のものであることで、東西黒川の南からの入口に設けられていることである。一方北の出入口には、前記の大宮神社が鎮座していることである。この二点を結ぶルートが大字黒川の中央通りであり古道延喜の官道であると推考するものである。そしてこのルートに黒川の大事な場所である袖の願生寺跡・殿屋敷・西円寺・大宮神社等が点在するのである。

5　まとめ

本橋においては主として前田遺跡を取りまく古代と中世に光をあてて、黒川の歴史を解明しようとしたものである。しかし僅少な文献史料を手がかりに実地踏査をもとに推考したものであるが、果してどの位その時代にさかのぼれたかが疑問である。そのためにや、独断的な感もなきにしもあらず、この点は一つの仮説として容赦を願いたい次第である。とに角今回の発掘は黒川の古代史研究にその端緒を与えたものでその意義は大きい。遺跡の出土状況を直視して、筆者は延喜の官道黒川通過そして見坂の峠越えを提唱する意欲に燃えた次第である。今後とも識者のご教示を乞うものである。　（牟礼村文化財調査委員　矢野　恒雄）

参考文献　信濃史料　中郷村史　長野県町村誌北信篇　改訂明専寺の歴史　上水内郡神社誌

第3章　層　　序



Ⅰ層　茶褐色土層（水田耕土）

Ⅱ層　褐色土層

Ⅲ層　黒褐色土層

Ⅳ層　黒色土層

Ⅴ層　茶白色粘土層

第3図 前田遺跡層序模式図

前田遺跡は、鳥居川とその支流の深い浸食によって形成された丘陵の台地に立地している。

Ⅰ層は、水田の耕作土及び赤褐色を呈する床土である。この層は重機を用いて削平を行なった。

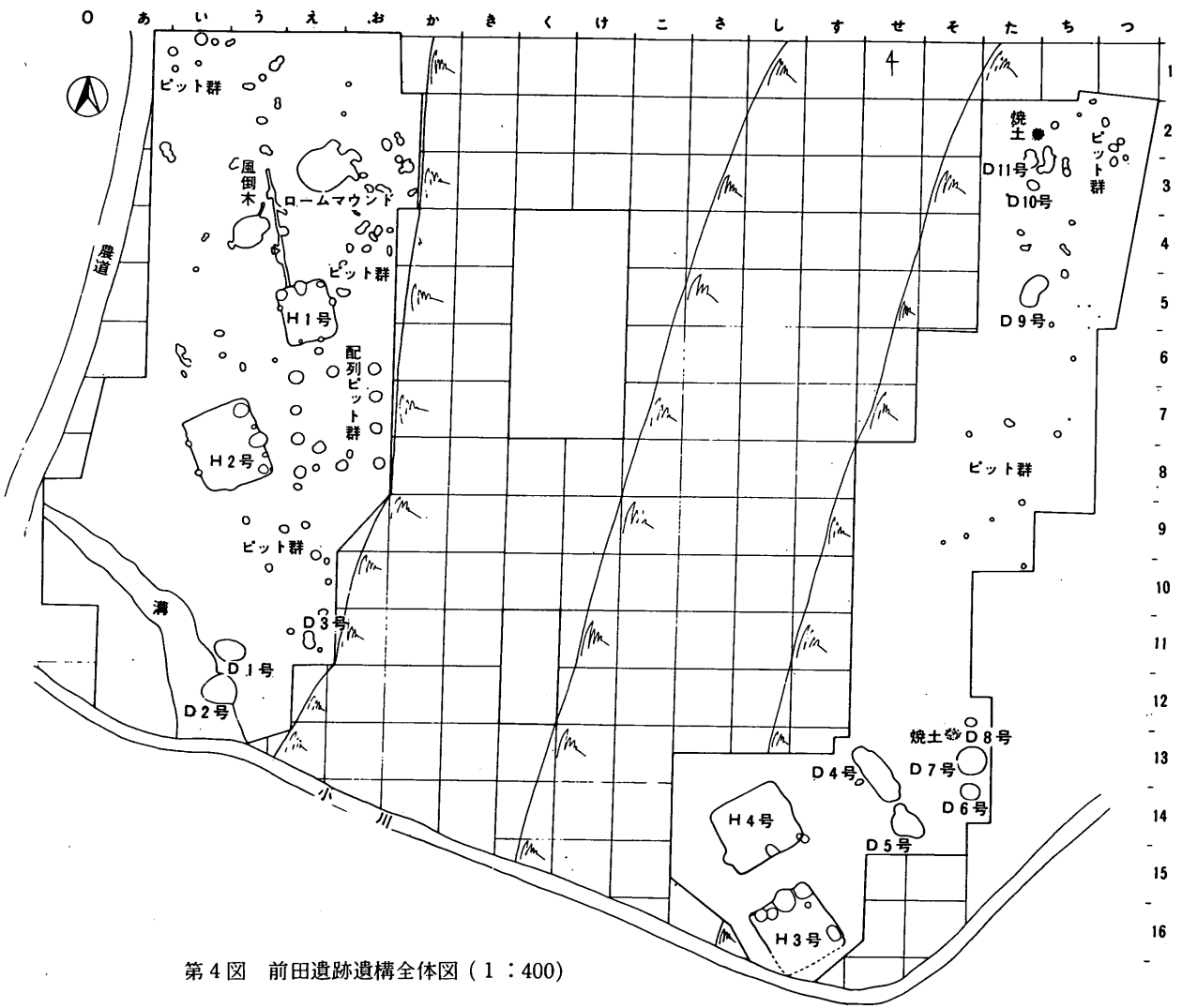
Ⅱ層は、水田耕作土直下の固い土層で遺物を包含する。調査区の東西中央より帯状に小礫が混入していた。

Ⅲ層は、軟質で部分的に遺構上部に存在する層で、遺構覆土と類似していて遺構検出の識別に困難をきたした。遺物を多量に包含する。

Ⅳ層は、遺構覆土であり、個々の遺構覆土はそれぞれの実測図に層序説明として記してある。全体にこの層の直上は、炭化粒子の混入が見られた。

Ⅴ層は、かなり上質の粘土層で台地全体に推積している地山である。

（島田　恵子）



第4図　前田遺跡遺構全体図（1：400）

第４章　遺構と遺物

１　住　居　址

１）Ｈ１号住居址

遺構（第５図）

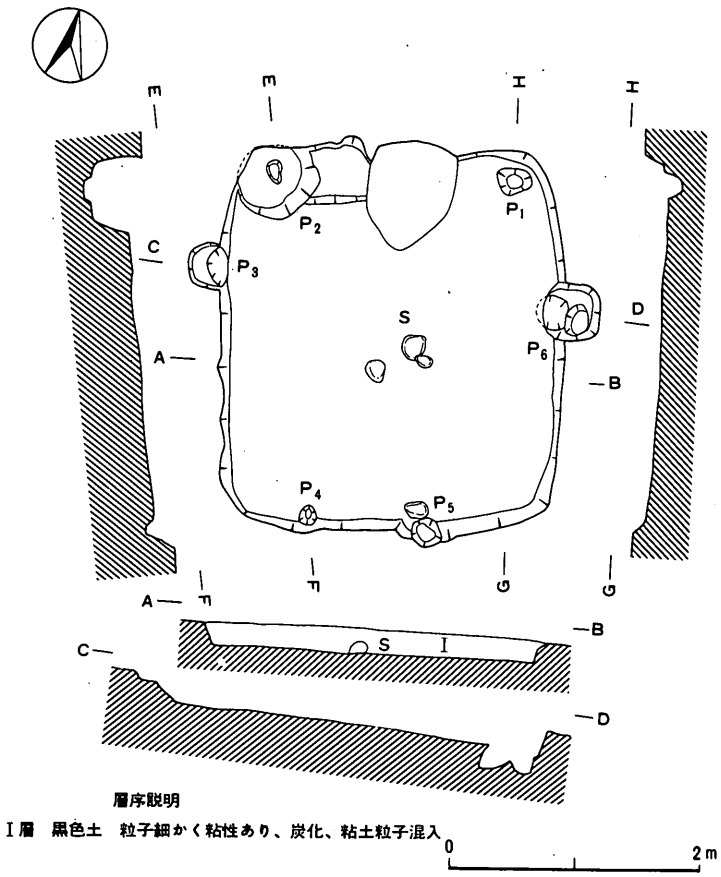
本住居址は、え－５・６グリッド内で検出された。北壁の左側上部に風倒木の先端部が接している。

平面プランは、北壁220 cm、南壁240 cm、東壁280 cm、西壁290 cmを測り、東西壁がやや長い隅丸方形を呈しており、非常に小規模な住居である。主軸方位はN－13°－Wを示す。壁高は、確認面より12～20cmを測り、南壁がややゆるいほかは、垂直に近い立ち上りをみせている。床面は平坦であった。

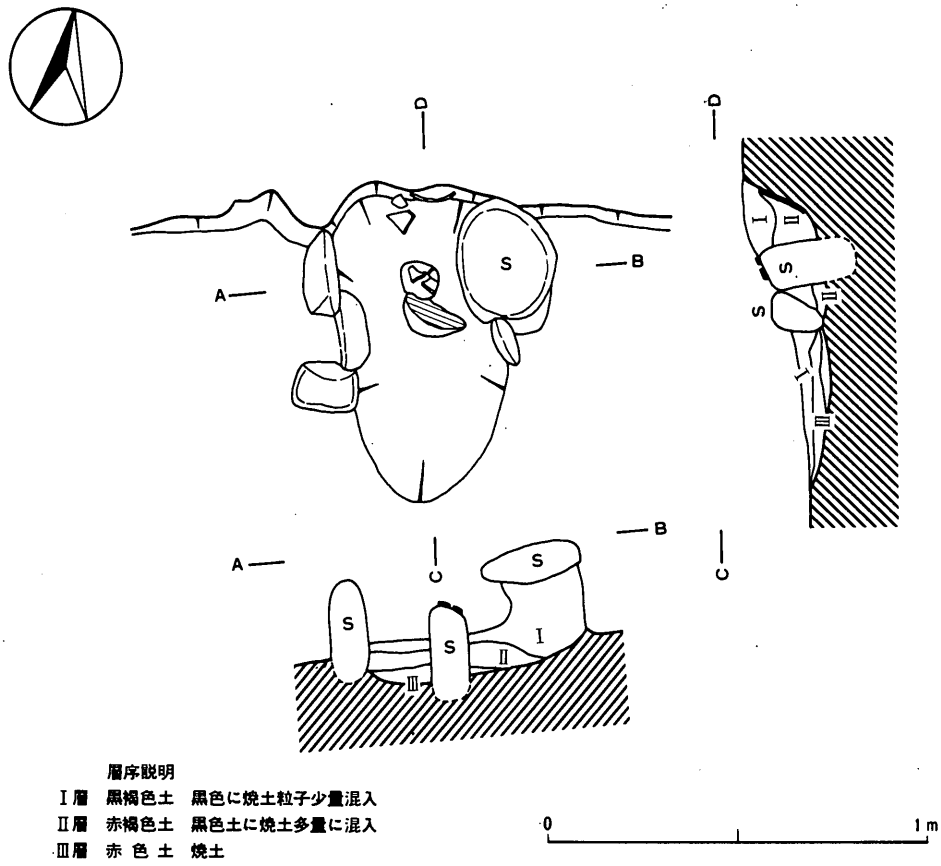
住居址内の覆土は単純で、黒色土１層であったが、黄褐色粘土粒子を多量に含み、部分的にブロック状を呈する。ほかに炭化粒子が含まれる。

カマドは、北壁のやや東寄りに設けられており、両袖の石組みと上部に架構した石１枚が残存し支脚石がしっかりと埋め込まれていて、良好な遺存状態であった。内部からは土師器甕の破片数点が出土した。煙道の掘り込みは認められなかった。

ピットは、６個検出された。P_1は北東コーナーに位置し、径28～22cm、深さ10cmの楕円形を呈する。P_4、P_5は径16～20cm、

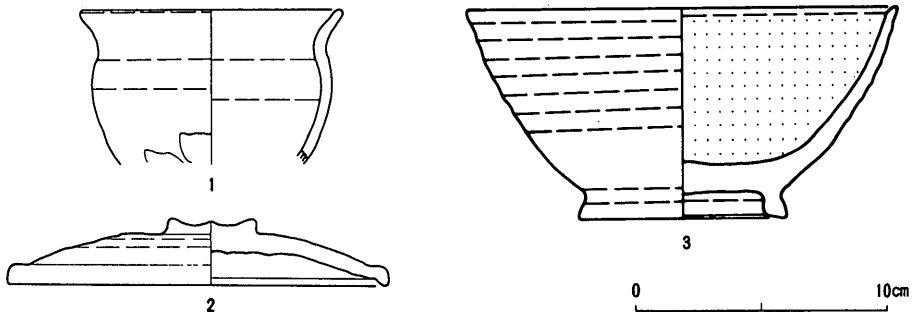


第５図　Ｈ１号住居址実測図（１：60）



第６図　Ｈ１号住居址カマド実測図（１：20）

深さ５～10cmの円形を呈し、ともに南壁に接している。P_6は東壁のやや北寄り住居の外にはり出した状態となって掘り込まれている。径45cmの方形を呈し、確認面からの深さ20cmで床面とほぼ同じレベルを示すが、さらに約20cm掘り込んで２つのピットが並ぶ。この１つはオーバーハングして床面へ立ち上る。P_3はこれと対応するように、西壁北寄りに壁外から床面へ斜めに掘り込まれている。これらの６個は整った配列を示さず、浅いものもあるが主柱穴および支柱穴であろうとおもわれる。P_2はカマドから40cmの距離で、北西コーナーに位置する。径60cmの円形で、深さ32cmを測る大形ピットである。内部は炭化粒子を含む黒色土と灰褐色粘土が混じって充満し、灰溜めの施設であろうとおもわれる。また、P_2とカマドの間は浅い落込みとなっているが、なんらかの用途を果したものとおもわれる。



第７図　Ｈ１号住居址出土遺物実測図（１：３）

第２表　Ｈ１号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器種	部位	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
7−1	土師小形甕	口〜胴	10.4 — —	胴部は球形で上半が張る。頸部はくの字に外反。最大径は口辺。	ロクロ回転利用によるヨコナデ	ロクロ回転利用によるヨコナデ	色調黒褐色 カマド右脇
7−2	須恵蓋		15.2 摘み 3.5	偏平ぎみの擬宝珠様摘み。中心からずれて取り付けてある。端部は肥厚し直立する。天井部は低く平坦。	ロクロ痕	ロクロ痕	色調茶褐色 南東コーナー覆土
7−3	土師高台坏		17.2 8.0 8.2	口辺部は内弯して立ち上る。高台は外開きし、安定した底部を呈する。	ロクロ痕	内面黒色 ヘラミガキ	色調褐色 南壁ぎわ床上

遺物（第７図）

本住居址の出土遺物のうち、図示しえたものは土師器小形甕・高台付坏、須恵器蓋の３点のみである。その他は小破片であるが、器種の判明するものは土師器では甕、内面黒色の坏、須恵器は甕、坏がある。遺物の量は少なかったが、住居址南半部分に集中する傾向がみられた。

１の小形甕は、本遺跡出土の甕形土器の中では最小でありミニチュアともいえる。２の須恵器蓋は、茶褐色の色調を呈し、生焼けでまったく土師質である。偏平擬宝珠様摘みはかなり中心からずれて取りつけられており、器形も若干楕円形がかり、歪みがみられる。いわば、できそこないが本住居址では使用されていたといえる。また、生焼けの蓋の完形品としては唯一の例である。３の土師器高台付坏も本遺跡では唯一の完形品である。高台は入念に調整され、器肉が厚く、外開きしていて頑丈で安定感がある。

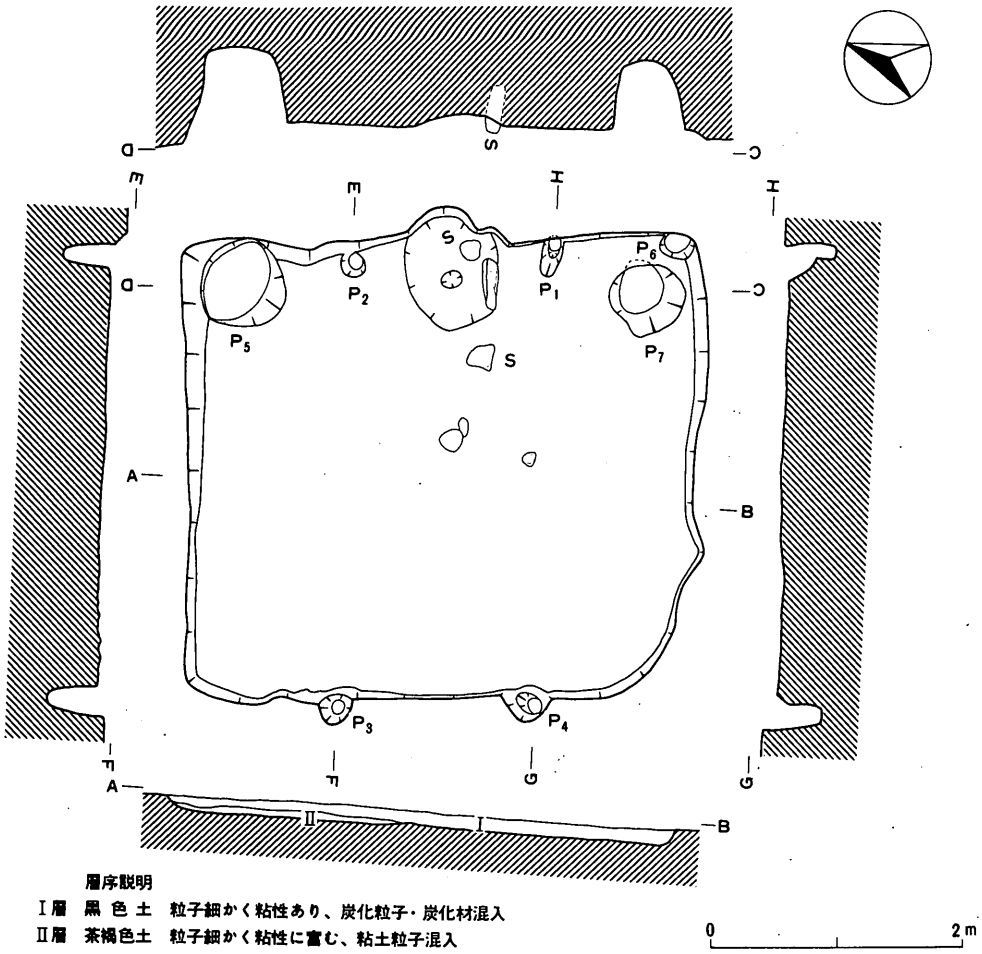
本住居址の遺物の量は、少ないながら、類例の少ないものを含んでいたといえる。時期は国分期に比定されよう。　（綿田　弘実）

2）Ｈ２号住居址

遺構（第８図）

Ｈ２号住居址は、い・う－７・８・９グリッド内において検出された。プラン確認の際、カマド左脇壁側から南西側にかけての土層が全面黒色土に覆れていて、当初確認に困難をきたしたが、精査により黒色土中にあっても明確にラインの判別ができた。

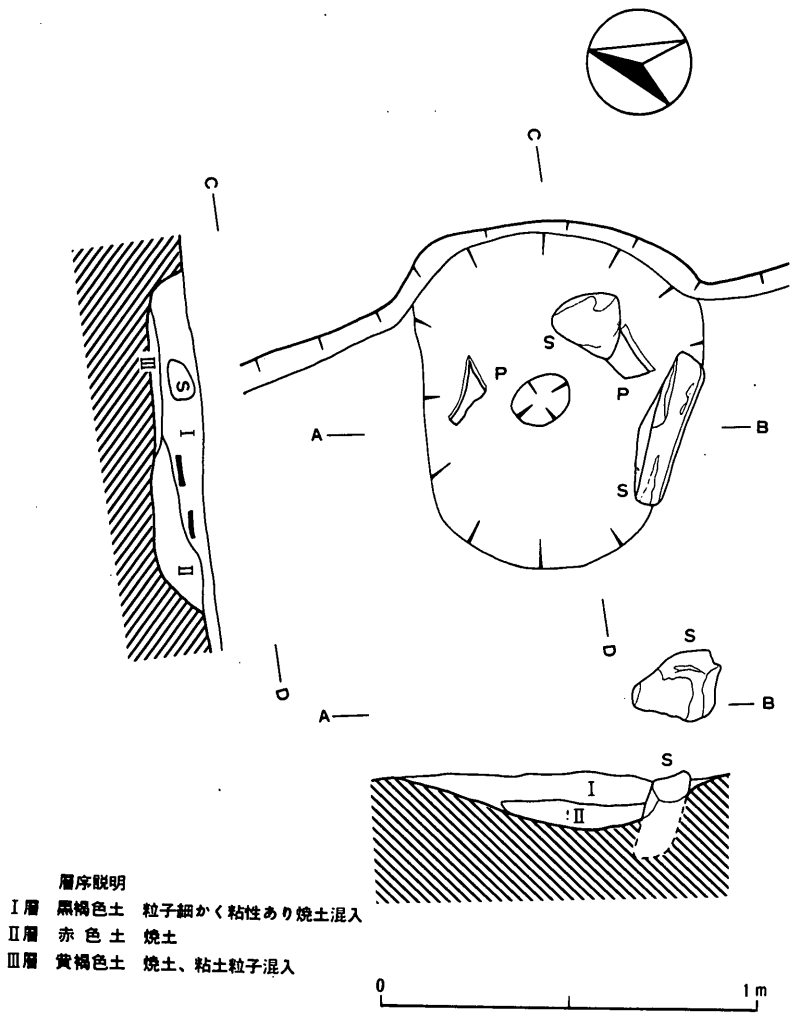
平面プランは、主軸410㎝×340㎝を測り、カマドの存在する壁がやや張り出した方形を呈し、主軸方位は、Ｎ－70°－Ｅを示す。壁高は５～15㎝を測るが、黒色土中の落込面であった部分は極めて軟弱で、またこの部分は覆土上面に炭化粒子が覆土中には１㎝～３㎝の炭化材が多量に混入していて、本住居址廃絶後なんらの影響によるものと思われる。あるいは焼失住居の可能性も考えられよう。



第８図　Ｈ２号住居址実測図（１：60）

住居址内の覆土は、2層から成るが極めて浅く第Ⅰ層は黒色土層で炭化粒子、炭化材を含んでいる。第Ⅱ層は茶褐色を呈し、地山である粘土粒子を多量に混入していた。床面は比較的平坦ではあったが、P_3からコーナーにかけて直径約1mに礫が粘土層に風化して床面に密着し凸凹の様相を呈していた。

カマドは、壁のほぼ中央に位置し、上面には甕の破片が残存していた。また、右側の袖石は厚さ14cmで三角形の平石（安山岩）を使用しており、しっかりと土中に埋め込んであった。なお支脚の存在を想定させる痕跡が認められる。焼土の堆積状況によりかなり長時間にわたって利用していたものと考えられる。



第9図　H2号住居址カマド実測図（1：20）

ピットは、P_1～P_4の4個が左右対になって配置しており、P_3、P_4は張り出し気味である。深さはそれぞれ36～45cmを測る。規模、位置等からして主柱穴であろう。設計された感を与える。

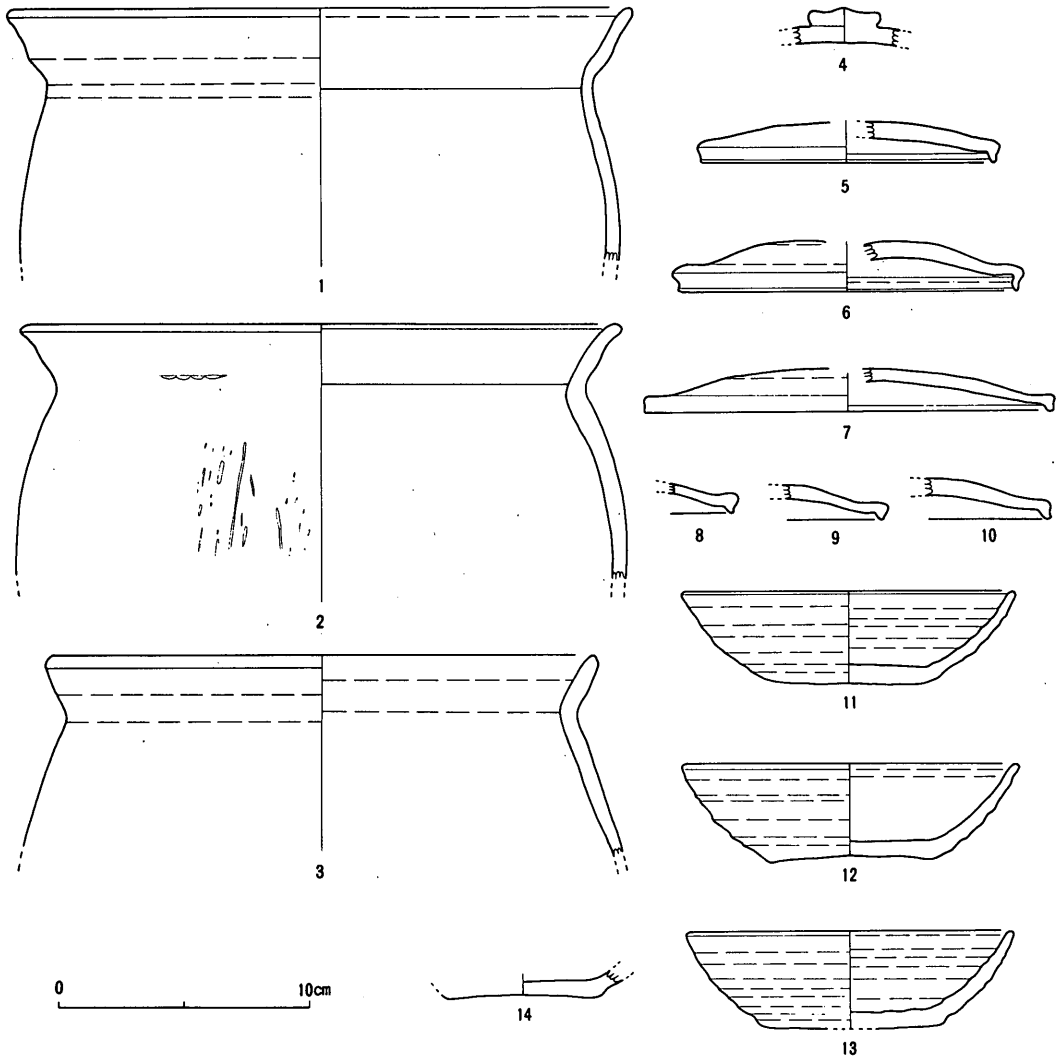
P_5は、カマド左脇コーナーに位置し径60cm、深さ38cmを測り規模も大きく、覆土に炭化粒子を多量に混入、またカマド脇に位置していたこと等から灰溜めの施設であろうと思われる。P_7は径60cm、深さ25cmの円形を呈する。付近に土器片の散布がみられた。貯蔵穴の可能性もある。さらにP_6はP_7の上部北東コーナーの壁上に位置し、径25cm、深さ10cmを測る。補助柱穴と思われる。

遺物（第10図）

本住居址から出土した遺物は、甕・蓋・坏の３器種であり、特に覆土中から蓋の破片が多く出土しており、どれも天井が低い偏平な器形が特徴である。蓋と対比してセットとなる供膳形態の坏が少ない。土師器は胴～底部を欠失する甕のみであって、その他蓋、坏は全て須恵器である。この点からも近接する窯址との関連が充分に考えられる。

なお、本住居址は、出土土器群から国分期に比定されよう。

（島田　恵子）



第10図　Ｈ２号住居址出土遺物実測図（１：３）

第3表　H 2号住居址出土土器一覧表

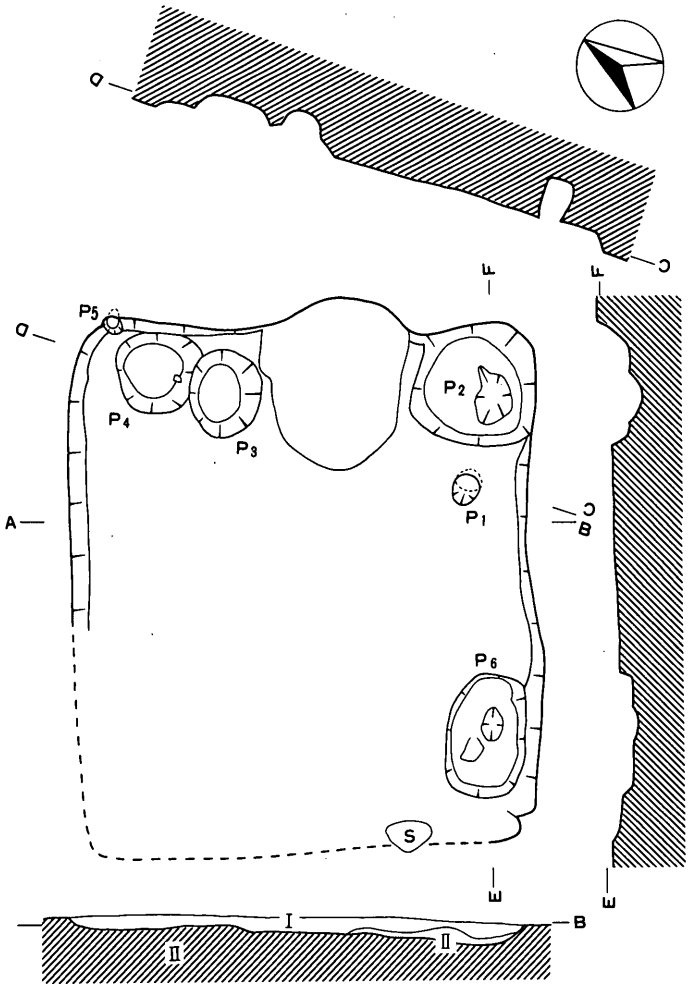
挿図番号	器種	部位	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
10—1	土師甕	口～胴上	25.0 — —	口辺部の中間にややふくらみをもち、頸部くの字状に外反する。	ロクロ回転による ヨコナデ	ロクロ回転による ヨコナデ	色調褐色 内、外面にスス付着 焼成良好、西側床直
10—2	〃	〃	24.0 — —	1とほぼ同形の様相を呈する。	ロクロ回転によるヨコナデ及び胴上部はハケ調整粗雑である。	ロクロ回転による ヨコナデ 砂利ふくむ	色調茶褐色 スス付着 焼成良好、カマド
10—3	〃	〃	22.0 — —	口縁屈曲部外面にはっきりとした稜がつく。頸部くの字状に外反する。	ロクロ回転によるヨコナデ。石英ふくむ。 摩滅している。	ロクロ回転による ヨコナデ	色調茶褐色 スス付着 焼成良好、カマド焼土内
10—4	須恵蓋	摘み	摘み 3.0	摘みは宝珠形を呈する。	ロクロ痕	ロクロ痕	色調茶灰色 覆土下 小石粒ふくむ
10—5	〃	口～天	12.0 — —	端部は肥厚し直立する。	ロクロ痕	ロクロ痕	色調灰色 覆土下
10—6	〃	〃	14.0 — —	天井部ややふくらむ 端部は内傾する。	ロクロ痕	ロクロ痕	色調背灰色 西側床
10—7	〃	〃	16.0 — —	口縁から天井部にかけて偏平である。 端部は肥厚し直立する。	ロクロ痕 砂粒ふくみ、粗雑である	ロクロ痕	色調白灰色 覆土下
10—11	須恵坏		13.4 3.7 6.0	口辺部は底部よりやや内弯気味に開いて立ち上る。 平底を呈する。	ロクロ痕 底部糸切り。 砂粒ふくみ、粗雑である	ロクロ痕	色調茶灰色 覆土下
10—12	〃		13.5 4.0 6.5	口辺部は底部よりやや内弯気味に開いて立ち上る。 上底を呈する。	ロクロ痕 砂粒ふくむ	摩滅著しい	色調茶褐色 カマド
10—13	〃		13.0 4.0 7.5	口辺部は底部よりやや内弯気味に開いて立ち上る。 平底を呈する。	ロクロ痕 指頭痕あり。 底部糸切り。	ロクロ痕 粗雑である。	色調灰色 覆土下

3）H 3号住居址

遺構（第11図）

H 3号住居址は調査区の最南端、し・す—15・16グリッド内において確認された。平面プランは、主軸340 cm × 360 cmを測る。調査区の南端であったため南端に添って流れる小川への排水のため田圃から配管工事を行なったことと小川の土堤により、南西面中間部まで破壊されていたが、ほぼ隅丸方形を呈するものと推測される。カマドを中心とする主軸方位はN —58°— Eを示す。壁高は確認面より10cmを測り垂直に立ち上る。

覆土は、Ⅱ層であるが非常に浅い。Ⅰ層・Ⅱ層ともに炭化粒子が多量に混入しており、特にⅡ



第11図　H３号住居址実測図（１：60）

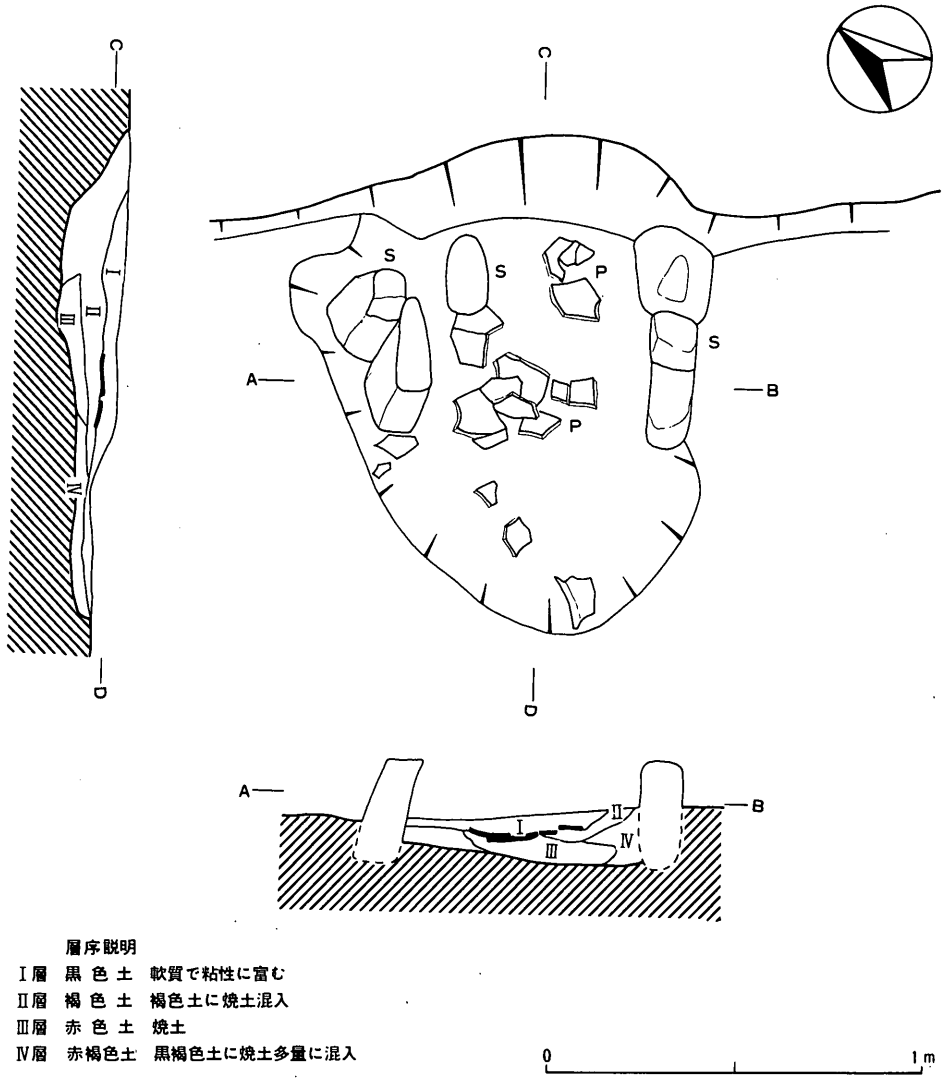
層の中央から東側にかけての土層は、焼土粒子の混入が多量にあった。住居址廃絶後に生じたものであろう。

確認されたピットは６個であるが、規模もまばらで主柱穴とおもわれるのはP_1だけである。そのほとんどが住居址に付随する施設であろう。H１号・２号住居址と同一の様相を呈するピットが本住居址にもカマド脇に存在する。P_2はカマド右脇コーナーにかかり、径90cmの円形を呈し、深さ27cmを測る。覆土は炭化粒子を混入していたが底面が粘土層であるため、灰の遺存は認められなかったが灰溜めの施設であろうとおもわれる。

P_3・P_4はカマド左脇に２つ連なった状態で検出された。P_3は50×60cm、深さ30cm、P_4は60×70、深さ16cmを計測する。両ピットからは甕破片が出土した。貯蔵穴あるいは別の機能を果したピットであろう。さらにP_6は、100×60cm、深さ15cmの規模で、底面中央よりやや後方に20×10cmの河原石が配置されている。

また、P_5はコーナーの壁上に位置しており、その規模から補助柱穴であろう。

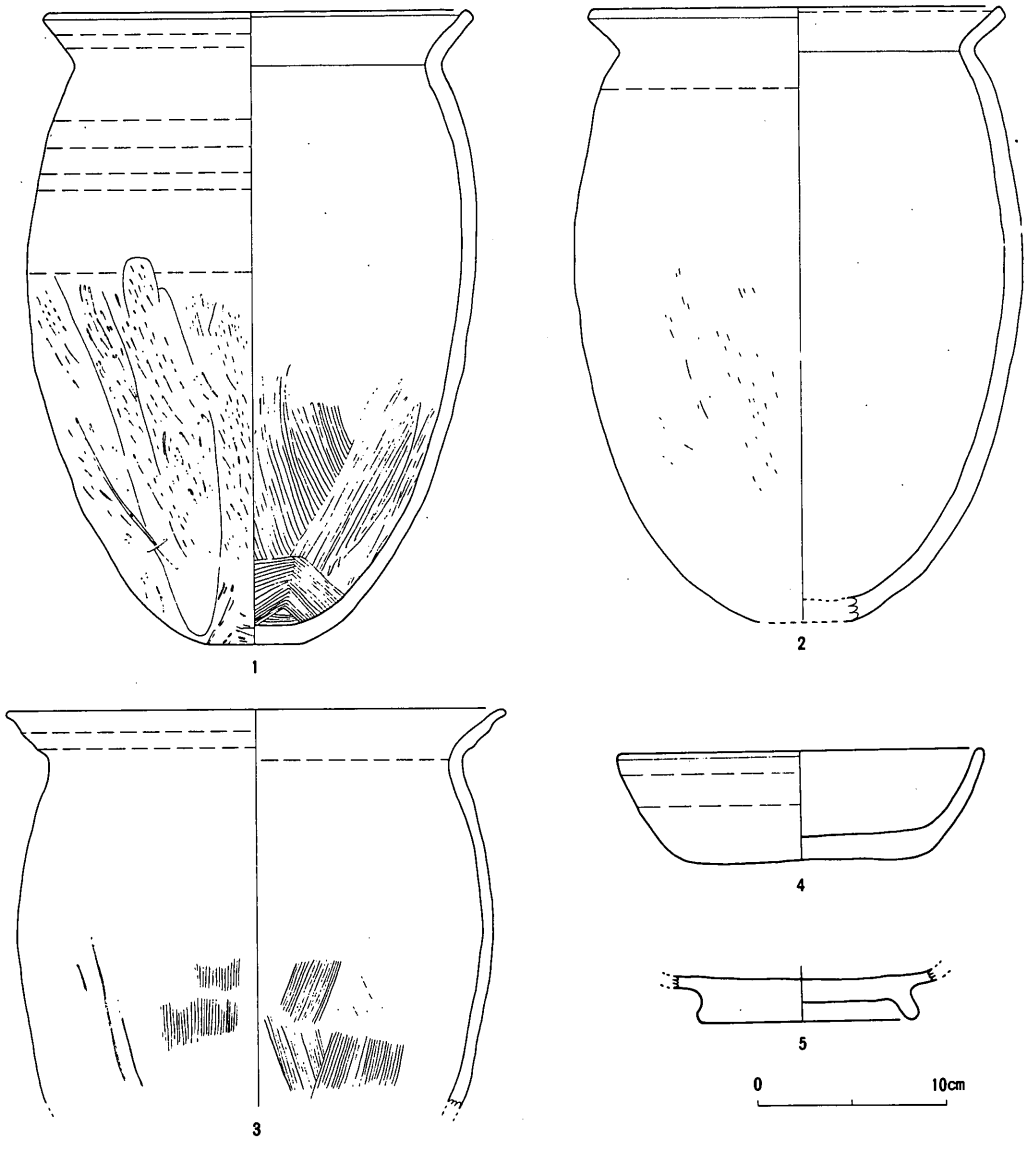
カマドは、壁中央部を山形に掘り込んで構築されており、袖石が比較的良好な状態で残存していた。安山岩質の河原石が使用されている。焼土上面およびカマド内全面から出土した甕破片は長胴を呈する甕１個体に復原可能となった。焼土の遺存は厚く、使用の頻繁を示しているといえよう。



第12図　H３号住居址カマド実測図（１：20）

遺物（第13図）

本住居址の出土遺物は比較的少なく、図示し得たものは５個体にとどまったが、この他の小破片も極めてわずかな出土であった。第13図No.１の長胴の甕は、本住居址検出の契機となったもので、カマド右脇のP_2ピット上面に直立していた。中に土が埋っており、その重みで千年以上もの年月を風雪に耐えて直立していたものと思われる。No.２も全く同形の甕で、前述したようにカマド内出土の破片が１個体に復原されたものである。どちらも土師質であるが、焼成が固くひきしまっており、県下各遺跡で出土した土師器とは焼成が特異である。この２個体に限らず本遺跡出



第13図　H 3 号住居址出土遺物実測図（1：4ただし4、5は1：3）

土の土師器はそのほとんどがこのような特質を示す。その焼成過程に興味が持たれるが、近接する窯址との関連が充分考えられる。また、土師器は煮沸形態の甕が多い。

No.3は、1・2より一まわり大きい長胴の甕であるが、胴中央より底部が欠失する。No.4・5は唯一の供膳形態の坏・高台付坏であり両者とも須恵器である。4は器肉が厚く、底部が長径であるため安定している。

また、本住居址からは熱を受け形態不明の鉄滓が出土している。包含層から携帯用のミニ砥石

第4表　H 3号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器種	部位	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
13—1	土師甕		22.5 33.0 5.0	口縁屈曲部外面にはっきりした稜をもつ。頸部くの字に外反しなだらかな曲線で胴下部へ続く。最大径は胴中央にあるが口径とは1cmの差である。短径の平底を呈する。	ロクロ回転によるヨコナデ胴中央～下部にかけてヘラケズリ	ロクロ回転によるヨコナデ胴下部より底面にかけてハケ調整	色調茶褐色 全体にスス付着 焼成良好 P 2覆土上
13—2	土師甕		21.7 32.0 5.0	Iと器形はまったく同一である。	ロクロ回転によるヨコナデ胴～下部にかけてヘラケズリ	ロクロ回転によるヨコナデ	色調茶褐色 スス付着部分的にあり 焼成良好 カマド
13—3	土師甕	口～胴	27.0 — —	口辺部中央にややむくらみをもち、頸部くの字状に外反する。	ロクロ回転によるヨコナデ胴中央よりヘラケズリ	ロクロ回転によるヨコナデ胴中央よりハケ調整	色調褐色 一部に赤斑あり 南東コーナー覆土下
13—4	須恵坏		15.0 4.5 9.0	口辺部は底部より直線的に開いて立ち上る。 器肉厚く、安定した平底を呈する。	ロクロ痕 底部は糸切り	ロクロ痕 砂粒ふくむ	色調灰色 覆土上
13—5	須恵高台付坏	底	— — 9.0	短い高台を有す。	ロクロ痕	ロクロ痕 砂粒多い	色調茶褐色 内面のみ茶灰色 西側覆土下

が出土していることからしても、鉄器の普及があったものと考えられる。

以上、本遺構は出土遺物から国分期に比定されよう。

（島田　恵子）

4）H 4号住居址

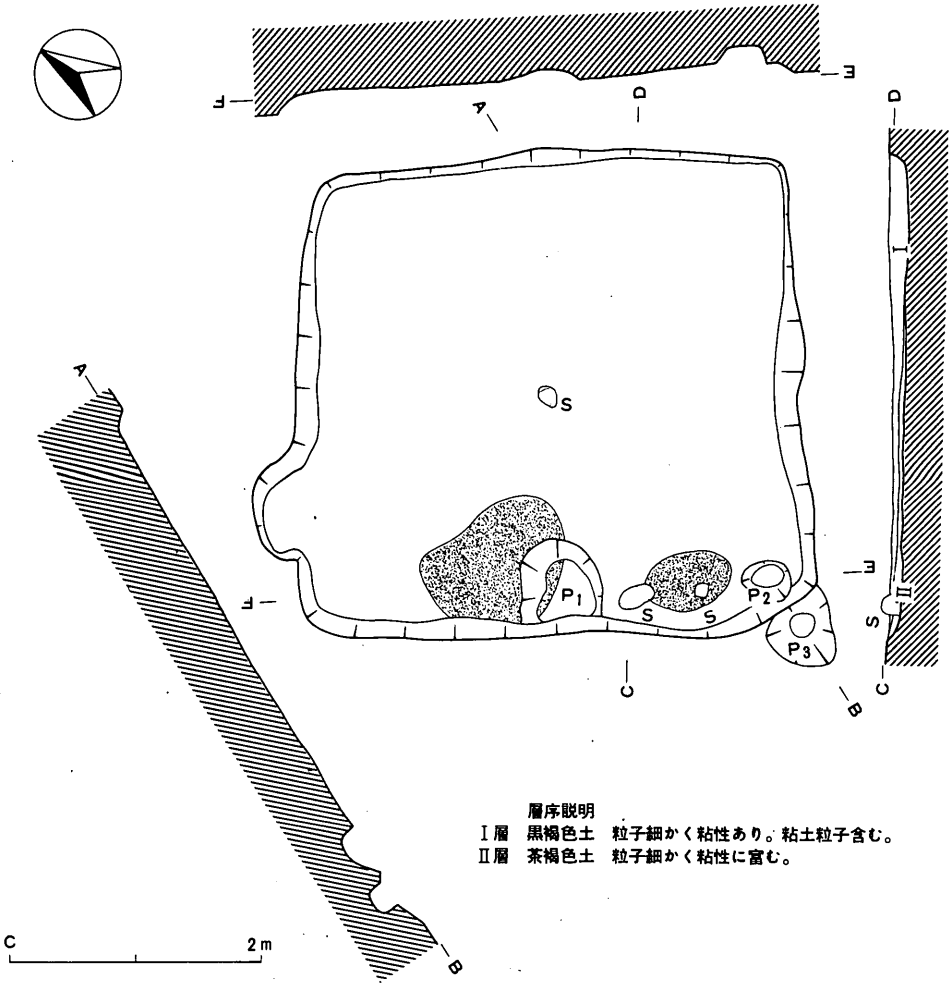
遺構（第14図）

本住居址は、H 3号住居址に隣接した、さ・し・す—14・15グリッドより検出された。住居址の北西面中央まで土堤が築かれていて地形的に段差があり、プラン確認の際すでに南東の床面が露出していた。

平面プランは、380 cm×330 cmを測る方形を呈する。また、西側に30×70cmの出張りが存在する。壁高は7～18cmを計測し、なだらかに立ち上る。床面はほぼ平坦であったが、確認の際すでに床面が露出していた南東面は、粘土の黄褐色が鮮やかであり、開田工事にともない多少の削平があった可能性がある。

ピットは、コーナーとコーナーから壁外に張り出した2個が確認された。P_1は40×30cm深さ14cm、P_2は50×50cm、深さ26cmを計測する。壁外ピットが想定されるので精査を行なったがその存在は認められなかった。

更に、南側中央に径60cm、深さ8cmを測る掘り込みが存在し、その左右床面には比較的広範囲にわたって焼土が散布していた。カマドが破壊された残存ではないかと思われる。本住居址のカマドは南側に構築された模様であることが推定される。本遺跡で確認された住居址の中で本住居



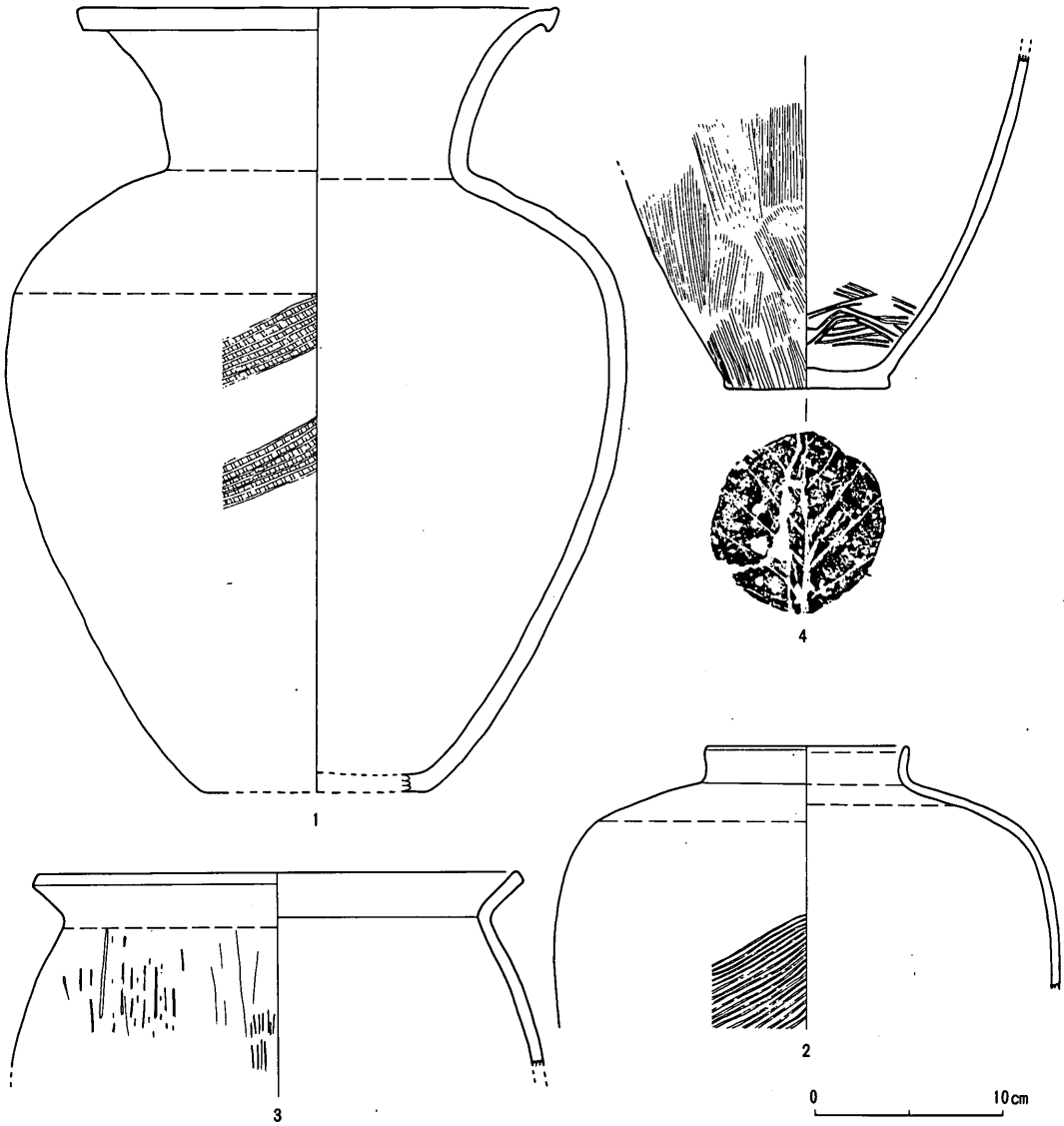
第14図　Ｈ４号住居址実測図（１：60）

址のカマドのみ逆方向に位置している。隣接するＨ３号住居址とカマドが向い合うことになり、Ｈ２号址と同様カマドの存在する側が多少張り出し気味である。

遺物（第15図）

本住居址からの出土遺物は、住居内中央とカマド付近に集中して出土した。特に住居址中央には１の壺破片が広範囲にわたって散乱していた。図示しえたものは、貯蔵、煮沸、供膳形態に大別され、器形ともにバラエティに富んでいる。

１の須恵器壺は、胴下部に製造上のミスとおもわれる大きな凹みが目立つ。欠陥品がここでも使用されていたことがうかがえる。



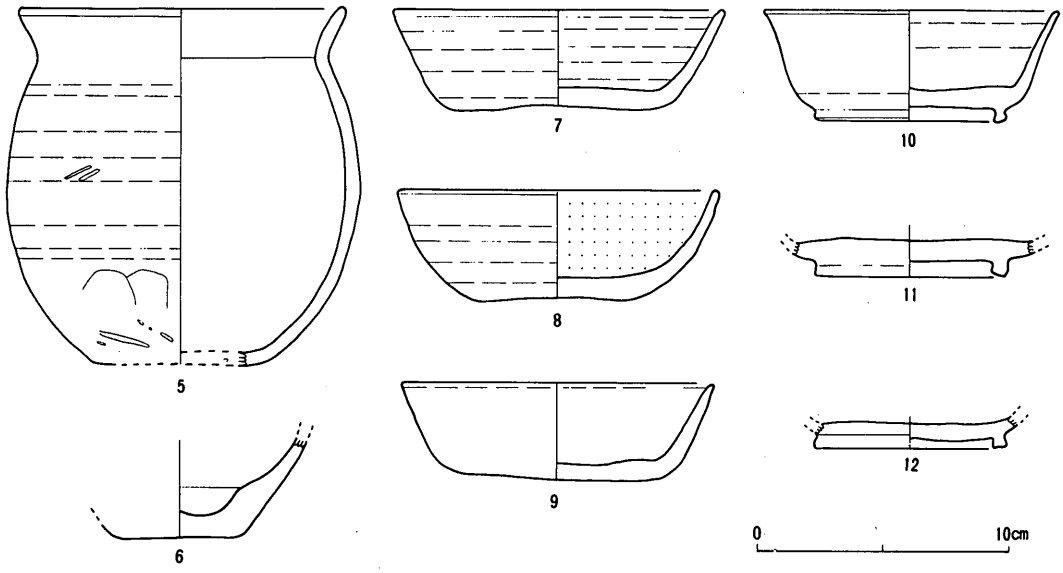
第15図　Ｈ４号住居址出土土器実測図1（１：４）

２の短頸壺は、胴中央～底部を欠損する。肩部から胴上部にかけては使用による斑点状のまだら痕が顕著である。器肉がうすく肩部が大きく張る。

３は、Ｈ３号住居址出土の完形品であるところの、口縁屈曲部外面にはっきりした稜をもつ長胴甕と器形、特徴が同一である。

４は、口辺から胴上部を欠失するが、底部にホウ科の朴の木の葉痕が鮮明に残されている。

また、外面、内面ともに煤の付着が著しい。住居址出土の甕の中では唯一であるところのクシ



第16図　H４号住居址出土遺物実測図２　（１：３）

歯状工具による調整が施されている。５は小形甕で最大径を有する胴部と口辺との径の差が1cmである。

坏形土器は３個体が高台付であるがそのうちの２個体、11、12が高台部のみの遺存である。８は、内面黒色でヘラミガキされていて光沢もあるが、外面は墨をしみこませただけで粗雑である。焼成が固く須恵質的様相を呈し、一般的にみられる内面黒色土器とは異質なものを感じる。９は、調整がなめらかできれいである。口縁の一部分に煤（油状)が付着しており、灯明皿の受け台に使用された可能性も考えられる。10も９と同一に調整がなめらかでその上、器肉がうすく口縁の線の美しさは別格である。

本住居址も須恵器が大半を占める。時期は国分期に比定されよう。

（島田　恵子）

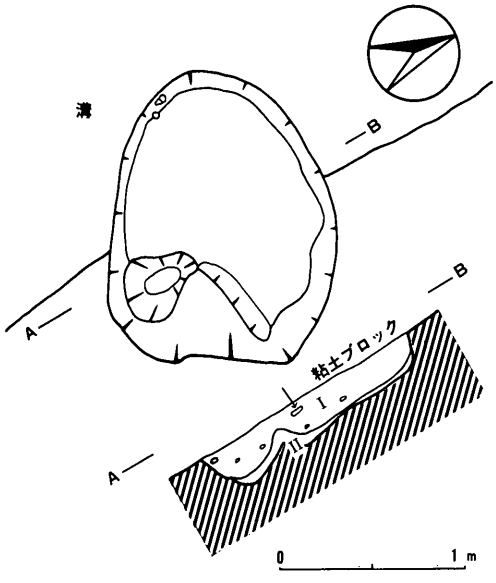
第5表　H 4 号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器種	部位	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
15—1	須恵壺		25.5 41.5 12.0	口頸部は大きく外反し、最大径が高い位置にあり、肩の張る形態を呈す。胴下部に大きな凹みがあり製作上のミスと思われる。	ロクロ痕 格子状叩き文が全体に施されている。	ロクロ痕	色調青灰色 中央床
15—2	須恵短頸壺		11.0 — —	頸部短く肩が張る。最大径は胴中央にある。 器肉うすい。	ロクロ痕 平行叩き目が全体に施されている。	ロクロ痕	色調灰黒色 中央床
15—3	土師甕	口～胴上	26.0 — —	口縁屈曲外面にはっきりした稜をもつ。頸部くの字に外反する。	口辺ロクロ回転によるヨコナデ ハケ調整後ヘラケズリ砂粒浮き出て粗雑	ロクロ回転によるヨコナデ	色調茶褐色 中央覆土下
15—4	土師甕	胴中～底	— — 9.0	底部より胴にかけてなだらかに弯曲する。	摩滅しているが、ハケ調整が施されている。 底部に木葉痕	ロクロ回転によるヨコナデ ハケ調整	色調茶褐色 スス付着、内、外面にあり。覆土下
16—5	土師甕		13.0 14.0 7.0	口辺から頸部にかけてくの字に外反する。 最大径は胴中央にあるが、口径と0.5mmの差である。	ロクロ回転によるヨコナデ 砂粒ふくむ	ロクロ回転によるヨコナデ 砂粒ふくむ	色調褐色土 覆土下
16—6	土師甕	底	— — 5.0	短径を有する底部である。	底部ヘラケズリ痕あり		色調茶褐色 覆土下
16—7	須恵坏		13.0 4.0 8.0	口縁部は底部から直線的に開く。 器高浅い。やや上底気味である。	ロクロ痕 底部は糸切り	ロクロ痕	色調灰茶色 口辺部のみ茶色 覆土下
16—8	土師坏		13.0 4.5 6.0	口縁部は弯曲して立ち上る。 やや上底気味である。	ロクロ痕 外面全体に墨をしみこませた様相である。	内面黒色 ヘラミガキ	色調黒褐色 南床直上
16—9	須恵坏		12.5 4.0 8.0	口縁部は底部から直線的に開く。 安定した底部を呈する。	ロクロ痕 なめらかで調整良好 底部ヘラケズリ	ロクロ痕	色調灰褐色 焼成良好 南側焼土内
16—10	須恵高台坂		12.0 4.5 7.5	器肉うすく、短い高台を有し器高も浅い。	ロクロ痕 焼成、調整とも良好であるが、砂粒が浮き出ているのが目立つ。	ロクロ痕	色調 焼成良好 南東側焼土内
16—11	須恵高台坂	底	— — 7.5	短い高台を有す。	ロクロ痕 砂粒ふくむ 底部ヘラケズリ	ロクロ痕	色調茶褐色 覆土下
16—12	須恵高台坂	底	— — 7.5	短い高台を有す。	ロクロ痕 底部ヘラケズリ	ロクロ痕	色調青灰色 北西床直上

2　土　坑

1）Ｄ１号土坑

本遺構は、溝状遺構の上部を切り、Ｄ２号土坑と隣接した、い・う－12グリッドより検出された。



層　序　説　明

Ⅰ層　黒 色 土　粒子細く粘性あり、小石粒混入

Ⅱ層　黒褐色土　粘質性に富み、粘土粒子多量に混入

第17図　Ｄ１号土拡実測図（１：40）

平面プランは、長径 138 cm、短径 114 cmを測り、不整形の形状を呈す。主軸方位はＮ－76°－Ｗを示す。確認面からの深さは20cmと浅く、覆土は、上部が小粒子を含む黒色土で、下部が粘土粒子を多量に含む黒褐色土の二層により形成されていた。

溝状遺構と本遺構の関係であるが、溝の上部を切って本土坑が構築されている。これは、溝状遺構が土坑の形成された時よりも古く、ある程度土が堆積し溝が埋まりかけた頃、本土坑が構築されたものと思われる。床面が敲き床であり、茶褐色土層で形成されていた。他より別の土を運び床面を作ったのではないかと推測される。

遺物の出土は皆無であり、本土坑の性格、用途を決定する所見は得られなかった。

（近藤　尚義）

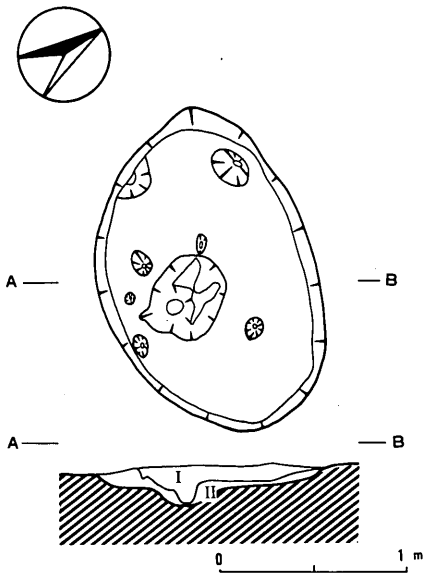
2）Ｄ２号土坑

本遺構は、溝状遺構、Ｄ１号土坑に隣接した、う－11グリッドより検出された。

平面プランは、長径 172 cm、短径 116 cmを測り、ほぼ楕円形を呈す。主軸方位はＮ－65°－Ｗを示す。壁は、比較的急な傾斜をもって立ち上がり、底面は凹凸の激しい複雑な様相を呈する。覆土は、上部が炭化粒子を混入する黒褐色土で、下部は、粘土粒子を含む茶褐色土の二層より形成されていた。

遺物の出土は皆無であり、本遺構の性格、用途等を決定する所見は得られなかった。

（近藤　尚義）



層 序 説 明

I層 黒褐色土　粒子細く粘性あり、炭化粒子混入

II層 茶褐色土　〃　粘土粒子混入

第18図　D２号土坑実測図（１：40）

3）D３号土坑

D３号土坑は、溝址及びD１号、D２号土坑に隣接した、え－11グリッド内より検出された。

ひょうたん形を呈し、掘り込み面が２ケ所に区分される。上部の掘り込みは、40×48cm、深さ10cm、下部は60×50cm、深さ16cmを測る。主軸方位は、N－10°－Eを示す。

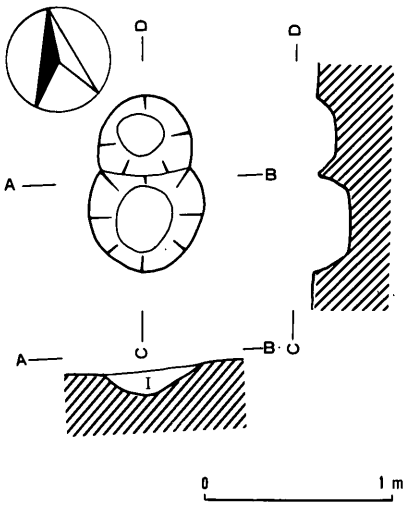
覆土は１層で形成され、粘土粒子混入の黒褐色土であった。

出土遺物は、図示した燈明皿・羽釜片の他に坏口辺部小片、坏胴部小片が出土した。１の燈明皿は½の破片である。口径８cm、器高2.5cm、底部約３cmを計測し、器肉がうすく、口縁にゆがみがあると共に底部糸切痕が胴下部の一部に入りこんでおり欠陥品ともおもえる。また、燈明皿に認められる油煤がみられないことから供献に利用したものと推定される。２の羽釜片は相当利用されたと思われる煤が外面を覆い、胎土も１cm～３cmまでの小石が多量に混入していて粗雑な調整が目立つ。

本土坑は、規模からして祭祀的要素がうかがえるものの、その性格、用途は不明である。

時期は、国分期(平安時代後期)に比定されよう。

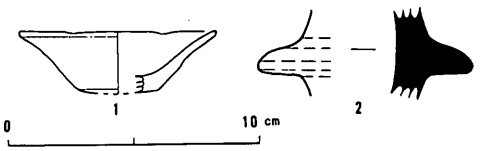
（佐藤　敏）



層 序 説 明

I層 黒褐色土　粒子細い。粘土粒子含む

第19図　D３号土坑実測図（1：40）



第20図　D３号土坑出土遺物実測図（１：３）

4）D４号土坑

D４号土坑は、調査区の東南端、H３号住居址、H４号住居址、D５号～D８号の４基の土坑群に隣接した、せ－13・14、そ－14グリッド内において検出された。

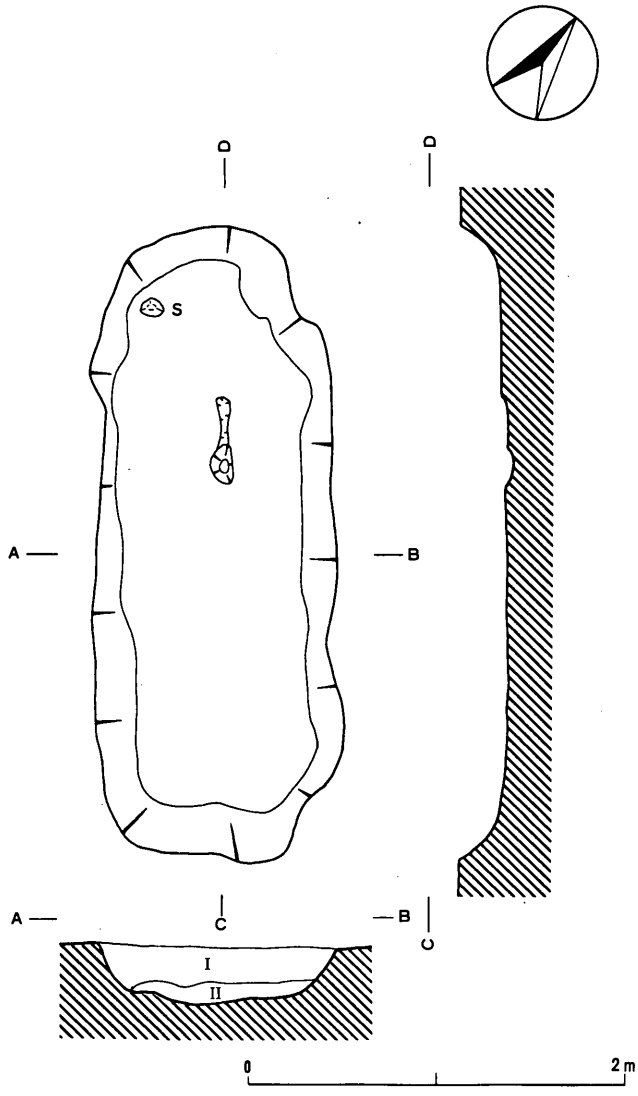
平面プランは、長軸330cm、短軸128cmを測る整っ

た長楕円形を呈し、確認面からの深さは31cmを測る。西壁の一部が垂直になる外、立ち上りはゆるやかである。底面は平坦であるが、南半分は地山が砂利質のため若干凹凸がある。長軸上のやや北寄りに径20cm、深さ５cmの小穴と、それに接する小溝状の掘り込みがある。北壁際には小児頭大の安山岩１個が存在する。主軸方位は、N－30°－Wを示す。

覆土は、上下２層からなり、上層のⅠ層は軟質の黒色土で多量の炭化粒子を含み、遺物はこの層の下部から多く出土した。下層のⅡ層は、Ⅰ層と茶褐色粘土との混入土層で、炭化粒子は微量であった。部分的に地山の粘土層がブロック状に含まれており、堅固な堆積であった。セクション部位を境界として覆土の様相は異なり、地山の相違のほか南半分の方が炭化粒子、遺物とも多く含まれる傾向を示した。

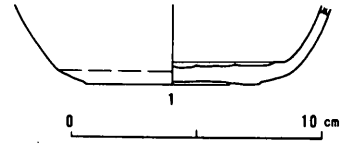
出土遺物のうち図示できたものは、ロクロ成形、糸切り痕底部をもつ土師器坏１点であった。中央付近のⅠ層下部の出土である。その他、器種の推定できる破片は、土師器甕（もっとも多量）、須恵器坏、甕等である。

本土坑はその規模、形状からしてかなり立派な土坑墓と推定される。また、北壁際に小児頭大の石が１個存在した事も何等かの意味を持つものと思われる。時期は出土土器から国分期に比定されよう。（綿田　弘実）

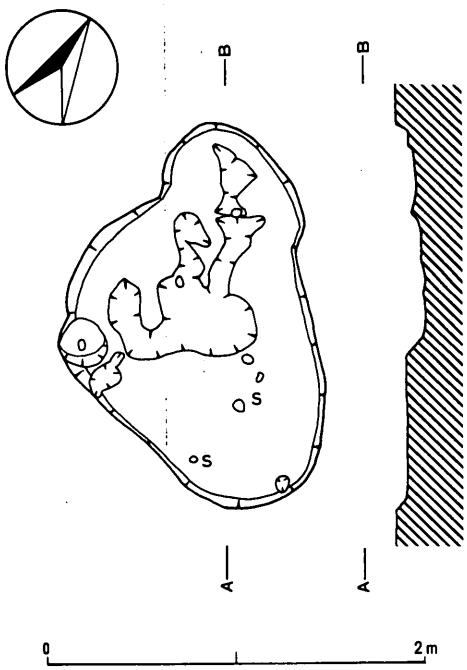


層序説明
Ⅰ層　黒色土　軟質で粘性あり、炭化粒子を多量に混入
Ⅱ層　茶褐色土　粒子細く粘性あり、粘土粒子、小礫混入

第21図　Ｄ４号土坑実測図（１：40）



第22図　Ｄ４号土坑出土遺物実測図（１：３）



第23図　Ｄ５号土坑実測図（１：40）

6）Ｄ６号土坑

Ｄ６号土坑は、調査区の東南端そ・た－13グリッド内にて検出された。

平面プランは、径100㎝、深さ27㎝を計測し、ほぼ円形を呈する。壁は垂直に立ち上る。主軸方位はＮ－37°－Ｅを示す。

覆土は、２層から成り、Ⅰ層が黒色土に焼土・炭化粒子を多量に混入しており、Ⅱ層は炭化・粘土粒子の混入がみられた。おそらく人為的堆積であろうと思われる。

遺物の出土は皆無であったが、隣接のＤ７号土坑と形態、様相等が類似していることから、同一時に構築されたものと推定される。

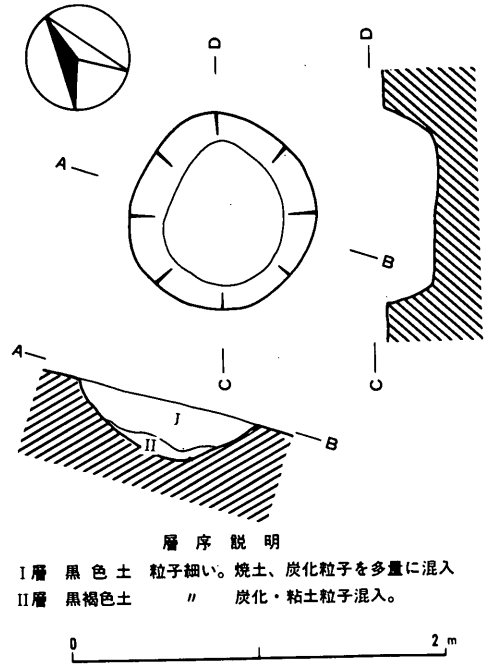
（島田　惠子）

5）Ｄ５号土坑

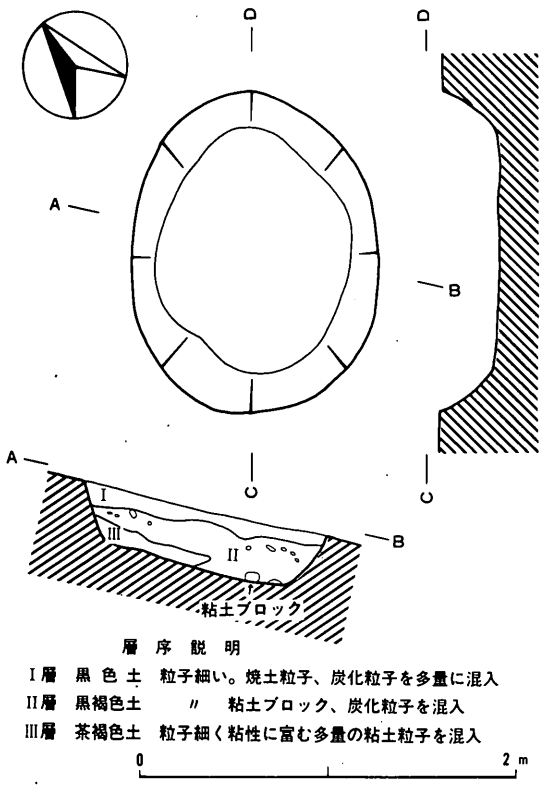
Ｄ５号土坑は、Ｄ４号土坑のわずか20㎝南に位置する。長軸197㎝、短軸138㎝を計測し、南西がふくらむ不整形を呈す。深さは４～８㎝で、皿状の浅い掘り込みであった。底面の状態は、地山が砂利質のために凹凸が激しく、深さ数㎝の不整形の溝状の部分と、２、３の小穴、西側のふくらんだ部分には径25㎝の浅い円形ピットが存在する。

本土坑のプラン確認は明瞭に検出されたが、確認面がすでに底面付近に達していたものと思われる。遺物の出土は皆無であった。よって、本土坑の時期、性格等は不明である。

（綿田　弘実）



第24図　Ｄ６号土坑実測図（１：40）



第25図 D 7号土坑実測図（1：40）

7）D 7号土坑

本土坑は、D 6号土坑の西隣り、そ・た－13・14グリッド内にて確認された。

平面プランは、楕円形を呈し、長径166cm、短径130cmを測る。主軸方位はN－39°－Eを示し、確認面からの深さは25～29cmを測り、壁は垂直に立ち上る。

覆土は3層によって形成される。Ⅰ層は、D 6号土坑と全く同類であり、Ⅱ層は、炭化粒子と全体に粘土ブロックが混入されていた。Ⅲ層は、多量の粘土粒子を混入する。

遺物は、土師器小破片が7点出土した。小形甕口縁、胴部、他には本遺跡の住居址から出土している長胴甕で、口縁外面の屈曲部にはっきりした稜をもつ口辺部小片胴部小片等である。どの破片も磨滅が著しく、本遺跡の土器は焼成が固いことが特徴であることからして、再利用されたものと考えられる。

D 6号、D 7号土坑ともに土坑墓であった可能性が強い。時期は、住居址と同時期の国分期に比定されよう。

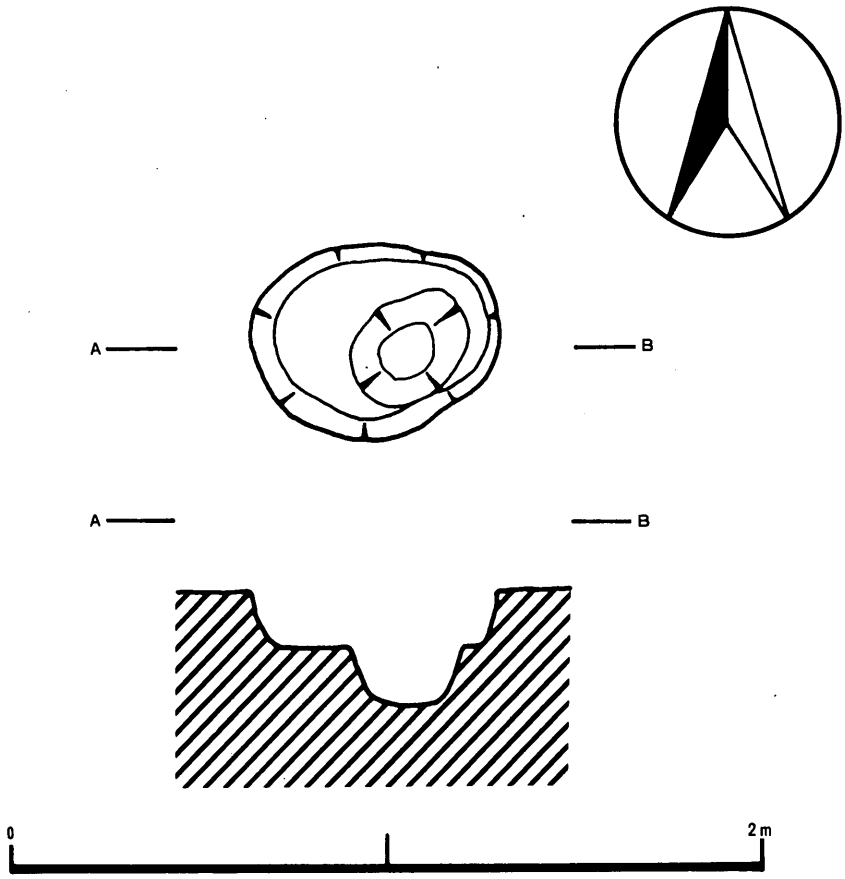
（島田　恵子）

8）D 8号土坑

本遺構は、そ・た－12グリッド境界上で検出された。D 7号土坑の北110cmに位置する。平面プランは、長軸65cm、短軸52cmの楕円形を呈し、小形である。底面は確認面から約15cmを測るが、さらに15cm掘り込んだピットが存在する。立ち上りは垂直に近い。

遺物の出土は意外に多いが、小破片のみで図示でき得なかった。器種は、土師器甕、坏である。尚、開口部から、太い隆帯に爪形文が施された縄文中期土器1片が発見されたが、混入であろう。本遺構の時期は、国分期に比定されよう。

また、本土坑は他の土坑と趣きが異なり、小規模で柱根状の掘り込みを有する上に、遺物が多く、単一な土坑的な性格がうかがえない。南西60cmの位置にカマド跡が単独で検出されているが、



第26図　Ｄ８号土坑実測図（１：20）

支脚石、火床の位置関係から一般的な住居址を想定すると、本遺構はカマド脇、または北東コーナー付近に位置づけられる。また、火床の確認面も同レベルであり、伴出土器にも差異は認められず、あるいはこの破壊された住居址に付随する施設であることも考えられよう。

（綿田　弘実）

9）Ｄ９号土坑

本土坑は、た・ち－５グリッド内にて検出された。平面プランは、長径２ｍ、短径１ｍ、深さ28～50cmを計測する。壁は急傾斜で立ち上り、主軸方位は、Ｎ－35°－Ｅを示す。

覆土はⅡ層から成り、上部覆土は焼土粒子を混入しており、下部は小石、粘土粒子を多量に混入する褐色土である。また、底面先端部付近に２ケ所の凹みが生じる。

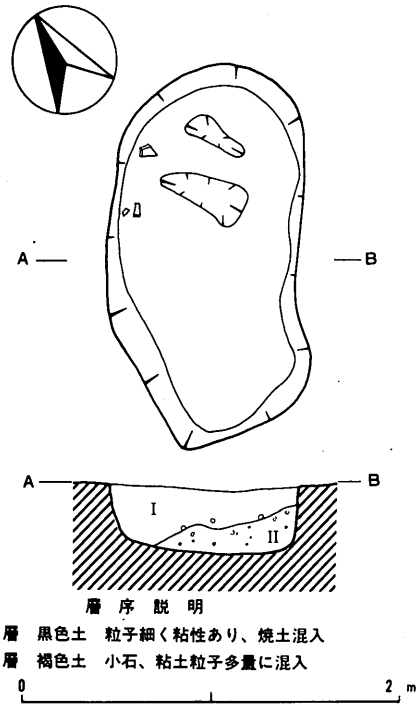
遺物は、Ⅰ層下部より土師器甕胴部の破片が３点出土した。その内の２片は接合されたが、残り１片も同器種の破片である。Ｄ７号土坑の出土土器と同様磨滅が著しい。内面は磨滅が著しい

のにも関わらず、おこげ痕が明瞭に遺存していた。再利用の可能性が強い。また、外面調整は粗雑でH3号住居址出土の長胴甕と類似する。

さらに、本土坑の掘り下げを行なっている過程において、作業従事者が異常な臭気に気分を悪くする状態をきたした。本遺跡は地山が白色に近い粘土層のため、骨粉や灰の遺存を認めることが不可能である。おそらく埋葬された人体の腐敗による臭気であると思われる。規模、形態等から土坑墓であろうと推定はしていたものの、この異常な臭気によってその可能性を確信したのであった。

時期は、出土した甕破片から国分期に比定されよう。

（島田　惠子）



第27図　D９号土坑実測図（１：40）

10）D10号土坑

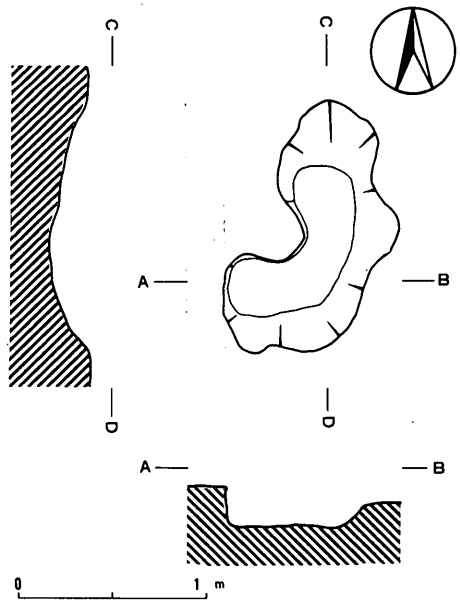
本遺構は、たー２、ちー２・３グリッドより検出された。

平面プランは、長径 132 cm、短径38cmを測り、不整形の形状を呈す。主軸方位はほぼ北を示す。最深部は確認面より20cmを測る。東側の壁の立ち上りは比較的急であるが、他は緩かな立ち上りをみせる。

出土遺物は、須恵器坏片２点、土師器甕胴部片３点が出土した。性格は不明である。

時期は、出土土器から国分期に比定されよう。

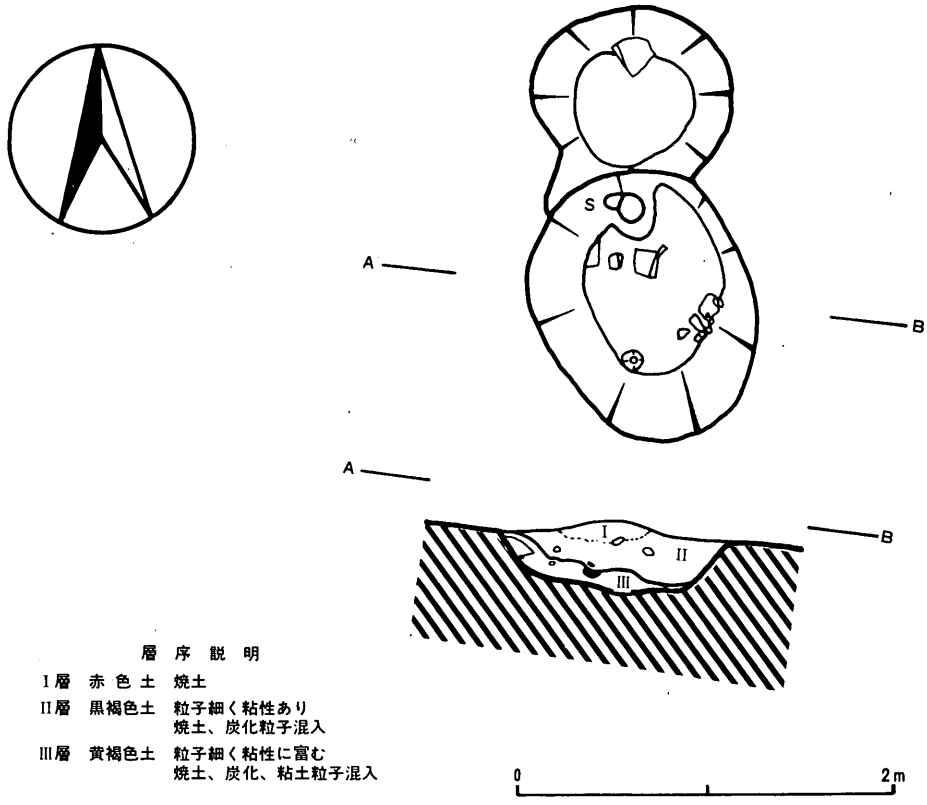
（近藤　尚義）



第28図　D10号土坑実測図（１：40）

11）D11号土坑

本遺構は、たー２・３グリッドより検出された。平面プランは、長径 112 cm、短径38cmで、二つの円形のピットが交わった形状を呈す。主軸方位はほぼ北を示す。最深部は確認面より20cmを測る。壁は比較的緩やかな傾斜を持つ。中心部より南側の壁には小さな凹みが存在する。

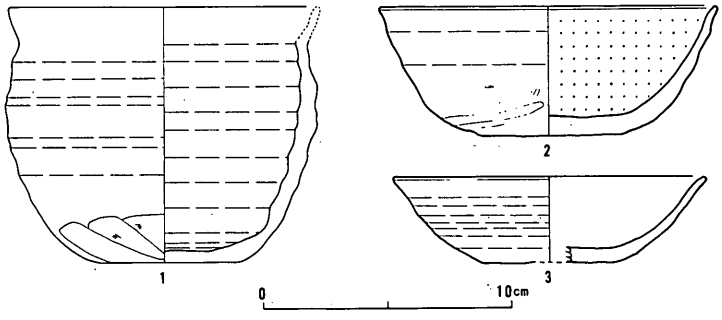


第29図　D11号土坑実測図（1：20）

覆土は上部が、焼土と炭化粒子を含む黒褐色土で、下部が焼土・炭化・粘土粒子を含む黄褐色土の二層により形成されていた。

出土遺物は、比較的多く、図示した3点の他、土師器大甕口縁部2点、須恵の大甕口縁部片2点、須恵器坏口縁部片1点、その他器種不明の土師小片16点、さらに、底面直上より土師の坏片4点が出土した。小形の土坑内に土器破片が焼土と炭化粒子を含んだ土と共に混入している。

図示した3点も、小片を接合して複原したものである。1の小形甕は器肉がうすく磨滅が著しい。



第30図　D11号土拡出土土器実測図（1：3）

第6表　D11号土坑出土土器一覧表

挿図番号	器種	部位	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
1	土師小形甕	口～底	12.5 10.2 5.5	口辺部くの字状に外反し、胴部にかけ丸味をおびる。	ロクロ痕 胴下部へラケズリ	ロクロ痕	色調赤褐色 磨滅著しい
2	土師坏	口～底	13.7 5.0 5.5	口辺部外傾する。 内部より口縁の外側まで黒色を呈す。	ロクロ痕 底部にへラケズリ	内面黒色	色調茶褐色
3	須恵坏	口～底	12.5 3.5 (5.2)	底部より直線的に開いて外傾する。 器肉うすい。	ロクロ痕 底部糸切り	ロクロ痕 底面に円形のロクロ痕あり。	色調灰色

2の内面黒色坏は口縁部を一部欠失するのみで原形をとどめていた。本土坑出土の土器破片の中では最大片である。なお、須恵の大甕口縁部片は波状文を有し、本遺跡唯一のものである。

また、覆土は人為的な堆積をしており、たくさんの土器片とともに埋められた感を呈する。そして、内黒の坏は原型のまま覆土上部に埋められており、何等かの意味があったものと考えられる。また、磨滅の著しい小形甕は再利用したものであろう。複原可能であったことからしてやはり原型のまま埋められたものとおもわれる。本土坑は火葬墓の可能性が強い。時期は国分期に比定されよう。　（近藤　尚義）

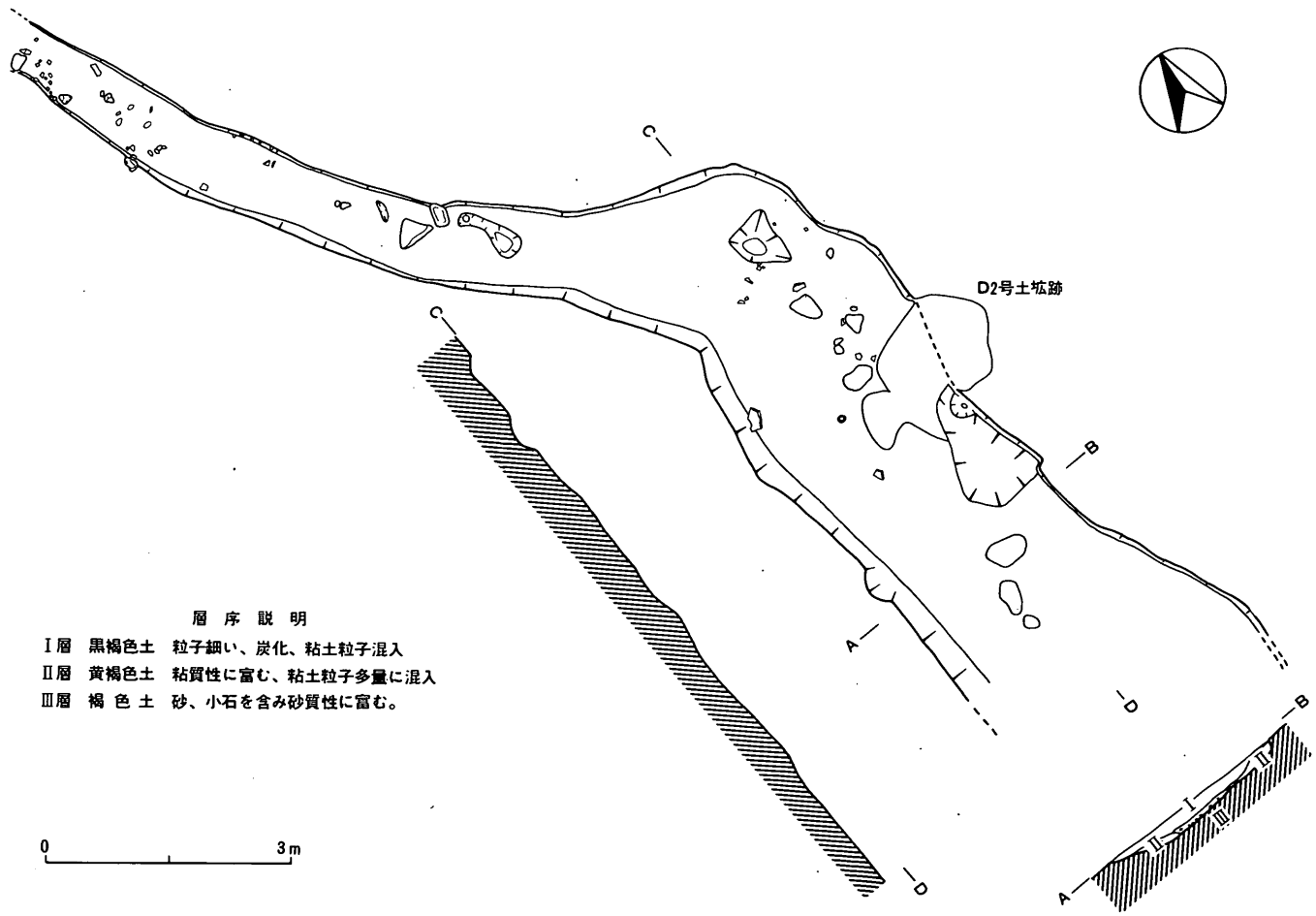
3　溝　址

本遺構は、調査区の南端あ・い・う－13グリッド内にて確認された。

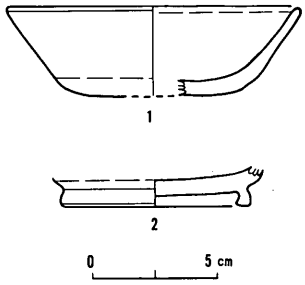
平面プランは、川巾60cm～3m、長さ18m、深さ5cm～30cmを計測する。川巾60cm、深さ5cmを測る北西部は、溝の中央が残存したのみで川端は削平されている。また、この川は調査区外の南東側へ続くものとおもわれる。

覆土は、3層によって形成される。Ⅰ層は、炭化・粘土粒子を含む黒褐色土で、Ⅱ層は、粘質性に富み、粘土粒子を多量に混入する。Ⅲ層は、砂質性に富み、砂、小礫を多量に混入し、上部には土器片が包含される。また、砂の堆積は溝中央の深い部分に最も多く、礫は全体に散乱していた。この溝の水流は、北西から南東へと流れる。一方、現在の小川もこの溝址とほぼ平衡に流れていて、調査区の水田に引水したり、南西に所在する人家では洗い物等に小川を利用している。

遺物は、川底から須恵器大甕片14点、同赤焼片2点、須恵器坏片10点、高台1点、蓋破片1点、摘み片1点、土師器甕片5点が出土した。図示した1の坏は、No9、11、20の3片を接合したものであり、No9～20までは7m60cm程の距離がある。使用できなくなった食器類を川に



第31図 溝址実測図（1：90）



第32図　溝址出土土器実測図
（1：3）

投げ込んだものであり、当時の生活の様相や生活のにおいが感じられる。

この溝の川底に残存した土器類は、隣接するＨ１号、Ｈ２号住居址から出土したものと、ほぼ同じであることからこの竪穴住居に住んだ人達が利用した川であると考えられる。現在のような汚染はまったくなかったことから、生活のための用水として多面的に利用されたであろう。しかし、この集落の廃絶と共になん等かの自然の働きにより、水流がいつしか現在の小川の流れに移動したものとおもわれる。

（島田　恵子）

4　ピット

1）ピット群

あ～かー１～12グリッドのほぼ全面から56個のピットが確認されている。これらの分布をみると、４つの集中的な部分がある。すなわち、い・うー１　～　３（Ⅰ群）、お・かー９～11（Ⅱ群）、い・うー６（Ⅲ群）、う・えー９～11（Ⅳ群）の４群である。

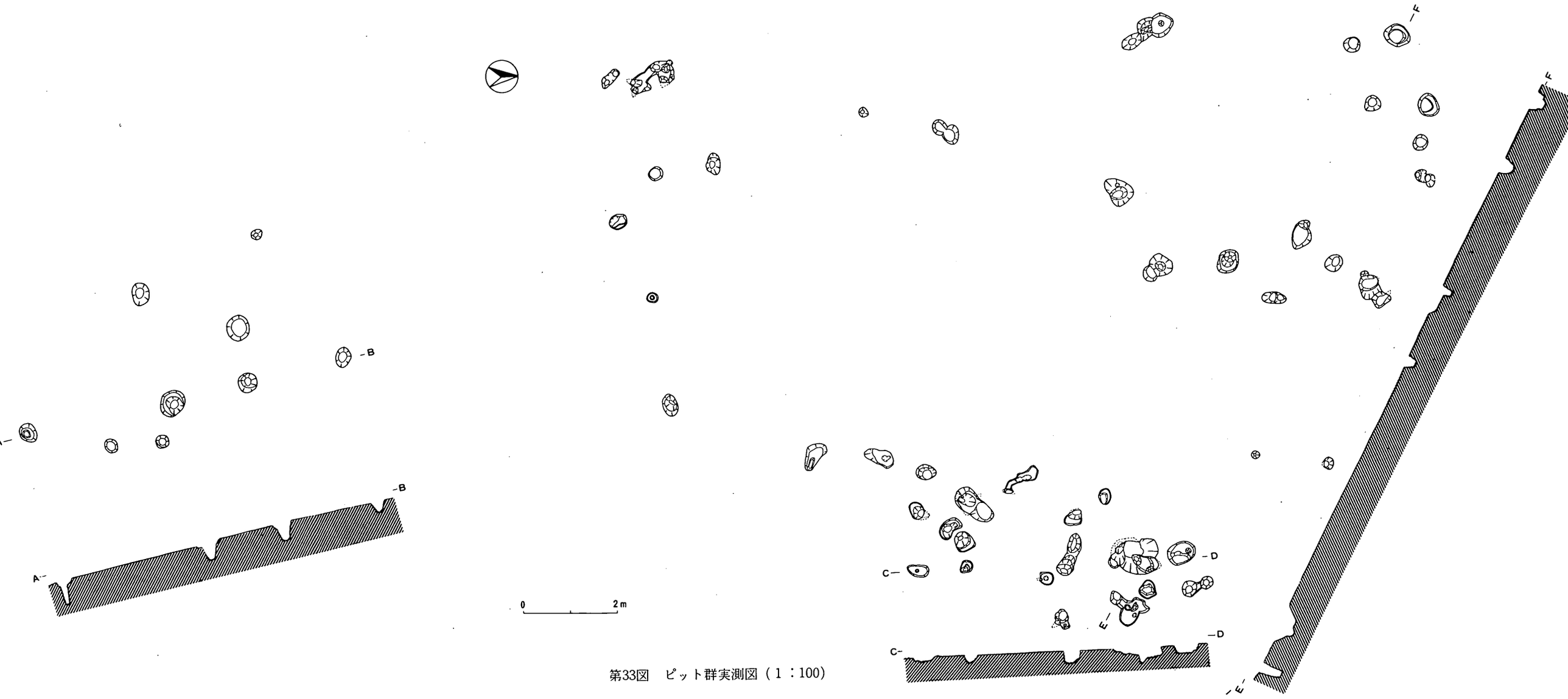
規模は、径約20～100㎝、深さ約10～50㎝で、形状は、円形、楕円形、その不整形、連続するもの、まったくの不整形等、多様で統一性はみられない。ピット底面に柱痕をもつもの、明らかに柱痕と認められるものは、ごく少数ではあるが存在した。

各群についてみると、Ⅰ群は比較的統一のある形状を呈する。Ⅱ群は分布が最も密で、大きさ、形状とも統一性に欠け、ピットの側壁に小穴を有するもの、オーバーハングして立ち上がるものが多く、小規模の風倒木痕が多数含まれているとおもわれる。

Ⅲ群は、柱痕も認められるが、分布がまばらである。Ⅳ群はすべて円形プランで最も統一性のあるピット群である。また、分布にもやや規則性をもつ、しかし、４群とも明瞭な配列は認められなかった。

ピット中からの出土遺物は微量で、土師器甕、坏、須恵器坏の細破片が認められた。土師器坏は、内面黒色のものと糸切り痕をもつ底径3.5㎝の器肉の薄いⅢ状のものがある。底径からして燈明皿とおもわれる。

また、ピット内より炭化材の小片が検出された。鑑定によりナラ材の木材と判明した。Ⅰ群、Ⅳ群のピット中よりの出土である。Ｈ２号住居址出土の炭化材もナラ材であった。竪穴住居址に使用された柱の木材は一般にナラ材が多い。このピット群も廃絶後の住居の柱が含まれているものと考えられる。



第33図　ピット群実測図（1：100）

以上、本ピット群は自然的なものと人為的なものの２者があり、前者にはⅡ群、後者にはⅠ、Ⅳ群とⅢ群の一部が該当し、その時期は、出土遺物から平安時代に位置づけられよう。

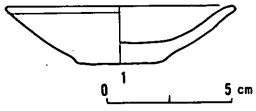
（綿田　弘実）

２）配列ピット

本遺構は、え・お－６・７・８グリッド内において、P_1～P_{10}の配列ピット、P_5～P_7の間に付隋するP_{11}～P_{13}の３個、計13個のピットが確認された。ピットの配列から南北に約３間、東西に約2.5間の掘立柱の小規模な建物遺構が存在したとおもわれる。

配列ピット上面は、ほぼ円形を呈するが、規模はP_3の径80cm、P_1，P_2，P_5，P_7の径60～64cm、P_5，P_8，P_9，P_{10}の径50～56cm、P_4の40×46cmと４大別される。深さは、P_1 63cm、P_2 58cm、P_3 50cm、P_4 65cm、P_5 60cm、P_6 70cm、P_7 43cm、P_8 68cm、P_9，P_{10}73cmを計測する。

P_1～P_6ピットの底面には、柱痕とおもわれる径10～20cmの角形、方形状の掘り込みが存在する。P_7～P_{10}の底面は、P_1～P_6の底面と比較して、掘り込みが小規模であるため、底面が20×20cmに統一されていてそのまま底面が柱痕となりうるであろう。さらにP_5上面には、26×20cmの礫が存在していた。



第34図　配列ピット址
出土遺物（１：３）

また、P_3ピット脇より燈明皿が出土した。口径９cm、器高2.5cm、底径3.6cmを計る。胎土は粗いが丁寧にヨコナデ調整が施され、色調は茶褐色を呈する。底部は糸切りであり、内面底には油がそそがれていた痕跡が明瞭に残されていることと、口縁部には黒色の油煤がベッタリ付着している。おそらくこの建物址で使用された燈明皿であるとおもわれる。

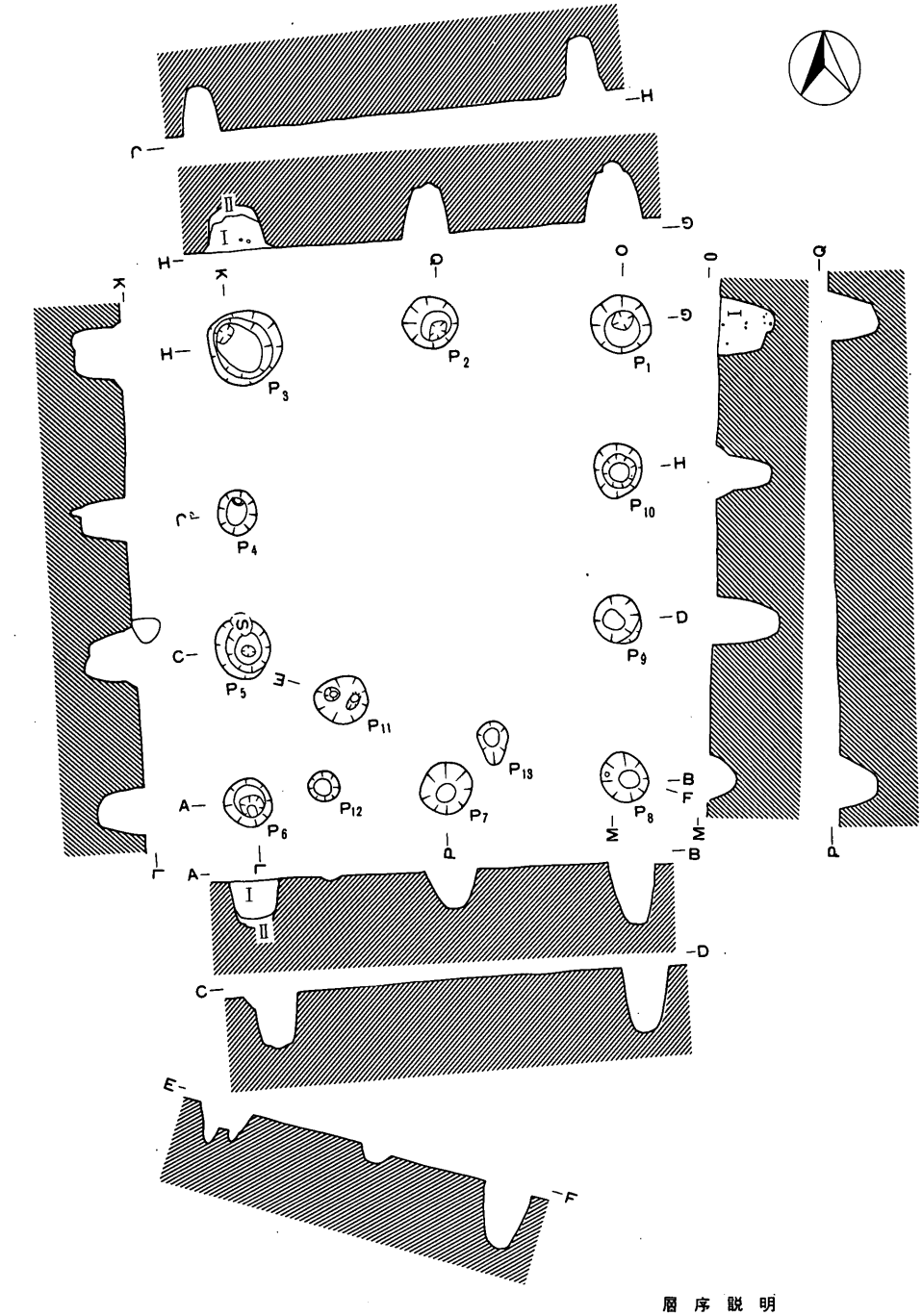
この建物址の時期、性格等の決定はしがたい。北側１ｍの隣接地にＨ１号住居址、西側１ｍ50cmの隣接地にＨ２号住居址が存在するため、この建物址と竪穴住居址との時期は当然前後するものと考えられる。竪穴住居址が先行し、この集落廃絶後に建物址が存在したと想定される。

（島田　恵子）

5　ロームマウンドおよび風倒木

ロームマウンドは、え－２・３、お－３グリッド内より検出された。平面プランは、北側がふくらむ三角がかった楕円形を呈し、東側は突出している。東西の径は340cm、南北270cm、最深部は72cmを測る。マウンド部はわずかに盛り上り、地山の粘土層で形成されている。周溝状を呈する黒色土の堆積は、上面から底面へとマウンドを一周している。

また、東側の突出部は大小の不規則な穴があり、周溝部では縁に沿って小穴がみられる。遺物の出土は皆無であった。

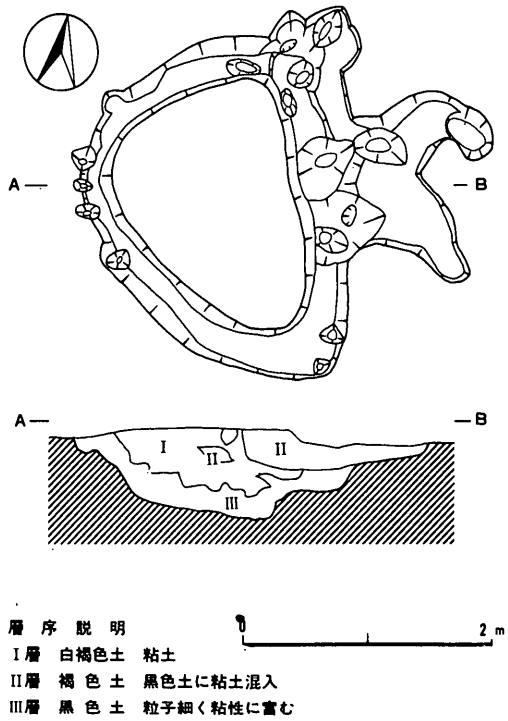


層序説明

第Ⅰ層　黒色土　粒子細かく粘性あり、粘土ブロック含む。

第Ⅱ層　黒褐色土　粒子細く粘性に富む。

第35図　配列ピット実測図（1：80）



第36図　ロームマウンド実測図（1：60）

した部分は炭化材で充満しており、突出した枝の部分等により、倒木の根の部分が焼けて、このような形状を呈したものとおもわれる。

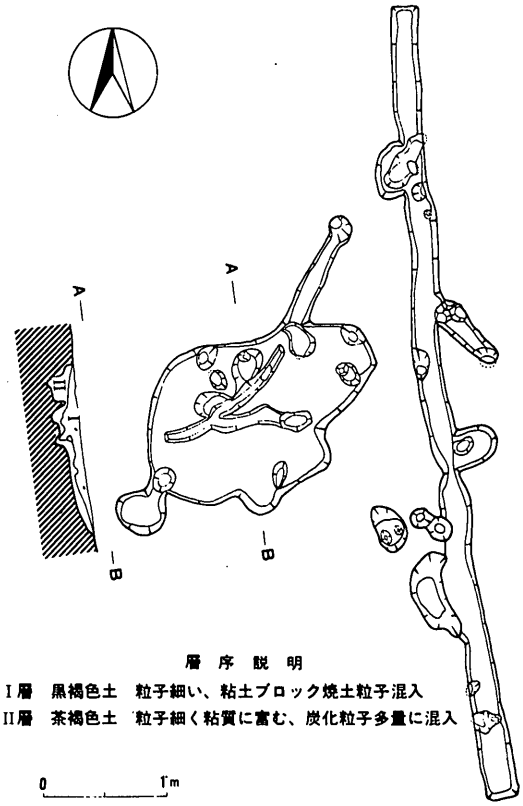
倒木も倒れたまま焼けて、地表から地面に焼けた木炭がくい込んだため、倒木の原形をとどめていたのであろう。

木炭を鑑定したところ、くるみの木であることが判明した。現在も当遺跡の付近にはくるみの木が見られる。老朽化したくるみの木が強い東風によって倒されたために生じた遺構であり、この風倒木の時期は、検出された住居址群や土坑群と時間的差はあまりないであろう。

（島田　恵子・綿田　弘実・近藤　尚義）

本遺構は大規模で、やや複雑な形態を呈しているが、東風による倒木の痕と考えられる。周溝状を呈する黒色土を残存させただけで根の部分が抜けたため、ポッカリ穴があき、地山の粘土層を用いて穴を埋めたものと思われる。周溝に沿う小穴は地表近くの根の痕と解釈される。

さらに、H１号住居址と隣接した、う・え－３・４・５グリッド内には倒木が検出された。倒木は、全長６ｍ52cmを測る。また、倒木の隣から検出された楕円形状の落込みは、当初土坑であるものとして掘り下げを行なったが、内部の小穴や細長く蛇行



第37図　風倒木実測図（1：60）

第５章　包含層出土遺物

１　縄文時代の遺物（第38図）

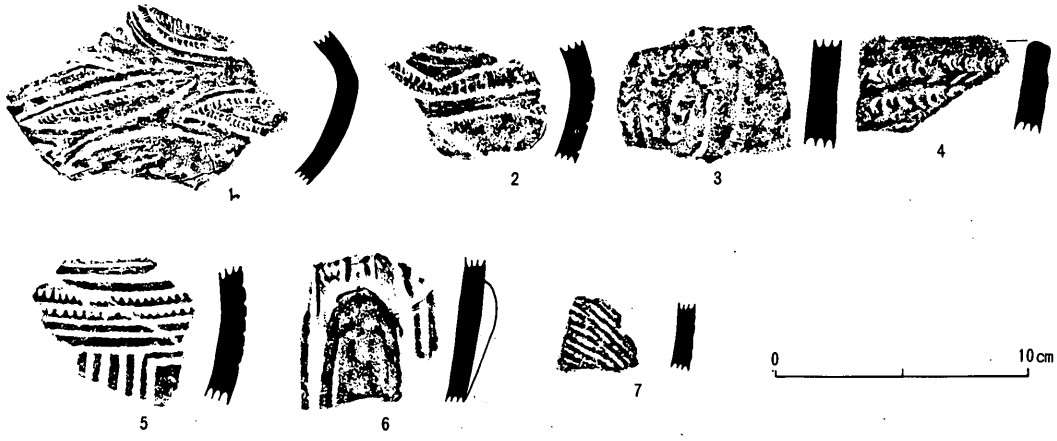
前田遺跡の包含層からまばらに出土した縄文時代の土器は、図示した７点の他に磨滅の著しい４点の計11点であった。

１～４は、諸磯b 式の浅鉢である。磨滅していて文様が不鮮明であるが、１、２は浅鉢の弯曲部、３は胴部、４は口縁部である。色調は茶褐色を呈す。

５は、竹管状工具により横位に烈状の核み目が施され、その前後に沈線状の核み目を縦横に配している。胎土には雲母が多量に含まれ焼成は良好である。色調は、外面は赤褐色を呈すが内面はやや黒色を帯びる。阿玉台式であるとおもわれる。

６は、縦位の沈線状の核み目に∩字状の隆帯が施される。色調は褐色を呈す。

７は、細い縄文が施された器肉のうすい小片である。



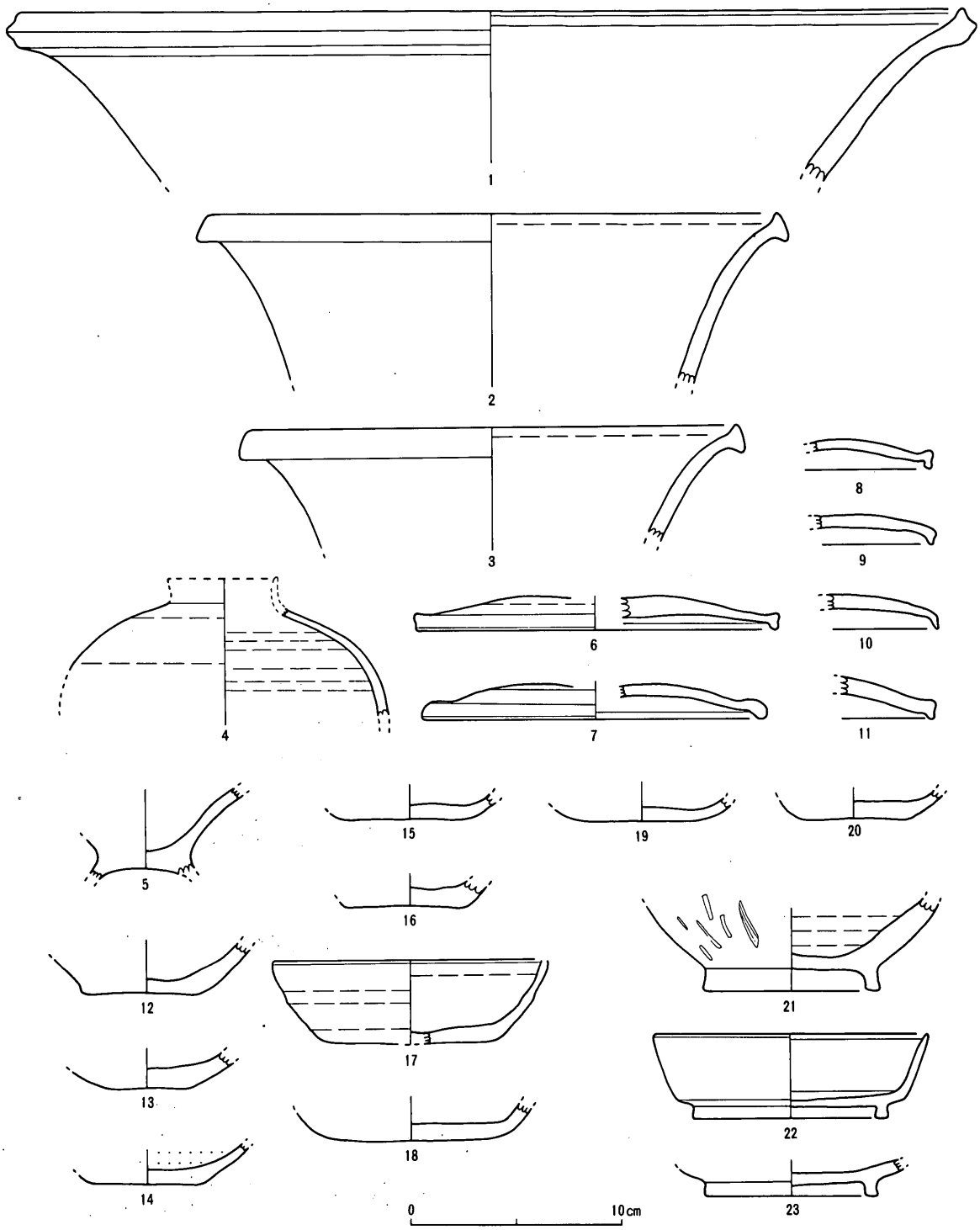
第38図　包含層出土縄文式土器拓影（１：３）

２　平安時代の遺物

本遺跡から検出された住居址に共なう包含層出土土器は、第39図に図示し得た他は殆んど小破片であった。

１～３は甕形土器であり、１は口径46cmを測る大甕である。２は口径28cm、３は24cmを測る。器形はH ４号住居址出土（第15図１）のものと同形であるとおもわれる。

４は、短頸壺の小形であり器肉がうすく、なめらかな調整が施されている。これもH ４号住居



第39図　包含層出土土器実測図1（1：3）

址出土（第15図２）の短頸壺と同一の器形であろう。こちらの方が小形である。

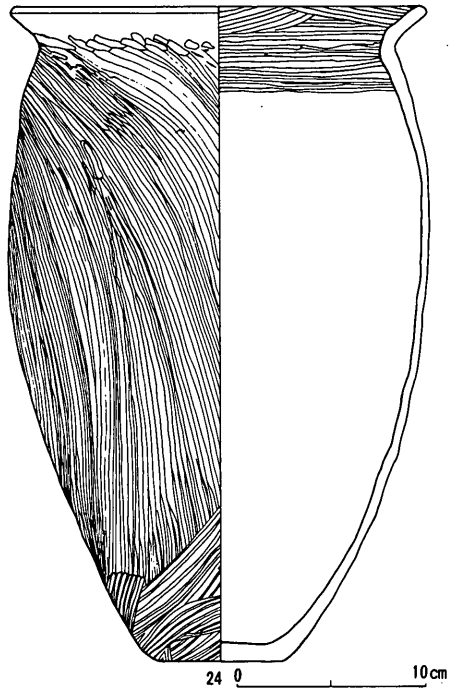
５は、土師器の台付甕の唯一の破片である。６～11は、蓋の破片である。この他に33個体の小破片が出土している。その内の３片は赤焼けである。端部はそれぞれ特徴があるが、天井部はいずれも底い。

12・13・16は、土師器甕の底部破片である。13は底径４cmと短径である。

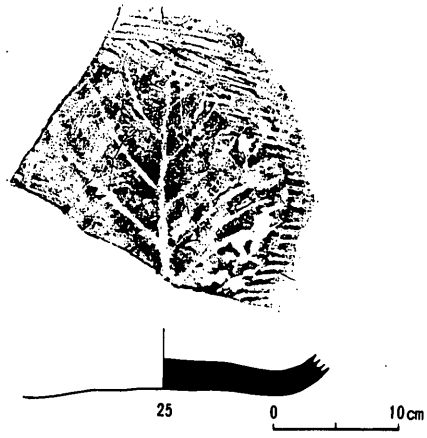
14は、内面黒色の土師器坏であり、底部は糸切りを呈する。18も土師器坏であるが底径が巾広く安定感を呈し、真間期の特徴を有する。15・17・19・20は、須恵器坏で４個体とも底部は糸切りを呈する。21・22・23は、須恵器高台付坏である。21は器肉が厚く粗雑な調整であるが、22は器肉がうすく、なめらかな調整が施されている。

第40図24の土師器甕は、口径22cm、器高35cm、底径７cmを測り、クシ歯状工具による調整が施されている。器肉がうすく磨滅している。また、底部には木の葉圧痕が施されており、Ｈ４号住居址出土（第15図４）の朴の木の葉圧痕と同一である。しかし、Ｈ４号住居址の甕の底径は９cmで一まわり大形である。

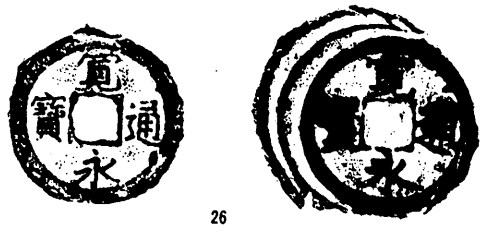
またこの甕は、そ－13グリッドの第Ⅱ層下部より押しつぶされた状態（図版18）で出土した。付近には焼土が散布していて、おそらく、住居址が破壊された跡ではないかとおもわれる。同レベル



第40図　包含層出土土器実測図2（１：４）



第41図　包含層出土須恵器底部拓影（１：３）



で隣のせ－13グリッドより、Ｄ９号土坑墓のプランが確認されている。

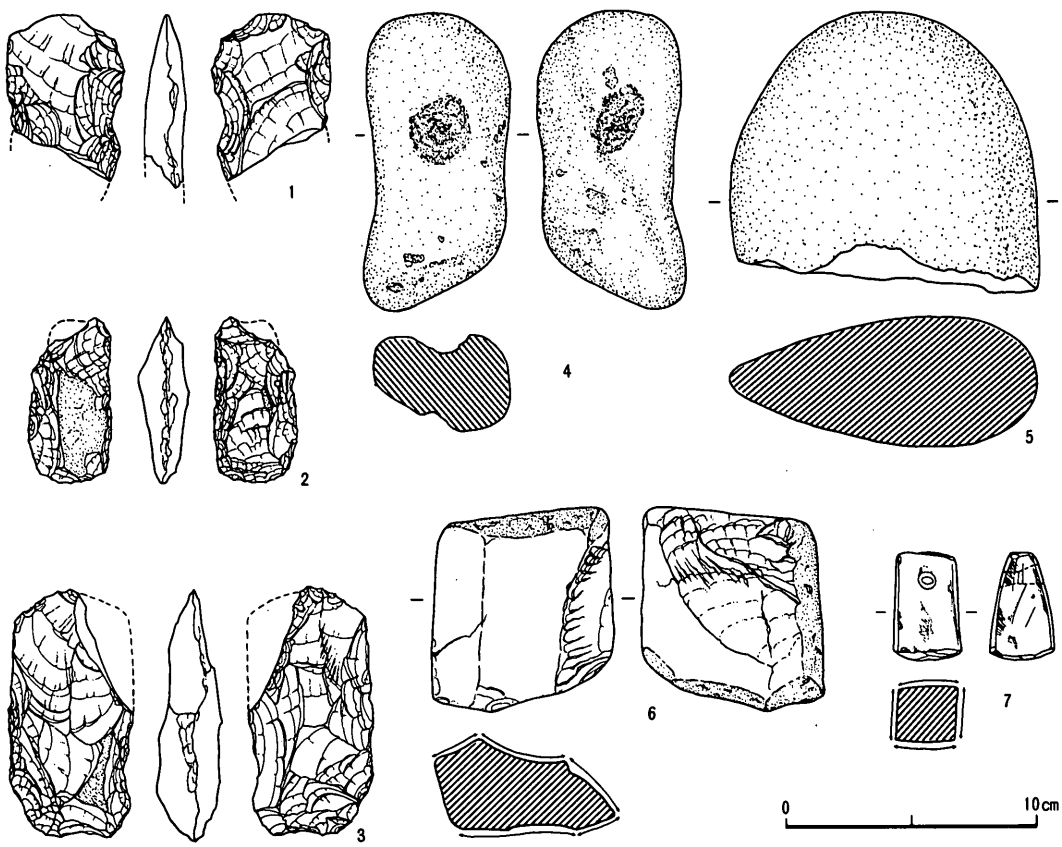
また、第41図25は、須恵器甕の底部に施された朴の木の葉圧痕拓影である。本遺跡から出土した底部木の葉圧痕土器は小片合わせると７個体を数えるが、その内の６個体が土師器である。土師器模倣の須恵器 底部の木の葉圧痕は類例が少ない貴重な資料である。

その他の遺物として、寛永通宝が出土している。その内の一つは、三枚がぴったり重なった状態で出土した。背文は無背文であった。寛永年代は、江戸初期（1624～1643年）第３代将軍家光の時代にあたるが、寛永通宝はその後も永い間使用されている。

（島田　恵子）

3　石　器（第42図）

本遺跡の包含層からは、下記の７点の石器が出土した。両面を図示したものは図の左をＡ面右をＢ面として記述する。



第42図　包含層出土石器実測図（１：３）

打製石斧（1～3）

1は、下端をかなり欠損しているが、分銅形を呈していたと推定される。A面は上端、B面は下端からの平坦で大きな剝離面を残し、大まかな調整で括れ部を作り出している。おー13グリッド出土である。

2は、小形の短冊形で上端の一部を欠損する。両面に自然面を残していることから板状の素材であったことがわかる。主として両側縁からの剝離によって形成されており、断面は菱形を呈する。側縁は細かな調整が施されている。南区表面採表である。

3も短冊形を呈し、上端の片側を欠損する。この部分は薄く、下端は厚い。両端および側縁から剝離され、下半部の側縁を調整している。そー14グリッド出土。3点とも石質は泥岩質である。

凹石（4）

不整楕円形の安山岩礫を用いている。A面は平坦であり、中央上寄りに摺鉢状の径2、3cmほどのくぼみがある。せー12グリッド出土である。

磨石（5）

偏平な安山岩礫を用い、両面が若干磨耗している。下半を欠損しているが、比較的大形である。おー8グリッド出土である。

砥石（6・7）

6は、やや角張った礫の両面を剝離して砥面を作り出したもので、定型化していない。B面は特に剝離の痕を明瞭に残す。A面に3面、B面に2面の砥面をもつ。あー2～8グリッド内出土である。

7は、小形の有孔砥石である。4側面を砥面としており、わずかに縦方向の傷が認められる。上下両端も研磨されている。孔は両面から穿ったものである。表面採集。2点とも石質は泥岩質であり、類例は多くないようである。

これらの石器は、調査区全域から分散的に出土したもので、時期決定の明確な根拠に欠けるが、打石斧（1～3）、凹石（4）磨石（5）は縄文時代に、砥石（6・7）は、本遺跡の住居址に共なう遺物であるとおもわれる。

（綿田　弘実）

（石質鑑定は、立正大学講師高木信行氏に、打石斧については、桶川市教委今井正文氏にそれぞれ御教示をいただいた。）

第6章　ま　と　め

本調査で検出された遺構は、竪穴住居址４棟、土坑11基、溝址１基、配列ピットおよびピット群、ロームマウンド・風倒木等である。各遺構、遺物に関しての詳細は前述してあるので、ここでは前田遺跡の提示する問題点等を簡単に記してまとめとしたい。

遺　構

１）竪穴住居址

住居址の平面プランは、隅丸方形（Ｈ１号、Ｈ３号）・方形（Ｈ２号、Ｈ４号）を呈する。規模は、Ｈ１号住居址が小規模の類に属し、Ｈ２号～４号住居址はそれぞれ類似の数値を示している。各住居址の壁高は、５～20cmと比較的浅く、壁の立ち上りは垂直である。

カマドを中心とした主軸方向は、Ｈ１号址がN－13°－Wを示し、Ｈ２、Ｈ３号址はN－70°・58°－Eを測る。Ｈ４号址のみカマドが南側に位置しているため、S－58°－Wを示すが、住居址の配列はＨ２号～Ｈ４号址の３棟は、ほぼ同方向の角度に配置している。

カマドは、Ｈ１号・Ｈ３号址が袖石、支脚石の残存が見られ良好な遺存状態であった。Ｈ２号址は片側の袖石を残すのみで石は取り除かれていたが、焼土は厚く堆積していた。Ｈ４号址は南壁に位置していたことが散布していた焼土、遺物によって想定されたのみで、すでに石は総て取り除かれ破壊されていた。Ｈ４号址のみカマドが逆方向に設置されているが、遺物から判断して同時に存在した住居址群であることから、何等かの条件、意味があってのことと推される。Ｈ４号址はとりわけ遺物の出土が多量であったことからも、他の住居址と異なる点が多い。該期におけるカマドの存り方は、北壁中央から壁コーナー、更に西壁、東壁、南壁と一定の配置は見られない。当村丸山遺跡２号住居址は南東コーナーに存り、小諸市関口Ｂ遺跡Ｈ３号址も同じく南東コーナーに設置されている。また、長野市浅川西条遺跡の15、17、19、20号住居址も同じく南東コーナーに存る。同遺跡では、２、４号址が東壁中央、12号が南壁に、21号が南西コーナーにそれぞれ設置されている。長野市田中沖遺跡11号址は南東コーナーに、同市三輪遺跡５号址は西壁に、四ッ屋遺跡５号址は南壁東よりに、また、同市の塩崎遺跡群のカマドも西壁に設置されている住居も在る。飯山市北原遺跡１号住居址は南壁に、望月町犬飼遺跡４号址は東壁にそれぞれ設置されている。

柱穴は、各住居址から２個～５個にわたって確認された。その中でＨ２号住居址が最も理想的な配列、深さを示し、左右２本ずつ対になっており設計した感を与える。また、張り出しピット、壁上ピットが多く本住居址群の特徴であろう。類例がみられないこともあって上屋構造との関係

が今後の課題となろう。該期における住居址は、柱穴がまばらなもの、全くないもの等この傾向が多い。本村丸山遺跡３号住居址は全く柱穴が無い。カマドの位置と関連して住居形態、上屋構造と共に今後究明されなければならない課題であろう。

その他の内部施設は、Ｈ１号～Ｈ３号までカマド脇左右に径50～70cm、深さ16～38cmを測る大型ピットが存在するが、覆土からして左脇の壁コーナーに掘り込まれたピットは、灰溜めの施設であろうとおもわれる。また、灰溜め施設と連なるピット及び右脇に設けられた掘り込みは、土器片の出土があり貯蔵穴あるいはカマドに共なう何等かの機能を果した施設であろう。Ｈ４号址は遺物の出土が多量であったにもかかわらず、カマド脇の施設が見当らない。内部構造に関連があるものと考えられる。

また、Ｈ２号・Ｈ３号住居内の覆土から多量の炭化材、炭化粒子、焼土粒子の混入がみられた。当初焼失住居を想定したが、一部分であることから住居址廃絶後の影響であると考えられる。後出する風倒木の焼け方に観察されるからである。焼失住居の場合、床面全体にかなり大きな炭化材が残存する。佐久市市道遺跡、跡部町田遺跡、後沢遺跡、清水田遺跡、長野市三輪遺跡等の例からも、後者に起因するものとおもわれる。佐久市の各遺跡の炭化材の材質はナラ材が主であったが、長野市三輪遺跡では柳であろうと想定している。前田遺跡はやはりナラ材であった。

第７表　前田遺跡検出住居址一覧表

遺構	平面プラン						壁高	カマド	柱穴	時期	備考
	形態	規模				主軸方位					
		北壁	西壁	南壁	東壁						
Ｈ１号	隅丸方形	220cm	290	240	280	N－13°－W	12cm～20	北	5	国分期	小形
Ｈ２号	方形	410	340	360	340	N－70°－E	5～15	北	4	国分期	
Ｈ３号	隅丸方形	340	—	—	360	N－58°－E	10	北	2	国分期	一部破壊
Ｈ４号	方形	360	330	390	330	S－58°－W	7～18	南	2	国分期	遺物出土多量

2）土　坑

土坑は、11基の検出をみた。あ～えグリット南端に３基検出されたが、Ｄ１号、Ｄ２号は溝址にかかり住居址とは時間的差が生じる。伴出遺物が認められず性格等不明である。Ｄ３号は、小形でひょうたん型を呈する。出土遺物は坏小片、燈明皿片、羽釜片等であるがその性格用途は判然としない。

D４号～D11号までの８基は、調査区東端のせ～ちグリッド内より検出された。D４号～D８号までは、H３号、H４号住居址に隣接する。D５号は確認面が底面付近に達しており深さが4～８cmと浅く、伴出遺物もなく性格等不明である。D４号、D６号、D７号、D９号は、規模、覆土等の様相からして土坑墓であるとおもわれる。被葬者はこの集落の一構成員であり、副葬品を持たないが、丁寧に葬むられていることが土坑の様相からうかがえる。また、この区域は北側まで住居址の検出がみられないこともあって、墓域であったと想定される。特にD９号は、前述したように掘り下げに入ってから、異様な臭気がただよい、作業者が気分を悪くする程であった。地山が粘土層で、骨粉や小骨と同色であるためその確認は不可能であった。

D10号、D11号は、覆土に炭化粒子と焼土粒子が多量に混入しており、特にD11号は出土遺物が多く、その中に波状文を持つ須恵器片が混入していた。須恵器片の土坑内出土はD４号の小片とD11号のみである。一般の共同体成員が葬られる時、須恵器が副葬されることはまれであることからして、それも波状文を持つ須恵器片の出土は意味があろう。また、完形に近い磨滅の著しい小形甕、内黒土師器坏完形品の伴出は火葬墓的要素が見受けられるが、速断はできない。類例

第８表　前田遺跡検出土坑一覧表

遺構	平面プラン					備考
	形態	規・模			主軸方位	
		短径	長径	深さ		
D 1 号	不整形	114	138	20	N－76°－W	性格、時期不明
D 2 号	楕円形	116	172	40	N－65°－W	〃
D 3 号	円形の連続	40 50	48 60	10 16	N－10°－E	性格不明、国分期
D 4 号	長楕円形	128	330	31	N－30°－W	墓坑、国分期
D 5 号	不整形	138	197	8	N－30°－W	性格、時期不明
D 6 号	円形	100	100	27	N－37°－E	墓坑、国分期
D 7 号	楕円形	130	166	29	N－39°－E	〃　〃
D 8 号	楕円形	52	65	15	—	—　〃
D 9 号	楕円形	100	200	50	N－35°－E	墓坑、国分期
D 10 号	不整形	38	132	20	N	性格不明、〃
D 11 号	不整形	112	38	20	N	墓拡、〃

を待ちたい。そして、D4号、D7号、D9号出土の甕形土器片は、いずれも磨滅が著しく再利用であると推察される。なお、D4号は規模等とりわけ立派な土拡墓である。また、D8号であるが、前述したように規模、位置等から破壊された住居址に付随する施設であるとおもわれる。

3）溝　址

溝址は明確に小川であることが判明した。川に投げ捨てられた食器類等が川砂と共に川底に沈んでいて、当時の生活をにおわせている。生活用水として利用したであろう当時の暮しが眼前に浮ぶ様相を呈していた。このようにはっきりした溝址の検出は類例があまりないが、伊那市のカンバ垣外遺跡より検出されている。ここでは、現在水田の引水をしている井筋へと続くため、井筋と命名されている。時期は鎌倉前期～室町中期にあたる。

本遺跡では、川底に沈んでいた遺物から、本調査で検出された住居址に共なう小川であり、水路は北西～南へと続き、H3号、H4号住居址の付近へと流路を取ったものとおもわれる。調査区外のため途中までの検出にとどまった。また、この溝址は集落の廃絶と共に埋れている。おそらく水流が、すぐそばを流れる現在の小川へと移動してしまったものと考えられる。

4）ピット群・配列ピット

ピット群は、調査区全域から検出された。特に、あ～か－1～12グリッド内に集中していたのでこの部分のみ図示した。詳細はピットの項で述べてあるが、分布から4群に分けられる。そのうちⅠ群、Ⅳ群は統一性のあるピット群で、ナラ材の炭化材小片が検出されている。廃絶後の住居址の柱痕が含まれているものとおもわれる。また、Ⅱ群は規模がバラバラでピットの側壁に小穴を有するもの、オーバーハングしているものが多く、小樹の根の痕であると考えられる。Ⅲ群は両者が含まれる。また、そ～つ－1～10グリッド内より検出されたピット群はⅢ群に該当される。所々に散布していた焼土、た－13グリッドより押しつぶされた状態で出土した木の葉圧痕の甕形土器等により廃絶住居址の柱穴が含まれていることがうかがえる。

配列ピットは、明らかに掘立建物址とみることができよう。南北に3間、東西に2.5間の小規模な建物が想定される。当初、矢筒城主島津権六郎が伯母のために建てたと言われるお堂ではないだろうかと、地元の方々が推定していたが、それは大永五年（1525）にまで降ることもあって定かではない。出土遺物からみて平安時代後期～中世初期までとおもわれる。しかし、隣接地には殿屋敷と称する島津氏の館跡が存在する。黒川はこうした政治の中心地的素地が平安期よりすでにつくられていたものとおもわれる。歴史的環境の項で矢野恒雄氏が記述しておられるが、黒川の地名の歴史的な初見は嘉歴四年（1329）にあり、さらに寛永六年（1629）の「水内郡平出願生寺住持永尊所持、親鸞聖人縁起裏書」には、「信州水内郡太田庄黒川郷平出願生寺」とあるように黒川郷の名が登場する。そして伝承では、『源初の黒川郷は南に平出、北は小玉に至り牟礼をも包含した広い範囲であったと言うことで、その政治的中心が殿屋敷であったと推考するものである。』と記しておられるように、律令制国家体制の変質過程において生じた、自墾地系荘園、さ

らに寄進地系荘園の出現等により、本遺跡の時代は寄進形荘園を土台として成り立った、道長・頼通の摂関政治の最盛期に属するものとおもわれる。そして黒川は荘園の中心的な拠点であったと推察することができよう。こうした政治的中心の地に特別な建物である掘立柱建物址が存在していたことは当然のことといえよう。

5）ロームマウンドおよび風倒木

本遺跡からは、ロームマウンドおよびそれに付随する風倒木の痕跡が認められた。風倒木は倒れたままの状態で燃えており、くるみの木であった。一般にロームマウンドの検出はみられるが、その倒木まで残存した状態は初見であろう。また、倒木の原形は炭化材やその粒子により黒色の落込みとなって、その姿をとどめていたが、前述したように炭化材の遺存は大きなもので3㎝程度であった。かなり乾燥していたものが強い熱によって燃えつきた感を呈する。調査区全体の遺構確認面には、炭化粒子が混入していたことと、住居址覆土の一部分に炭化材や焼土粒子が混入していたこと、さらにオーバーハングした小樹の根痕等も考え合せると、廃絶数年後この集落全体が焼き払われたか、もしくは火災にあったものと推定されるのである。

以上簡単ながら遺構のまとめとしたい。

遺　物

縄文時代の遺物は調査区全体に分散的に出土した。先ず土器は前期諸磯b式土器片7点と中期土器片4点の出土であった。また、打石斧、凹石、磨石等が出土している。

本遺跡の住居址に共なう遺物は、須恵器が大半を占める。器種は蓋杯(がいはい)が主であり、壺、甕等は大きな破片ではあるがその数は少ない。また、土師器は全体の$\frac{1}{3}$程度であって、器種は甕形土器、羽釜等に限定される。供献、貯蔵形態は須恵器に、煮沸形態は土師器に片寄る傾向を示している。

前田遺跡の南側前方には小高い前高山が存在する。現在ゴルフ場になっていてグリーンの芝生のコースが望める。この前高山の丘陵上に前高山窯址が所在する。ゴルフ場造成にともない調査が行なわれた。この他にも番匠窯址が遺跡として登録されているが、平石、強清水にも窯址の所在が認められている。このように牟礼村は、前田遺跡の地山にみられた良質の粘土が豊富に産出することもあり、地方窯業が栄えたものとおもわれる。こうした窯址の近隣に位置する本遺跡には、須恵器がおのずと日常生活に多量に入りこんできたことがうなずける。しかし、須恵器が主流を占めたとしても、一般の共同体成員には自由に入手することができなかったことが推測される。それは、本遺跡で使われていた須恵器は、欠陥品とも言うべき器が目立つことである。H1号住居址出土の蓋は、摘みが中心からずれていて歪んでいる。H4号住居址出土の大形壺は胴下部に大きな凹みが生じている。また、D3号土坑出土の燈明皿は口縁にゆがみがある。さらにH4号の短径壺や破片の中には、焼成時に転倒しないように支えに使った須恵器片が付着したまま

のものがあったり、全体に粗雑なものが多い。自然釉の付着した美しい器面のものや文様が施されたものは見当らなかった。

このように須恵器は、生産の面でも荘園制の枠組みの中に組み入れられ、普及が浸透してもなお、欠陥品のような粗雑なものが目立つ一般住居址とそうでない支配層との格差が現れていたといえる。土拡墓からの須恵器出土は、D4号の小片とD11号のみであったことからも、一般の共同体成員の副葬品には遠いものであったとおもわれる。

また、本遺跡出土の土師器は焼成が固くひきしまっていて、他地域出土の土師器と比較して硬質である。焼成過程においてなん等かの差異があるのではないか、それもかなり高い温度で焼かれていることから、須恵器と同じ窯ではないかとの御教示を関孝一氏よりいただき、以前に調査された前高山窯址の遺物点検を行なった。結果、灰原(はいわら)出土の中に約10%は焼成の固い土師器甕破片が混入している。このことは明らかに同じ窯で焼成されたことを物語っているといえよう。また、強清水の杉山義貞氏のりんご園から出土した土師器甕片も同じような焼成をもつものであった。さらに、中野市の安源寺遺跡からは5世紀後半の土師窯址が検出されている。須恵器焼成の過程と温度的なもの等の相違はあるとしても、須恵器窯址の灰原からの出土は考慮されねばならない。類例を待って今後検討してゆきたい。

なお、本遺跡からは底部に木の葉痕を有す、須恵器片、器面はクシ歯状工具で調整が施されている土師器長胴甕底部にも木の葉痕が認められた。その他の土師器底部小片4点にも認められている。

また、灰釉陶器の出土が見られなかったのは、須恵器産地の中にあってその導入が受け入れられにくかったのか、灰釉陶器の盛行する以前の時期に該当するかは慎重な検討を要する。今後の課題として指摘にとどめておきたい。

本遺跡は、殿屋敷に続く西方へ拡がるものとおもわれるが、現在の宅地が存在するため住宅建設中にすでに破壊されたり、又は宅地の下に永遠に埋蔵されることになったであろう。しかし、本調査によって残存したその一部分が解明できたことは意義深い。

（島田　恵子）

引 用 参 考 文 献

1 井出正義他 「宮の本遺跡」 佐久市教育委員会 1979

2 金井汲次他 「安源寺遺跡」 中野市教育委員会 1979

3 桐原 健 「信濃における平安期土坑墓の性格」 信濃

4 坂詰秀一 「土師器窯跡の諸問題(1)」 立正考古第23号 1964

5 笹沢 浩・原田勝美 「長野県下出土の須恵器（上）・（下）」 信濃28－9・11 1974

6 笹沢 浩他 「上水内郡誌歴史編」 上水内教育会 1976

7 塩野 博 「土器（土師器）製作遺跡について」 月刊文化財 1977・8

8 鈴木敏昭 「諸磯b式土器の構造とその変遷（再考）」 1980

9 高橋 桂他 「丸山遺跡」牟礼村教育委員会 1979

10 高橋 桂他 「鍛冶田遺跡」 飯山市教育委員会 1980

11 高橋 桂他 「北原遺跡」 〃 1980

12 友野良一他 「カンバ垣外遺跡」 伊那市教育委員会 1979

13 原口正三 「須恵器」 日本の原始美術4 講談社 1979

14 花岡 弘他 「関口B遺跡」 小諸市教育委員会 1980

15 藤沢平治他 「市道遺跡」佐久市教育委員会 1977

16 藤沢平治他 「上桜井北遺跡」 〃 1978

17 藤沢平治他 「跡部町田遺跡」 〃 1978

18 松沢芳宏 「長野県上水内郡牟礼村庚申塚古墳について」 信濃31－4 1979

19 森 尚登他 「明専寺・茶臼山遺跡」 牟礼村教育委員会 1980

20 森嶋 稔他 「犬飼遺跡」 望月町教育委員会 1978

21 森嶋 稔他 「塩崎遺跡群第1次」 長野市教育委員会 1978

22 森嶋 稔他 「 〃 第2次」 〃 1979

23 森嶋 稔他 「三輪遺跡」 〃 1980

24 森嶋 稔他 「田中沖遺跡」 〃 1980

25 森嶋 稔他 「篠ノ井遺跡群」 〃 1980

26 森嶋 稔他 「四ッ屋遺跡・徳間遺跡・塩崎遺跡群」 長野市教育委員会 1980

27 由井茂也他 「井上遺跡」 臼田町教育委員会 1980

28 由井茂也他 「周防畑遺跡」佐久市教育委員会 1980

29 米山一政他 「浅川西条遺跡」 長野市教育委員会 1975

30 清水勝治他 「中郷村史」 中郷村史刊行会 1960

第7章　黒川の年中行事と食用植物

1　年中行事

その土地独特のことばを、方言とは知らずどこの誰にも通じる共通語であると思い込んで使っている。別の土地に住む人に接してみてはじめて、それが全ての人々に通じることばでないことに気付く。そういったことは、よくありがちである。西黒川の年中行事、あるいは風習についてもやはり同じである。あまりにどっぷりつかりこんでしまって、昔から続いている趣深い行事、風習を忘れてしまっている。また意味がよくわからずに使っている名称が多くある。今日全ての事が全ての家庭で行なわれているわけではないが、記録に残して、そういったものへの認識を新たにしたい。

正月元旦

若水　早朝、井戸水をくみ、使用すると若返るといういい伝えがある。

初詣　早い者は除夜の鐘と供に近くの神社（ほとんどの人は大宮神社）へ初詣をし、1年間の幸福を祈願する。鏡餅のお供えを持参し、他家のものをもらって来て食べると、かぜをひかぬという。

1日から3日まで朝食には雑煮を祝う。

天人様　15日から25日頃まで、床の間に飾る。

2日　天筆ともいい書初めをする。

3日　**嫁婿年始**　嫁婿は仲人親分宅へ年始の礼に行く。

4日　**嫁婿里方へ年始**　嫁婿は揃って親元へ年始に行く。

7日　**七草粥**　せり・なずな・ごぎょう・はこべ・ほとけのざ・すずな・すずしろの七草を入れた粥を食べる。

8日　**嫁四晩**といって、4日親元へ年始に行った嫁はこの日帰る。親はこの日年始に来る。

11日　**蔵開き**　土蔵のある家は初めてこの日戸を開けた。

鏡開き　お供えの鏡餅を割って食べる

14日　**お物造り**　米の粉で造った、米俵、まゆ、野菜、果物、小判等の型の菓子をケヤキ、みずぶさ等の枝に吊し、神棚に供え、豊作を祈る。

道祖神　ぬるでの木で男女の神像を造り、紙の着物を着せて道祖神の元へ納め、献物とする。

15日　**道陸神造り**　家々では〆縄　門松を取りはずし、両目の入ったダルマなどを持ち寄り、松の木などを近くの山へ切りに行き、各組毎に田んぼ等空地へ、通称「じいさん、ばあさん」の1対の道陸神を造る。

どんど焼き（道陸神焼き）　夕食後道陸神を焼く。この時、書初を竿の先

に付けて焼き、燃えくずが高く舞い上がるほど字が上手になるといわれている。またこの火で焼いた餅を食べるとかぜをひかないといわれている。

16日　薮入り　15日16日は餓鬼の首も許されるといって奉公人も楽々と遊んだ。

20日　二十日正月といって正月に於ける最後の遊び日。朝、暗いうちにお物造りを取り払う。いつまでも飾っておくと、田畑の仕事が遅れるといって、なるべく早く取りはずす。

30日　晦だんご　みそかだんごとして、新夫婦は親元へ招かれる。

節分　2月3日「鬼は外　福は内　ごもっとも、ごもっとも」といって豆まきをする。夕食には、トロロ汁をつくる。またそのトロロ汁を食べた茶腕で湯を飲むと中気になるといわれている。

初午　2月最初の午の日。午前10時前に茶を飲むと火早いといって、その年は火事が多いといわれている。稲荷神を祀るものは、油揚げを供える。

3月　彼岸7日間のうち入口、中日、明口の3回、団子をつくり、仏前に供える。

やしょん馬　3月15日　釈迦如来涅槃の日といい、寺々（真宗を除く）又、家によって、米の粉を蒸して飄型の切餅のようなものをつくり、仏前に供えたり、お茶うけとする。

雛祭り　4月3日　長女がうまれると、嫁の親元から、雛飾りが成長を祝って届けられる。

春祭り　氏神様（大宮神社）の春祭りをして豊作を祈願する。家庭では草餅をつくる。

5月8日　ごがつようか　とよばれ、牟礼本町にある、養蚕の神を祀った牟礼神社の祭りがある。

端午の節句　4月3日の雛祭りに対して、男子の節句である。男児出産があると嫁の親元、親戚等から、鯉幟、吹貫が贈られ、5月下旬頃から庭に立てて、男子の成長を祝う。風呂に菖蒲、蓬を入れて入る。そうすると、蛇にかまれないといわれている。

盂蘭盆　7月末日、新仏のある家は、善光寺へ仏様を迎えに行く。

七夕　8月6日、子供は青竹に、色紙の短冊に願い事、歌などを書いて吊し、庭に飾る。（星祭り）

7日朝早く、それらを川に流す。（七夕流し）、油気の物を日の出前の水で洗えばおちるといわれている。

（油落し）

墓そうじ　お盆にそなえて、お墓のそうじをする。

迎え盆　8月13日、仏壇に果物、菓子などを供え、お墓参りをして、麦わら、わらなどを、迎え火として焚き祖先

の霊を迎える。

近隣の親戚が新盆の場合は、夕食後、挨拶に行く。

14日　朝、家庭でおやきをつくって、仏前に供える。

お盆の間に、新嫁婿は里へ、また親戚間で盆礼に行く。

送り盆　16日　麦わらやわらなどを、焚いて、送り火とし、祖先の霊を送り、墓参りをする。

地蔵盆　（牟礼本町地区）23日　地蔵様のあるところに盆踊りが立つ。

秋祭り　9月　氏神様（大宮神社）の祭りで、豊作を祈願する。祭りの前夜を「夜宮」と称し、氏子は献燈して獅子、神楽を奉納する。

家庭では、煮〆などをつくり親戚知己を互いに招待しあう。

翌日には、部落の長（総代）氏子の長（氏子総代）新築された家等で、獅子舞の披露がある。赤飯をつくって、近隣の親戚などへ配る。

鎌上げ　稲の刈り終わりを祝う。

扱箸上げ（こきばしあ）　脱穀の終わりを祝う。

大根年取　（十日夜）とも呼ばれ、これを過ぎると大根取りにかかった。

ふいご祭　12月8日　鎌造りが盛んだった頃の鍛冶工の祭りで、甘酒をつくり徒弟も開放されて遊んだ。

お年越　浄土真宗等の家では、春秋どちらか都合よい日に、菩提寺の僧を招き、祖師上人、祖先の霊に対し、読経し、回句する。

年取　大晦日には一切の掃除を済ませ、天神様を飾り、鏡餅を仏壇や神棚に供え、正月を迎える準備をする。夕食には、鱒、鮭、鰤等をつける。親類知己に新仏がある場合には、夕食後、お参りに行く。

2　食用植物

最近でこそ、山菜が珍重され、野山の幸を、食卓にのせることがブームになってきているが、しかし、古代の食料の乏しい時代に生きた人々にとっては、野山は、食料を得る主要な場であったはずである。そんなことをおもって私達の囲りを見まわすと、身近にも、たくさん口にすることのできる植物がある。幼い頃には、よくそれらを採って遊んだものである。

ナズナ　（アブラナ科）

この地域では、ガラガラと呼ばれ、田畑、道端いたるところに生えている。茎がのびる前の葉を摘んで、浸し物等にする。食べるというより、遊んだ思い出の方が多い。

セリ　（セリ科）

小川や湿地などで、春早くから7月上旬頃まで、根ごと摘むことができる。特有の香り高さで、全体が食用となり、浸し物等にする。

フキ　（キク科）

春の訪れをまっ先に告げてくれる。雪消えと供に、土手、道端等に、紫がかった緑の

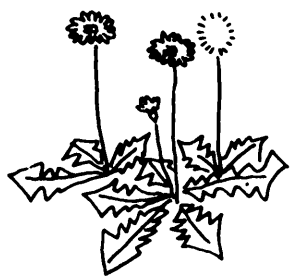
皮を、はじくように、まるいつぼみ（ふきのとう）を見せてくれる。全草を利用できるが、主としてふきのとうと、葉を除いた茎を食用とする。フキ（茎）は、冷水にさらし、アク抜きをして利用する。

ヤブカンゾウ　（ユリ科）

トテッキョ　と呼んで親んできた。人家近くの土手、道端、田のあぜなどにはえ、オレンジ色のユリに似た花を咲かせる。春、緑一色の中で唯一、鮮やかな色を見せてくれる。芽ぶきから15cm位の丈まで食用となり花も食べられる。

タンポポ　（キク科）

平地から1500mくらいの高山まで、道端、畑、土手、荒れ地等広く分布している。春の開花前のものが苦味が少なく、根を含めた全草を食用にできる。



タネツケバナ　（アブラナ科）

耕作が始まって、田おこしをする頃、田んぼは、この花で一面白くなる。田の雑草で嫌われるが、花は美しい。若葉をゆでて食べる他、塩でもんで青汁を捨て、あえ物、酢じょうゆで、生食する。

オドリコソウ　（シソ科）

ミツバナといわれている。4月から5月、湿気のある土手や、道端などで見つける。この白い花を見ると、密を吸うことが楽しみで、そんなに吸うとお腹に虫がたかるといって、母親に叱られた幼い頃を思い出す。新芽を摘むが、花も地下茎も食用となる。

ハコベ　（ナデシコ科）

畑、道端など、いたる所に生えている。春から秋まで何回も、開花、結実、発芽を繰り返す。畑の雑草である。生のまま青汁を飲む他、浸し物、煮びたしなどに利用する。

スイバ　（タデ科）

スイコといわれ、田のあぜに群生している。よく、野良仕事について行っては、すっぱさに顔をしかめながらも、かじったものである。花穂と葉を除いた地上部が食べられる。

イタドリ　（タデ科）

イタズイコと呼ばれ、やはり、田のあぜ、河原などに群生。1m位まで伸びる。丈20～60cmぐらいまでの葉の開かないものを食用とする。茎の中が空洞であることが、おもしろくて、よく折って遊んだ。ゆでて干したり、塩づけなどにして保存する。

ギシギシ　（タデ科）

スイバを大きくしたようなもので、ウマズイコと、この土地では呼ばれている。田のあぜ、土手などいたるところで見かける。年間を通じて新芽を持つので、いつでも採集できる。袋に包まれた新芽を摘み採る。

ノビル　（ユリ科）

ノビロといわれて親しまれている。4月頃から6月頃まで採集できる。根ごと掘り採り全草を利用する。花がつく頃は堅くなり食用にはむかない。ネギ特有の香りが特長。

オオバコ　（オオバコ科）

ズイコンバイコンと呼ばれている。花の咲いた茎をもって、２人で交叉させ、「ズイコンバイコン　ズイコンバイコン」と唄いながら、引っぱりあい、どちらか早く切れた方が負けとなる。道の雑草で遊んだ昔が懐しい。若い葉を揚げ物、ゆでて、あえ物佃煮など応用範囲は広い。

ドクダミ　（ドクダミ科）

人家のまわりの湿った物陰などに群生している。初夏に白十字の花を咲かせる。臭気は強いが、その様はなかなか涼し気で、風情がある。薬草として知られているが、食用にもなる。臭気は熱にあうと分解されて消える。茎と葉は若く軟らかいものを摘む根茎はゆでて、水にさらし、酢みそ、三杯酢、みそづけ等に利用する。

アカザ　（アカザ科）

畑、積み肥の跡、荒れ地などに群生する。繁殖力が強く、たいへんに嫌われている。丈５～20cmくらいが摘み時で、初夏のものでも新芽はよい。若葉と果実を利用する。葉はよく水洗いし、葉についている粉状の球状細胞を洗い落としてゆでる。

マタタビ　（マタタビ科）

一部の葉は表面が白色に変わり、花は香りがよく白色。実は３cmくらいの長卵形で熟すと黄色になる。

カタバミ　（カタバミ科）

平地の道端、庭の隅などに生える小雑草。春から秋までいつでも利用でき、若葉と新芽を摘む。蓚酸が含まれているので、生葉をかむと、酸味がある。野外での疲労回復や、のどの渇きに生食すると元気が出る。

スベリヒユ　（スベリヒユ科）

平地から高地まで人家に沿って、畑、道端庭、荒れ地などに生える雑草。夏に急に大きくなり、炎天に強い植物で、７～８月の地上部全草が食用となる。酸味を持つ特有のぬらめきがとりえで、ビタミン・ミネラルを含み、栄養的にすぐれている。

クズ　（マメ科）

この地域ではクゾッパと呼ばれている。山野のいたるところ、雑木林、鉄道沿いの斜面などに多く生えている。葉は、春の芽ぶきから秋までつるが伸び続けるので、いつでも採集できる。８月から９月にかけて、赤紫の花をつける。若く軟らかい葉と花のつぼみを食用とする。葉は秋になるほど、甘味がのり、味がつく。根からはくず粉をとる。

クサボケ　別名　ジナシ

山麓帯から低山帯の茂みに生育する。田んぼのあぜにもたくさん生えている。花はきれいなオレンジ色で、果実を食べるのだが球形で径約3㎝で黄色に熟し、酸味が強い。田んぼにあったものなどは、あまり実はなく、もし、さがしあてようものなら、緑色の若いうちに採ってしまったものだ。

ヌルデ　（ウルシ科）

この地域でシオデと呼んでいる。丘陵帯から山麓帯の道ばた、林縁に生育。実は平たい球形で全体に毛が密生し、熟すと白粉がつく。これが塩のようで、なめると「しょっぱい」のである。

ガマズミ　（スイカズラ科）

山麓帯から低山帯の林縁に生育。5～6月白い花が咲き、実は5ミリぐらいの卵形で赤く熟す。

オオマツヨイグサ　（アカバナ科）

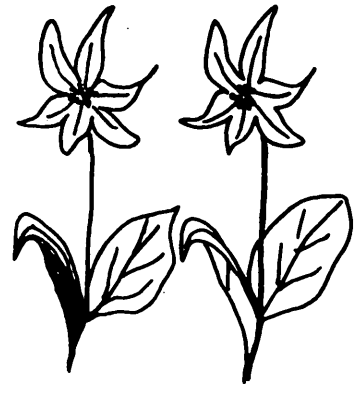
ツキミソウともいわれ、河川、鉄道、土手空地、荒れ地など、平地から山の中まで広域に生える。花茎が立つ前の地面にへばりついている葉と、夏、開花した花弁も食用となる。

アケビ　（アケビ科）

山、雑木林などにある。前田地籍の田んぼの川沿いの土手にもたくさんあった。秋、誰よりも早く果実を探しあて口が開くのを心待ちにしたものである。子供の頃ばかりでなく、大人になっても、アケビの藪に手をのばして、薄茶色や紫色の実をみつけた時の感激は同じである。果実ばかりでなく、春の新芽も食用とする。ほのかな苦味がまたいい。

カタクリ　（ユリ科）

平地から標高1500m以上の高山にかけ、カヤ場と呼ばれる斜面、林、土手などに群生する。ピンク色の花が美しい。若い葉を浸し物などにする。昔は地下の深部にある鱗茎を製し、かたくり粉をとった。鱗茎は掘りにくく、失敗する率が高いので、保護のため掘るのはやめたいところである。



オオバギボウシ　（ユリ科）

この地域では、コーレッパと呼び、付近の山へ採りに行く。山麓から標高1500mくら

いの高山の湿地水辺、湿ったガケなどに分布している。5～6月が採集時期で若い葉柄、花を利用する。

フジ　（マメ科）

河原・原野、林地の端、丘など平地から、標高1500m以上の高地まで分布している。前田地籍の田んぼの沢にもあった。開いたばかりの若葉はゆでてあえ物、つくだ煮など、花はゆでて三杯酢、みそあえなど、半開きのものをてんぷら等に利用する。

ヤマグワ　（クワ科）

山麓から標高1500mくらいの林地の周辺、原野、土手、川岸などに見られる。幼い頃、5月末から6月、熟した桑の実を採りに田んぼ、土手へ出掛けて行った。青黒い実の汁で、口の中も手もまっ青になった。

食べることの楽しみよりも、たくさん集めて、口や手をまっ青にすることの方が、おもしろかった気がする。

サンショウ　（ミカン科）

山沿いの平地から低山帯にかけ、林内、雑木山、がけ下など木陰を好む。新芽は5月頃伸び出し、果実は6～7月につき、秋、熟してはじける。昔から香辛料として知られている。

モミジイチゴ　別名　キイチゴ

丘陵帯から山麓帯の茂みや道ばたに生育する。花は1個ずつ下向きにつき白色。実は熟すと橙黄色になり甘い。

（カットは、飯島　一男氏のスケッチによる。）

クコ　（ナス科）

山麓帯の茂みや道端に生育する。茎はつる状、とげ状の小枝がある。花は淡紫色。果実は卵状長円形で長さ1cmくらいで紅色に熟する。葉は食べられ、実でクコ酒をつくる。

オニグルミ　（クルミ科）

山麓帯から低山帯の林内、川沿いに生育する。実は秋に採る。核果の核は硬くしわがある。核を割って中味を食べる。

クリ　（ブナ科）

秋を象徴する山の産物である。近隣の林などに生育し、6月頃に花が咲く。イガにつつまれたツヤツヤした茶色い木の実は、秋、山歩きの好きな人々の夢を充分満たしてくれる。干して貯蔵し、冬期にゆでて食べる。

（文責　横山　かよ子）

参考文献

中郷村史　　中郷村史刊行会

長野県樹木図鑑　　信濃毎日新聞社

長野県山菜・きのこ図鑑　　〃

第8章　古代人と対話して

今度の遺跡発掘のお話を聞いた時は、へえー他所の話かと聞いていたのに自分達の住んでいるこんな身近な処にあったのかと、びっくりするような好奇心が湧いて、ぜひ参加させていたゞこうと思いました。

梅雨明けの暑い毎日ですが、今度は……この次は……と期待でわくわくします。太陽に背中をやかれながら一日中土を掘ったり、運んだり、一生のうちで初めての楽しい経験です。そして遠い昔に想いをはせて、この時代に住んでいた人達はどんな髪型をして、どんな物を着て、何をして生活を営んでいたのだろう等、どんどんとひろがる想像に疲れを忘れて一日働いております。

またとない経験と勉強になりました。

（飯島　一男）

遺跡発掘に参加して今日で二日になります。初日は何かと様子がわからず大変でしたが、二日目にはだいぶ慣れてきました。

私の生れて育ったこの土地、西黒川北の台前田地籍、何千年前の祖先がいかに暮していたのであろうかと昔をしのびながら、スコップでひとつひとつを掘る度に感無量の気持です。この辺は館跡などと話し合いながら、心をこめて掘り返す楽しさ、玉の汗をふきながら土器の破片を手にしてにっこり笑をうかべて見合わす顔と顔、今度は何が出るだろうかと、今日も夢中で土を掘りました。

明日は何が出るだろうかと期待しながら。

（伊藤　春野）

日毎に進んでいく発掘の様子を眺めながらすがすがしい気持でいます。以前なら何でもない事ですが、今は機械力の時代に人力で仕事を進めることは、相当の努力が必要と思います。

私も二、三日手伝いのつもりで参加しましたが、仕事が進んでいくと、自然に愛情も湧いてもう一週間にもなります。勿論最後までお手伝いはできないと思いますが、大成功のうちに終りますよう祈っております。

（石川　久衛）

我が郷土の古い古い神々の生活の跡を尋ね、その当時を思考しながら、隣り近所の人々多勢で汗を流し、四方山話の中に知らなかった昔の勉強ができ、誠に良い機会に廻り合わせた事です。

住居跡の全体の模様及び生活様式等の報告されるのが楽しみです。

（近藤　祐）

前田遺跡発掘調査を指導されている島田主任外各位の真摯な学究には頭が下ります。協力する吾々にも大いに教えられるところばか

りです。

吾々協力者は、仮初めにも自己の存在を誇張する事なく、ひたむきにこの事業の成功を祈っている。

（高橋　孝美）

このたび前田遺跡の発掘に当り、実際にその作業を経験しまして思うに、大仕事であること、共に、大変に地味な作業であるのを具さに感じとりました。

日毎、先生のご指導に依りまして、掘っても掘っても何も見つからない時は、暑さもひとしおですが、往時を偲ぶ土器のかけらや、住居跡が発掘されるのを見ると、炎天下での作業の苦労をねぎらってくれるような思いです。

願くば、この遺跡の発掘をして牟礼村の歴史のページに、花をそえる事を祈念してやみません。

（横山　善介）

私がこの西黒川に嫁いできたのは、20数年も前の事です。高い土手の上に立って下を見た時は、大変なところに来てしまったと思いました。農作業をするにも目瞬をする様な高幅と段々田と坂畑で毎日がつらい作業でした。そんな畑作業の時、土の中から、小石の間から、赤茶けた土器の破片の様な物が出てきたのを覚えております。でも、其の当時は何の事はなく、小石ぐらいに思って居りました。

四年位前になりますが、耕運機で畑を起こしていた夫が土器の破片を見つけて家に持ち帰り、洗って見ておりましたが、「これは縄文土器ではないか。」と言っておりました。破片の表面には、縄でこすった様なしま模様があり、破片を5つ、6つ合せてみても、皿やつぼの形になるとは思えなかった。厚いところがあり、薄いところがあり、つなぎ合わせ様もない破片でした。こんな坂畑になぜ此の様なものが出て来るのかと思いました。

今になって、遺跡の発掘という事になり、此の辺に何千年というほどの昔に人が住み、生活の名ごりを現在まで残しているとは思ってもみなかった。各地に有名な遺跡はあり、多くの出土品があると聞いては居りましたが、すぐ目の前の北の台の田圃からも発掘され、出土品があった事は、驚ろきと共に苦労して掘った甲斐があったと思います。

先生方の熱心さに引かれ、私も一生懸命に掘り、土を運びましたが、土器片が一つ一つ出るごとに、疲れも忘れるほどの楽しい思いをしました。何もわからない私ですが、少しでも役に立てればと思いながら参加したのですが、いろいろと教えられる事も多く、一日の作業の様子を夕食時、家族と話し合って一時を楽しく過しております。

先生方の御苦労が報いられ、多くの人達に知ってもらい、私達に此の大仕事の成果を話していただく日を楽しみにしております。

（加藤しげ子）

今回の前田遺跡発掘に当って、昼夜をわかたぬ全力を傾けてこられた調査団の皆々様、現場における協力運営に当ってこられた役員さん、これを支える部落の正副総代さん、公民館の役員の方々に厚く感謝申しあげます。

六月末より具体的な企画と運営にはいり、7月17日より結団式と発掘にはいりましたが、作業に協力してくださった方々、重い廃土と乾燥した土塊に、約10日間はさぞ御苦労をおかけしたことと存じます。

発掘の進行に伴って、今後はテレビでごらんのような作業も出てくるのではないかと思います。重い作業にこりずに最後まで、地域の為、それぞれの皆々様の学習の為、頑張っていただきたいと思います。

生涯のよき思い出となることを夢みつゝ、また、子々孫々に伝えるためにも頑張って参りましょう。

（団長　青山　紫朗）

長い長い間
厚い土の下に埋れていた昔が
いま　まさに目の前にある
私の手に触れている
カンカン照りのお日様を
久しぶりにうけ
まぶしげである
私の汗が平安時代の土に黒い点をつくる
ドシャブリの雨は　私の背中を打ち
土器を洗い　土にしみこんでいく
人々の歩いた大地を
いま　私は踏みしめている

（横山　かよ子）

（以上、「まえだ遺跡通信」第1号・第2号に掲載されたものである。）

郷土の遺跡発掘を省りみて

西黒川総代　仲俣　俊夫

六月の末方、西黒川部落出身の文化財調査委員の方より、北の台地籍の基盤整備に関連して、前田遺跡の発掘についてご相談を受け、又、牟礼村教育委員会からも発掘協力者の依頼やら公民館の使用等について便宜を計ってほしい、との通知をいたゞきました。

文化財等については、全くの素人である私も、元来古きを尋ねることには深い関心を持っておりましたので、この地元での発掘には心から賛同し、古き時代の人々が何時頃からこの郷土の大地に住みつき、どのような環境の中で、どんな生活をしていたのかと、兎角他事であったこの事業に心のはずむ思いでした。

さっそく調査委員さん、公民館長さん等と相計り発掘事業に対する部落を上げての組織作りや協力者の人集め等について粗案を練り再度の役員会に於て出役者の日程表等も作成され、7月17日の結団式に向けて、老若男女を含めた協力体制が出来上りました。

発掘調査が始まるや、どんな物が出土するのか、全員胸をふくらませ、夢を画きながら郷土愛と相まって、楽しい作業が進められました。

出役者には、ご婦人の方も数多く見えた訳ですが、調査主任の島田先生が女性であられたこと等も幸いして、遠慮のない質問や気軽な話合いの中から、平常では出来ない珍らしい勉強を働きながら学び得ることが出来まし

た。

特に、発掘の忙しい最中に、「まえだ遺跡通信」と題されて、再度にわたり出土品やら住居址等々について、わかり易くお知らせ頂いた事は、後日の現地説明会・スライド大会復原した出土遺物の展示会等と併せ、部落の方々には大変幸いな意義深いことでした。

協力したいと申出のあった方々には、短い日程の中でその全部を消化出来なかったことは残念でしたが、和気あいあいの中に、一人の病人（日射病等）も出さず、郷土の歴史に大きな実証を得た事は、今年も良い事業が出来たと、関係各位の皆様に心から感謝している次第です。

副総代・森　孝雄

このたびの前田遺跡の発掘では、部落の一役員という関係で若干のお手伝いをさせていたゞきましたが、部落の大勢の皆さんの御協力を得て、無事終了しましたことに心から御礼を申し上げます。

最初心配された人手も、次から次と心よい御協力を得て、それこそ部落をあげての発掘となりました。

私自身も、もっともっと作業に参加したかったのですが、勤務の関係で思うようにならず残念でした。しかし、勤務の帰りに発掘現場を見るのが毎日の楽しみでもありました。

今、ほ場整備によって、昔なじんだ私たち郷土が大きく姿を変えようとしています。この機会をなくしては私たち郷土の歴史は一生解明されずに終ってしまいます。

千何百年もの昔、私たちの先祖はこの地でどのような生活をしていたのか、何故ここに住んでいたのか、素人の私には全く解らないことばかりですが、このような地道な調査研究によってひとつひとつ解明されていくことは誠に心強い限りです。

それにしても調査団の先生方には、厳しい条件の中で本当に御苦労様でした。

先生方の学問に対する厳しくも真摯なお姿は、部落の人たちに深い感銘を与えてくれたと思います。

大変御苦労様ですが、一日も早く立派な調査報告書が出来ますことを、部落の皆さんと共に期待しております。

おわりに

主任　島田　恵子

今回の前田遺跡発掘調査の特筆すべき点は、調査団と地元黒川地区の方々が一体となって、終始なごやかに勉強しながら調査を行なえたことであろう。郷土の歴史を知りたいという地元の皆さんの熱心な作業に対する姿勢は、遺物や遺構を通じて日毎に強くなり炎天下で地割れがする程のかたい土をもその情熱で掘りあげてしまった。そして作業の進展を常に考え、地味で苦労な陰の作業を自主的に受けもって下さったのも地元の方々でありました。

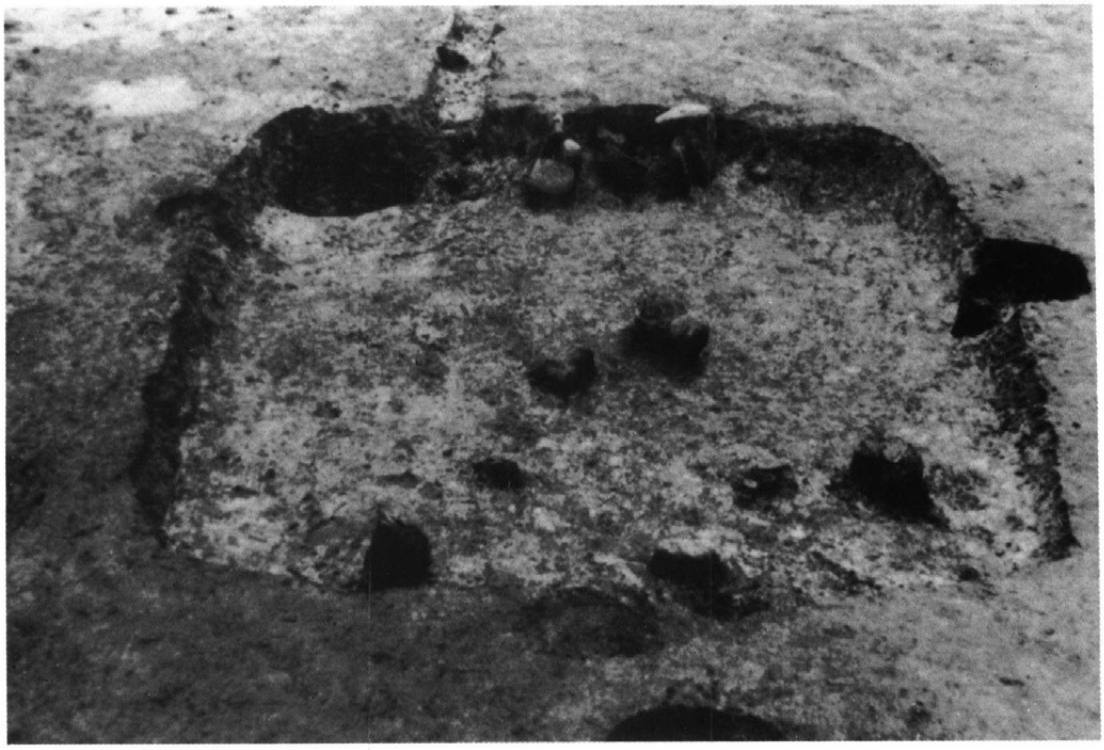
また、報告書作成の繁雑な作業を佐久の自宅に持ち帰り、日曜もお正月もなく深夜まで行なっていた私を励げましてくれたのも、黒川の皆さんでした。報告書発行にあたり、あたたかい御協力を終始いたゞきましたことに、心から敬意を表し、感謝申し上げます。

1　前田遺跡近景（前方に前高山を望む）

2　前田遺跡近景（前方に八筒山、斑尾山を望む）

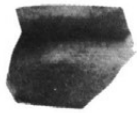
3　前田遺跡北西区遺構全景（溝址、Ｄ１～Ｄ３号、配列ピット、Ｈ１号、Ｈ２号、ピット群）

図版二

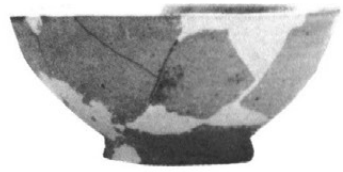


1　Ｈ１号住居址

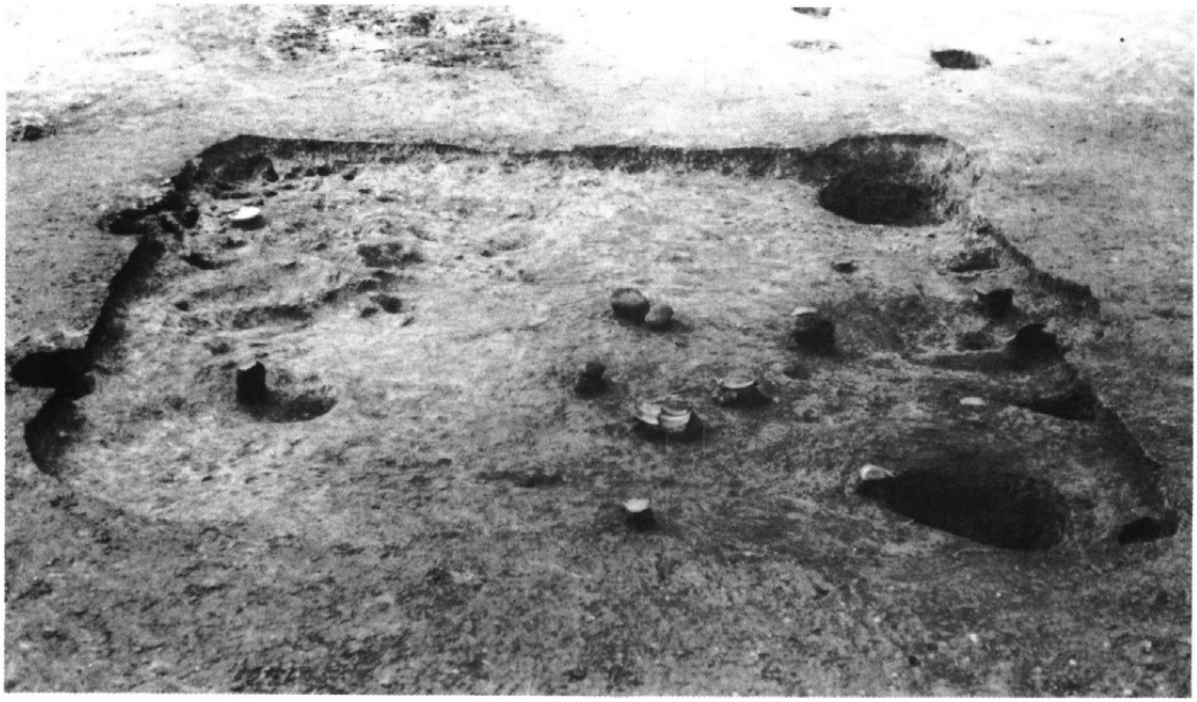
2　Ｈ１号住居址カマド


7－1

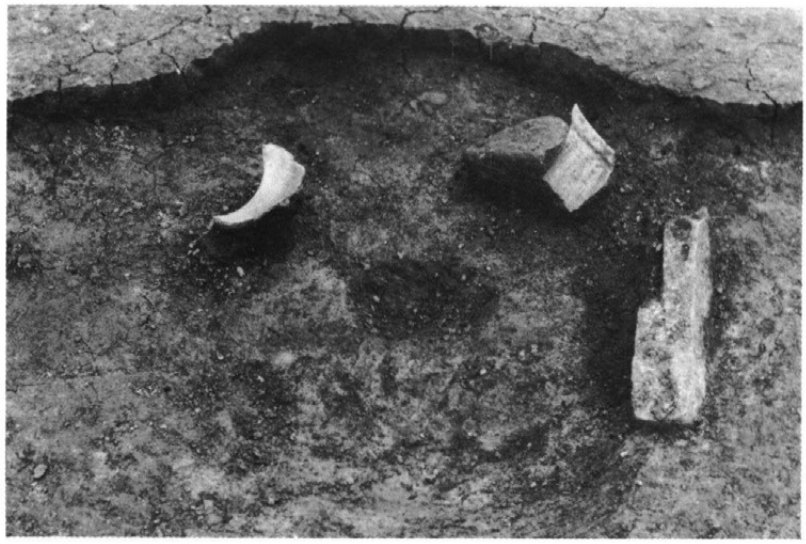
7－2


7－3

1　Ｈ１号住居址の出土遺物



2　Ｈ２号住居址



3　Ｈ２号住居址カマド

図版四

10－1

10－2

10－3

10－4

10－6

10－11

10－12

10－13

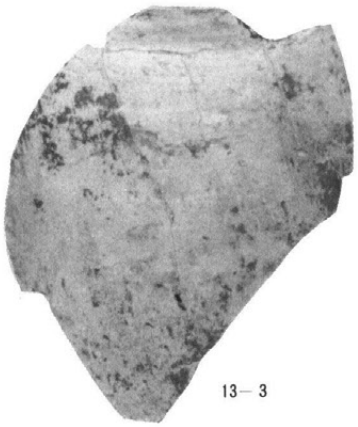
1　Ｈ２号住居址の出土遺物

2　Ｈ３号住居址

1　Ｈ３号住居址カマド

2　Ｈ３号住居址の出土遺物

図版六



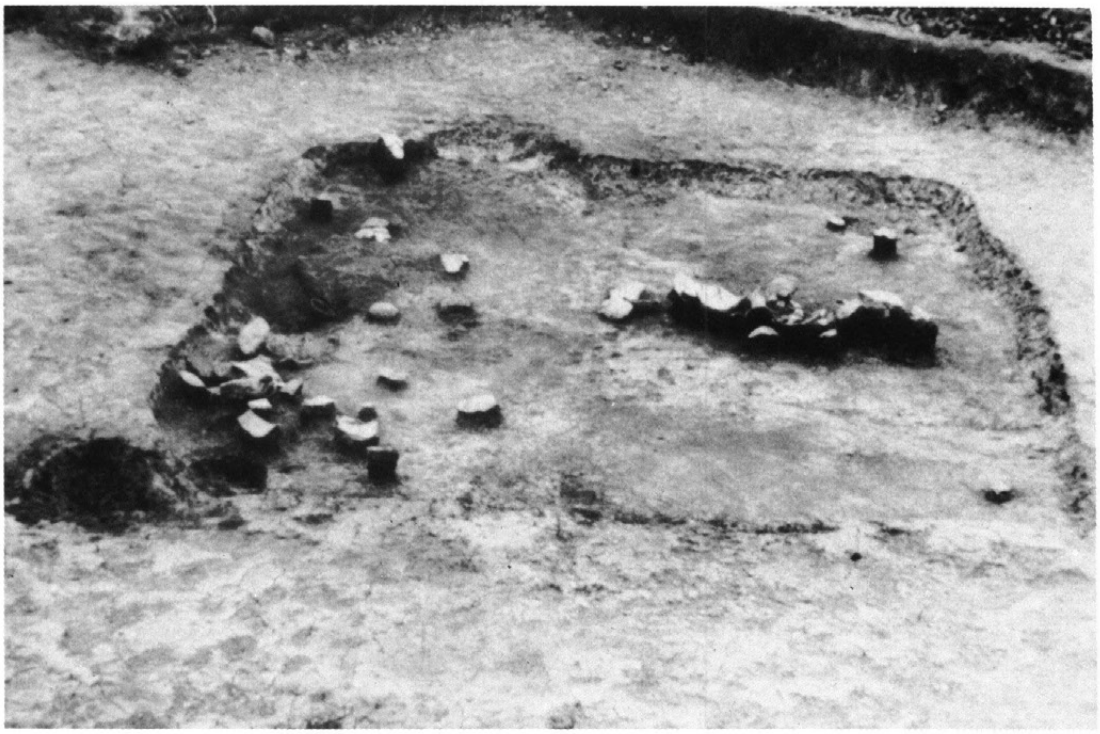
13－3

13－4

13－5

鉄滓

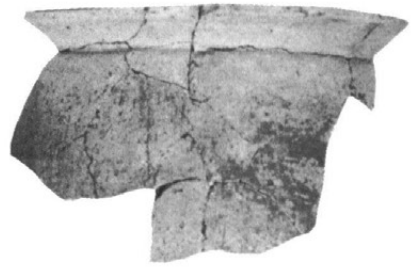
1　Ｈ３号住居址の出土遺物



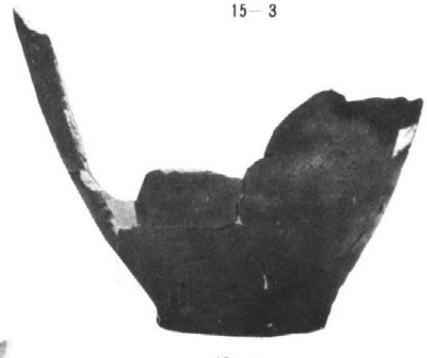
2　Ｈ４号住居址

15－1

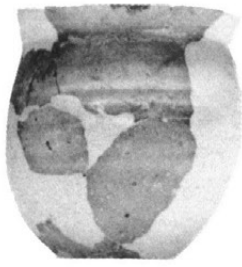
15－2



15－3



15－4



15－5

15－8

15－11

15－6

15－9

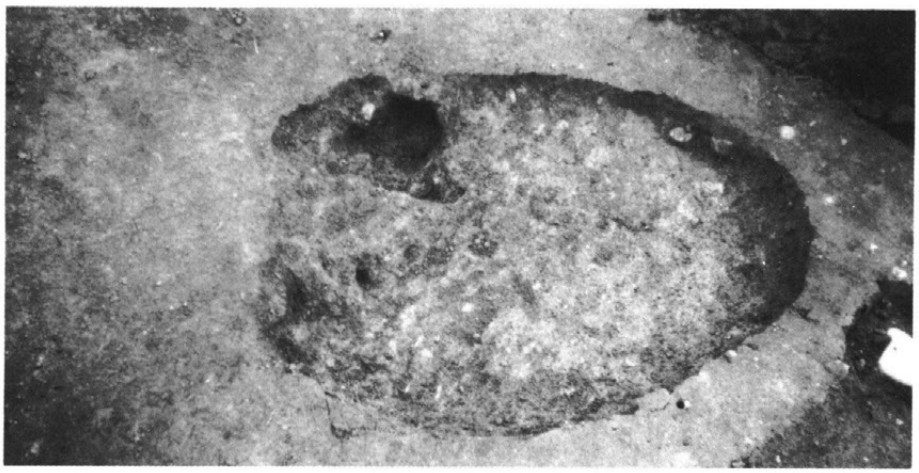
15－12

15－7

15－10

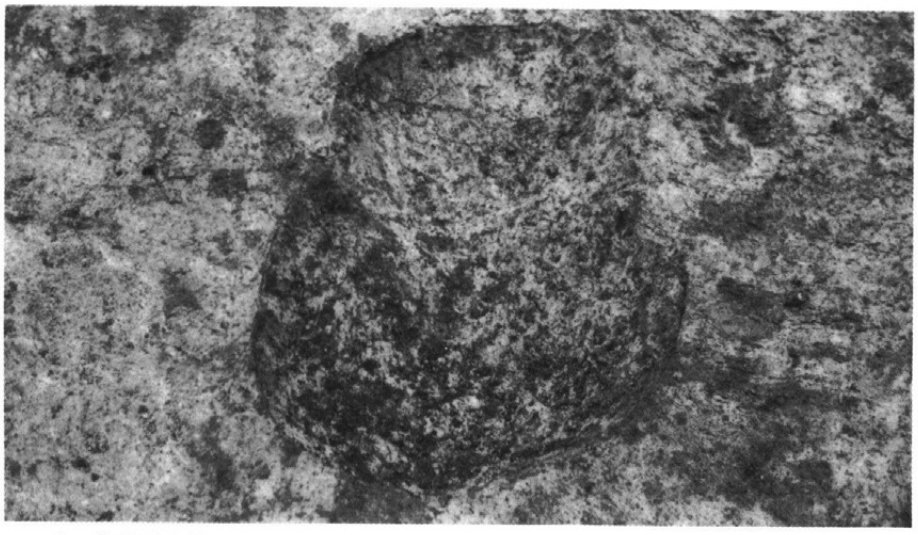
1　Ｈ４号住居址の出土遺物

図版八

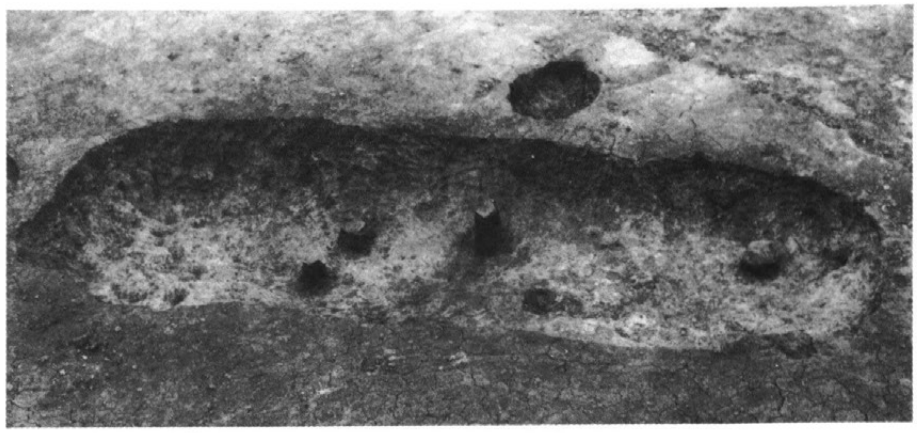


1　Ｄ１号土坑

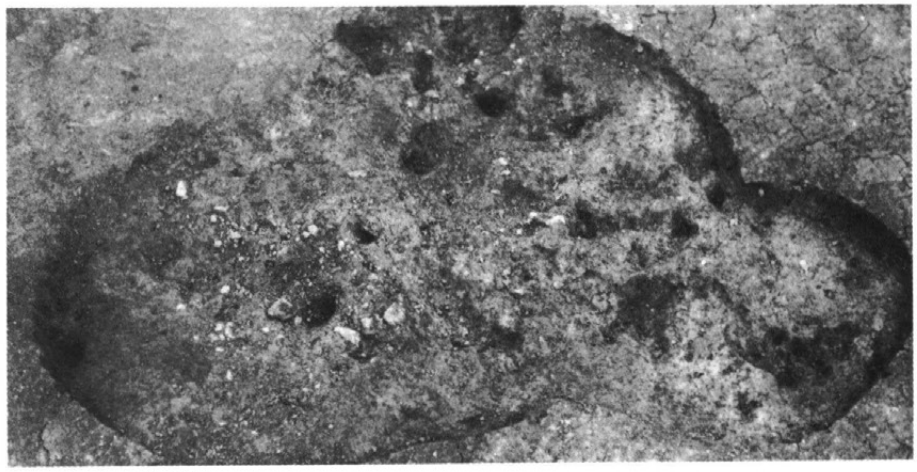
2　Ｄ２号土坑



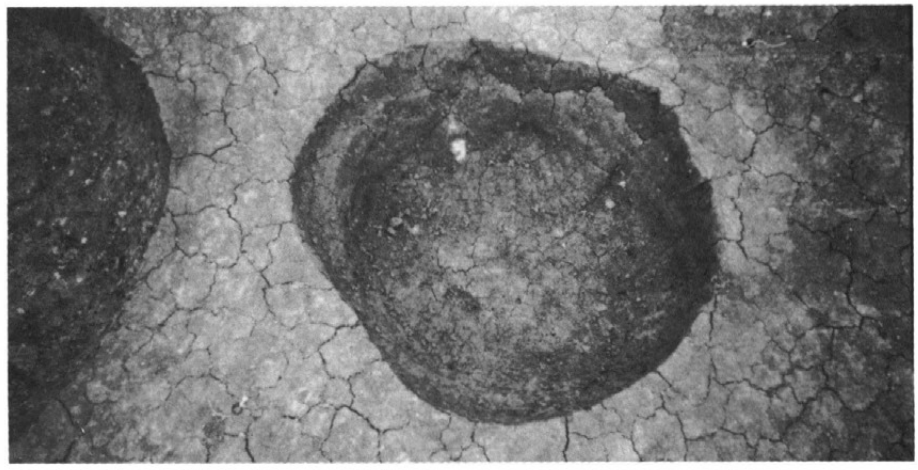
3　Ｄ３号土坑



1　D 4 号土坑

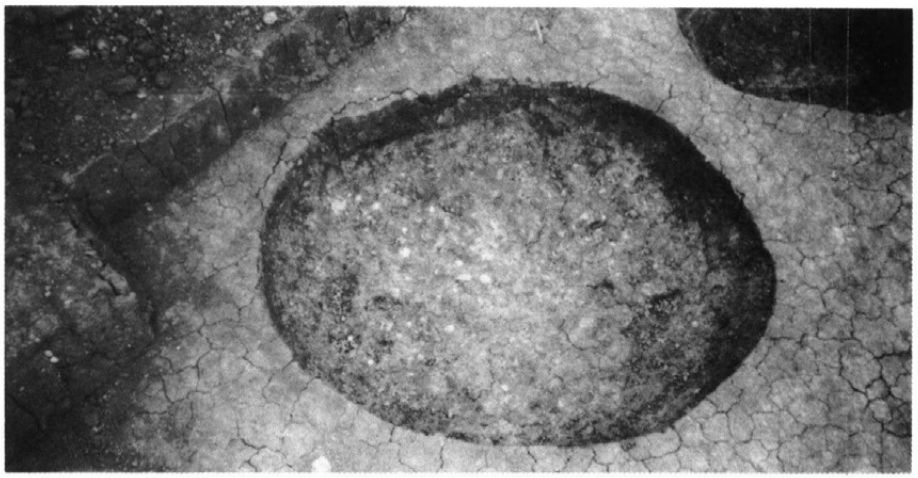


2　D 5 号土坑

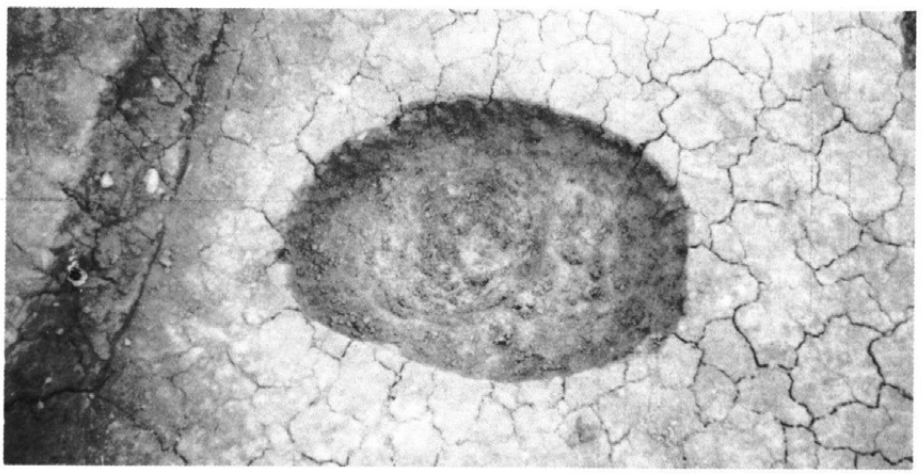


3　D 6 号土坑

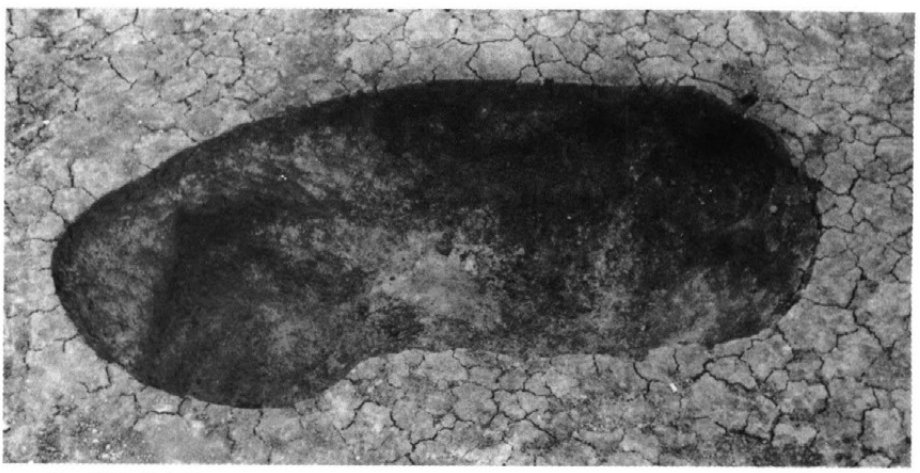
図版十



1　D 7号土坑

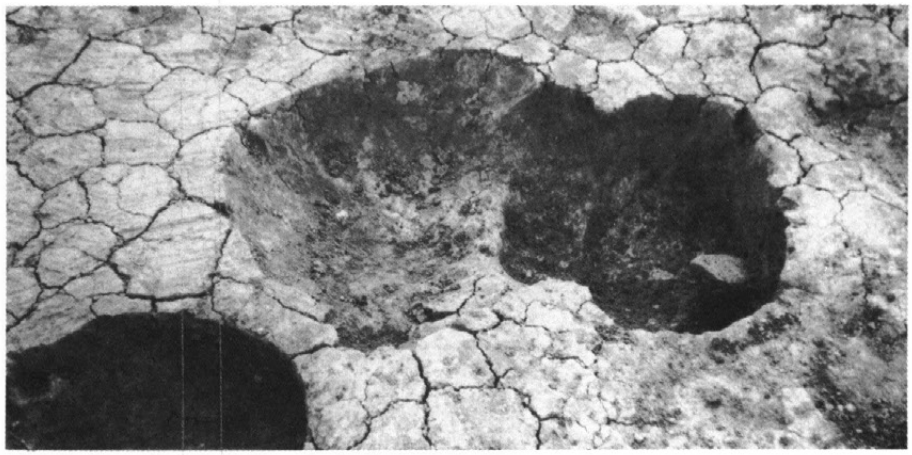


2　D 8号土坑



3　D 9号土坑

1　D10号土坑



2　D11号土坑

D11号土坑の出土遺物

D3号土坑の出土遺物

20－1

30－1

30－2

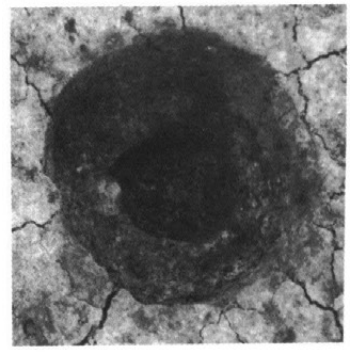
30－3

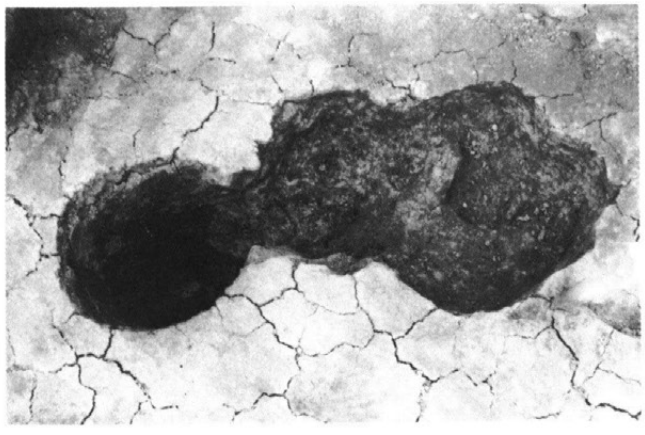
3　土坑出土遺物

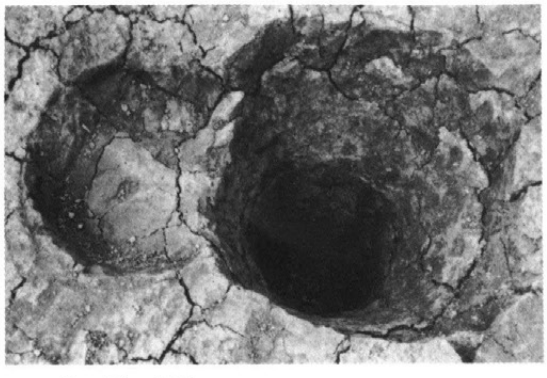
図版十二

1　溝址

2　配列ピット







1　ピット群

32－1

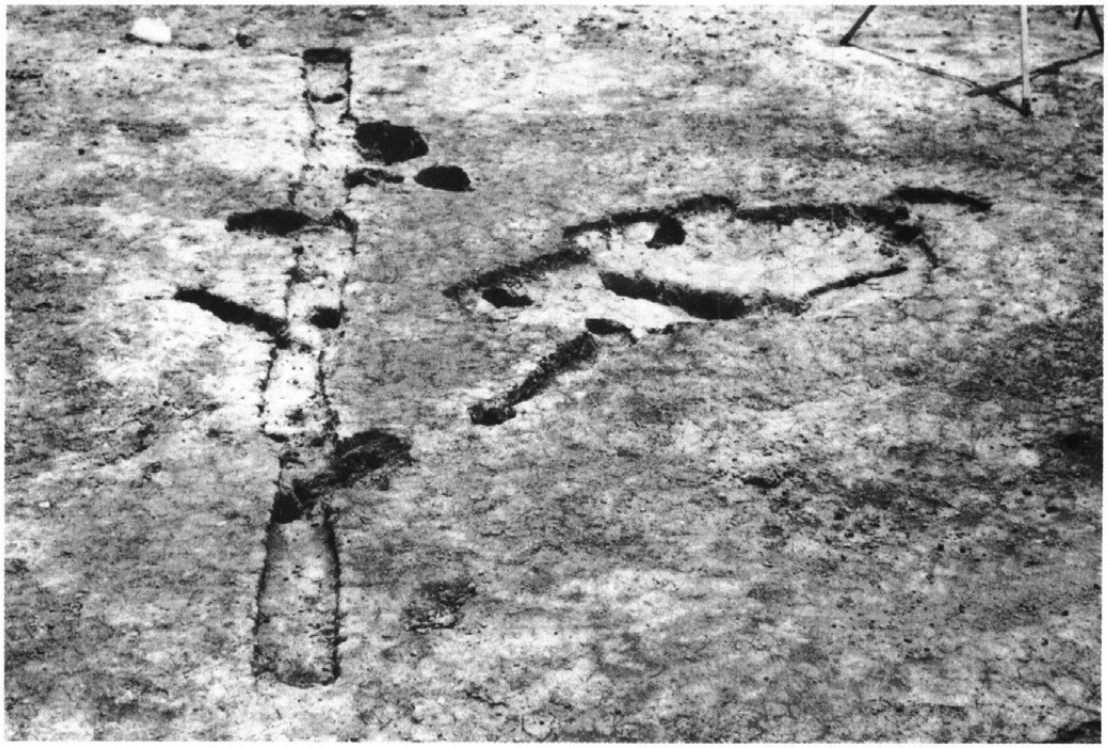
32－2

2　溝址の出土遺物

34－1

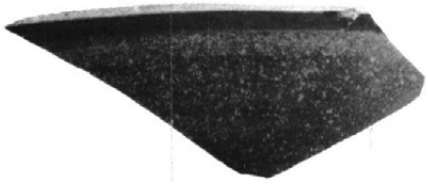
3　配列ピットの出土遺物

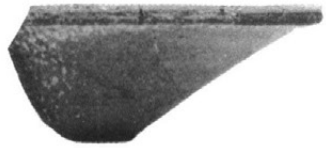
図版十四



1　風倒木

2　ロームマウンド


39－1


39－2

39－3

39－4

39－5

39－6

40－24

39－7

39－12

39－17

39－18

39－21

39－22

39－23

41－25

42－1

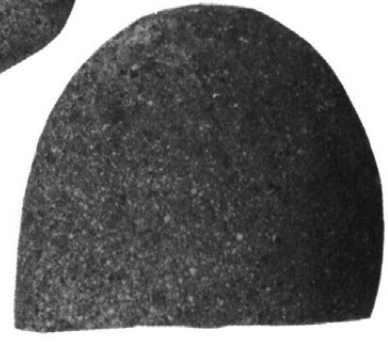
42－2

42－3

42－4

42－6

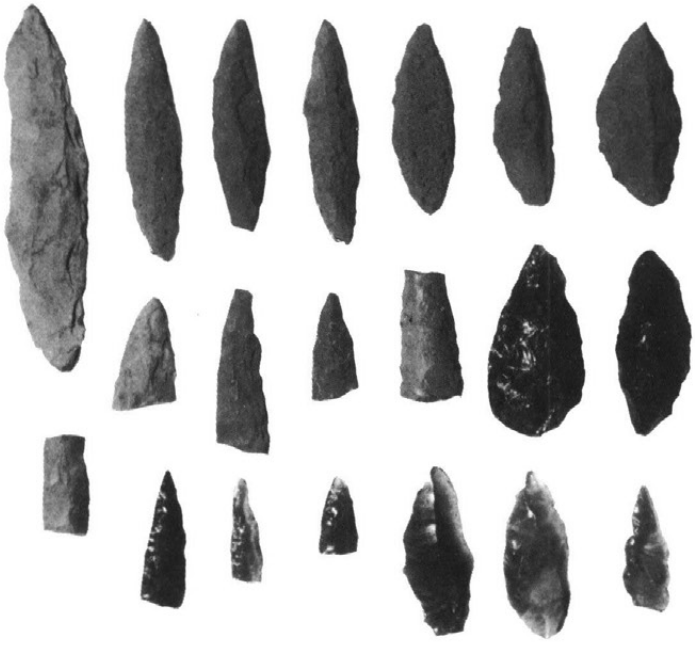
42－7


42－5

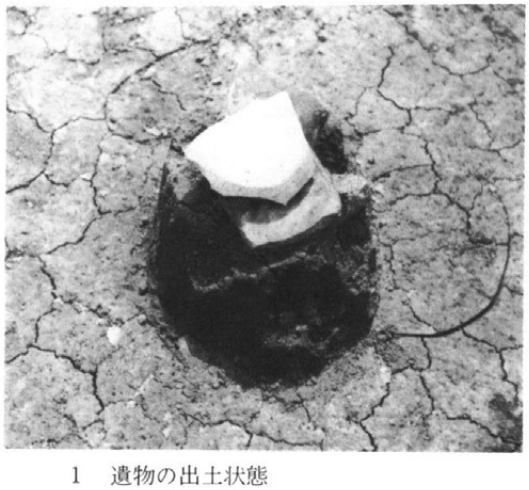
1　包含層出土遺物

図版十六

1　包含層出土の縄文土器

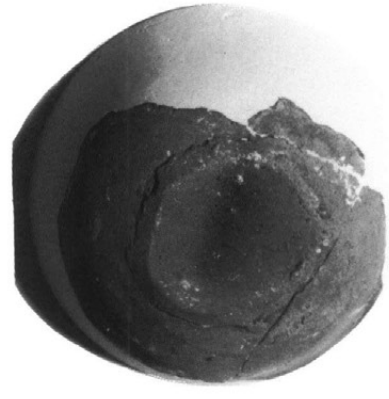


2　牟礼村上村(だつま原)出土の先土器時代遺物

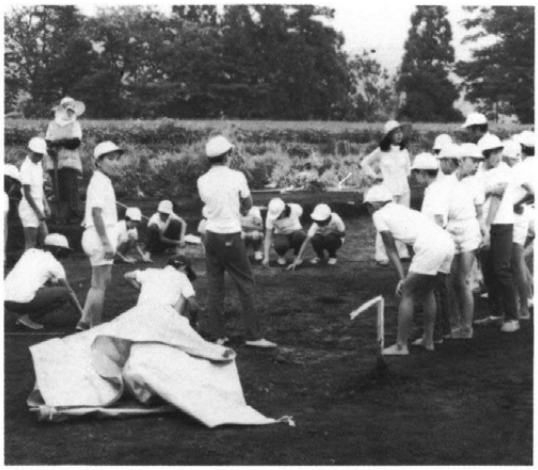


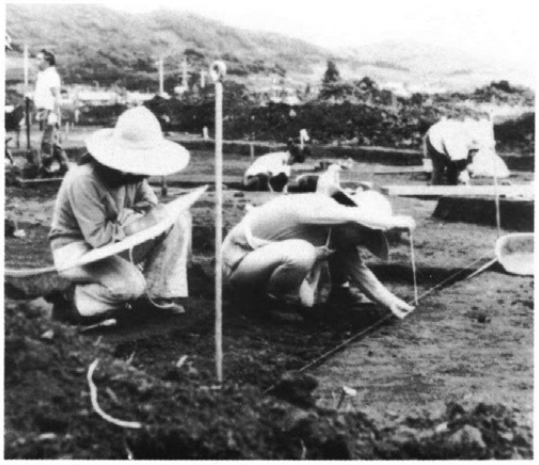
1　遺物の出土状態

図版十八



1　土器底部製作技法





1　発掘調査スナップ

図版二十

1　発掘調査スナップ

前　田　遺　跡

発　行　1981年3月17日

発行者　長野県上水内郡牟礼村
牟礼村教育委員会

編　集　前田遺跡調査団

印刷所　株式会社　佐久印刷所